行は凛として千萬年の後にも輝いてをります。

人に對する敬

六。かく凡ての物の上に又凡ての事の上に、たふとさを認むる、いかにして人の上に、たふとさを認めずにをられやうか。同信の人は申すまでもなく、廣く一切の人が皆輕からぬことが、感せらるゝ。或西洋の人は奉天の會戰に於ける大山巖氏の戰略を評して、一大美術品であると申したといふことであるが、戰略のみでない、この將軍自身の上にも美しい光彩がある。將軍のみならず、五十萬の將卒の一一の上に亦同じやうに麗はしい光彩があらはれてをる。たゞ此等のみではない。白髮の老翁、紅顏の嬰兒、皆同じやうに尊い。古は道に乞食を拜まれた高僧があつた。一切の人格、皆私に對して過去及び現在に多くの導きと恩とを與へ又行末に之を與へてくるゝ。世上の男女が墮落の淵に沈むのは、互に其人格に對する恭敬の念を失うて、互に他を輕んじ他を禽獸のやうに視る故である。禽獸を賤しむる心を以て人格に對す。其道を誤るのは當然である。「敬は德の輿なり。」釋尊は、諸の衆生に於いて佛の想をなせと、『首楞嚴三昧』に仰せられてある。『大經』には、諸の菩薩が其法を多くの人に施すこと、ちやうど孝子が父母を愛敬するやうであると、仰せられてある。すべてを父母のやうに思ひ佛のやうに思ふ。人格に對する此恭敬は私共をして自ら德に進ましめます。絕對無限の至德の大御心は私共に此恭敬の心をあたへ、此恭敬の心は私共の上に至德の光をあらはさしむるのであります。

七。清澤先生の遺訓は私共に尊い指圖を與へられます。

宇宙萬有の千變萬化は、皆是れ一大不可思議の妙用に屬す。而して我等は、之を當然通常の現象として毫も之を尊崇敬拜するの念を生ずることなし。我等にして智なく、感なくば則ち止む。苟も智と感とを具備して此の如きは、蓋し迷倒ならずとするを得んや。「絕對他力の大道。」

各自の對境を以て無限絕對と觀念すべし。各自の事業を以て絕對無限に對する行業と觀念すべし。各自の任務を以て絕對無限の命する所の職分と觀念すべし。各自の使用する所の器械を以て絕對無限の附與せる所の用具と觀念すべし。各自の運用する所の材料を以て、絕對無限の給與せる所の物品と觀

念すべし。各自の往來する所を以て、絶對無限の領地と觀念すべし。各自の對する所の人士を以て、絶對無限の道はせる所の使節と觀念すべし。各自の應答せる所の云爲を以て、絶對無限に對するの云爲と觀念すべし。各自の獲得する所を以て絶對無限の恩賜せる所の惠與なりと觀念すべし。畢竟、絶對無限は、常恒不斷に我の四邊に殿臨して離れざるを觀念し、我は常恒不斷に其恩波に浴しつゝあることを觀念すべし。至誠の心、感謝の情は、泡然として湧出すべし。而して改悔懺悔は歡喜慶喜と交互して、精策の功を奏すべきなり。

資生産業、皆是佛道。
汝等所行、是菩薩道。
朝與佛起、夕與佛臥。
身體髮膚、之を父母に受く、敢て毀傷せざるは孝の始なり。然り身體髮膚之を絶對無限に受く、敢て毀傷せざるは報恩の始なり。身體髮膚は絶對無限の恩賜なり。決して我物にあらざるなり。身體髮膚、尚且我有にあらず、況んや之より外他なるものをや。四圍の物件一として我有なるものなく、一として絶對無限の有ならざるばなし。何物をか取て以て我有と執着せん。徹底無

一物の觀念に住して而も絶對無限を辱しめざるの行爲に出づべきなり。絶對無限の恩賜に假り、絶對無限の使命に從ふべきのみ。―「有限無限錄」。

八。

嗚呼、私共が當然通常の現象として、毫も之を尊崇敬拜するの念をもたなかつた宇宙萬有は、物も事も人も皆是れ一大不可思議の絶對無限の御慈悲の妙用を離れぬものであつた。洵に「そらごと、たわごと」であつて誠といふものは一つもない此宇宙人生には、それが皆そらごとであるがために、たわごとであるがために、誠といふものは一つもないがために、今は誠の大御光が隅より隅にはてよりはてに充ち溢れて下さるのである。世界は是に到つて、それ自身では汚くして而かも佛において清らかである。荒野も草屋も、それ自身はむさくろしいが、月光を浴びるとき皆畫の如く、美いやうに人生はそれだけでは價なきものであつて而も御慈悲の御光によつて尊い。「白露のおのがすがたをそのまゝに紅葉におけば紅の玉」落莫たる沙漠のやうであつた三界は、茲に大御光の上において至德の風韻なる光明の廣海である。私共

不退の前進

は今までは彼の沙漠に泣き迷うた流浪人であつたが、今は此廣海に泛んで淨土の親里にかへる如來の寵兒であります。

九。 この境に進んで見れば私共は、もはや自分の行先について何の懸念もいりませぬ。秋の雲は動きやすくとも大空は動かぬ。たとひ大空は動くことがあつても、如來の大御心は變らぬ。かはりづめの私も、かはらぬ御力に懷かれて進む上は、もはや私に全たくの墮落はない。眞の退却はない。だゞ眞實の向上のみがある。今まで自ら一善勤めた事もなく、一行勵んだ覺もなくして、而も如來の御力に導かれて、一歩一歩大覺の地に近づくのである。一息一息に佛果の位に進むのである。身、車の中に在りながら、その進むを覺らずして、時に退くのではあるまいかと氣遣ひ、時に動かぬのではないかと愁ふるは思の至である。「子を知る者親に如かず」。私を凡て知らしめす御佛は凡て私を宜しきやうに導かせたまうて其御手を休めさせたまふことはない。此御力によつて、私共は横に地獄、畜生、餓鬼、人間、天上などのいやしき迷の五道をたち超えて、たゞふとき光明の御淨土を前に望んで、我がために開かれたる本願の大道を眞直に勇み進むのである。是に於いて、もはや私共の入るべき地獄の門はない。惡趣の戸は私共に對しては閉ぢられてある。私共の運命は、否でも應でも、淨土往生の身の上と定められたのである。

一心一向に、彌陀一佛に歸命する衆生なれば、いかにつみふかくとも、佛の大慈大悲をもてすくはんとちかひたまひて、大光明をはなちて、その光明のうちに、おさめとりましますゆへに、このこゝろを經には光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨とときたまへり。されば五道六道といへる惡趣にすでにおもむくべき道を、彌陀如來の願力の不思議として、これをふさぎたまふなり。このいはれをまた經には、横截五惡趣、惡趣自然閉ととかれたり。かるがゆへに如來の誓願を信じて一念の疑心なきときは、いかに地獄へおちんとおもふとも、彌陀如來の攝取の光明におさめとられまいらせたらん身は、わがはからひにて、地獄へもおちずして、極樂にまいるべき身なるがゆへ也―「御文」

『梵網經』に、仰せられてある、「大衆心に諦に信せよ、汝は是れ當成の佛、我は是れ已成の佛なり。常に是の如き信を作せば戒品已に具足す」と私

共願力の攝取によつて、この高大の確信をいたゞくことのできるといふことは、何たる光榮でありませうか。

（五）我等は正に世の花なり

一切善惡凡夫人、聞信如來弘誓願、
佛言廣大勝解者、是人名芬陀利華。

【讀方】一切善惡の凡夫人、如來の弘誓願を聞信すれば、佛廣大勝解の者とのたまひ、是人を芬陀利華と名づけたまふ。

【字義】一。勝解とは勝れたる智慧といふことである。解は了解力のことであつて即ち智慧のことを申すのである。二芬陀利華とは梵語、白蓮の花である。「散善義」には「分陀利」といふは、人中の好華と名づけ、亦希有華と名づけ、亦人中の上上華と名づけ、亦人中の妙好華と名づく。此華相傳へて、葉華と名づくるもの是なり」と說き明されてある。

【大意】善惡をとはず、一切の凡夫、如來本願の御旨を聞き信じたならば、

勝解の名義

芬陀利華の名義

釋尊に、之を「大經」の會座では、廣大勝解の者とほめ、「觀經」の會座にては、「若し佛を念ずる者は、當に知るべし、此人は是れ人中の芬陀利華なり觀世音菩薩、大勢至菩薩、其勝友となりたまふ。當に道場に坐して諸佛の家に生まるべし」とたゝへさせられた。

【文科】信心の功德の第五として、私共は此世の花たるべき身の上を與へられてあることを宣べたまふ。

一。獨り旅路に在る時に花に逢ふといふことは、餘程、心にぎはしく感せらるゝものである。どれほど行いても家一軒も見えなければ人一人にも遇はぬ。見ゆるものは、唯上には漠々として頭を抑へつけるやうな雲があるばかり、下には面白味の少いやうな小笹が生ひ繁つてをるばかりで心が何となう寂い〳〵暗黑の底へでも落ち行くやうに思ふ時に、若しも道の傍に、たとひ名のないやうなものでも、小い花が靜にほゝゑむでをるのを見出しまするとなく友達にでも逢うたやうな氣がして、直に自分が生き返つたやうに感ずる。而して其落莫た

人生の花

る荒野がこの小い花のために、俄に麗はしく裝はれて俄に賑はしい世界になつたやうに思はれます。一輪の花でさへ、さうである。まして澤山にさきそろうてをる色々の花を見たならば、私共は全く旅のつかれを忘れてしまふのであります。

二。私共が信念の天地に進んでより、此人生について味ふ趣が亦之に似よつてをる。一たび人生の問題に心が觸れてより、寂寞の思が、潮のやうに胸の底にさし込んで參つて抑へることができぬ。色々の奬勵をも聞き、さまざまの忠告を受けても心を引立つることができぬ。いはゆる國家の進歩、社會の發達、盛に此等のことの營まるゝのを眼に見てをつても、心は少しも慰められぬ。ちやうど落葉の激しく散り亂るゝ中を通る時のやうに騷しい有樣を前に見ながら、喧い音は四方に聞ながら、世の中が何となう荒野のやうに思はれて、我胸はそゞろに抑へ難い寂しい思に自らせまつて參る。殊に斯くまで世の中の價値ないことを觀ずる自分が、やはり同じやうに價値ない者であることを觀じて來ると、恰も獨り自分が幻のやうになつて、やはり幻のやうな荒涼たる沙漠の夜に彳むでをる如き思に撲たれずにをられぬ。然るに何たる幸であらうか。沙漠の路に花があつた。落莫たる此人生の荒野にあつて不思議の因緣に導かれて、私共は如來の弘き御誓の旨を聞信して、大慈悲の光を觀じた。而して、ちやうど先づ夕暮の空に宵の明星を見つけた者が暫くの間に其明星の周圍に、たくさんの星を見つけるやうに、一たび御慈悲の御光を觀じて見れば、その御光のために四方に又多くの光のかゞやくのを認めずにをられぬ。即ち凡ての物の上に又事の上に、又人の上に世界人生の全體の上に、遍く御光の行き亘りたまふことを觀せずにをられぬ。花は一輪のみではなかつた、光は天地に漲つてをる。私共は此光明の花園にあつて、今までの寂寞を忘れまいと思うても、もはや忘れずにはをられませぬ。

三。かくの如く、信念の天地にあつては、物もたふとく、事もたふとく、人もたふとい。外物外界皆たふとい。さらば飜つて自分は、どうであ

るか。自分は相變らず賤しむべき點ばかりのものであるか。否さうでない。今はこれが極めて〳〵たふといものとなつてをる。固より罪の垢は猶私を離れぬ。迷の餘習は私を煩はしてをる。けれども今世界を見れば萬物は我がために働いてをる。萬の事象萬の人々皆我がために骨折つてをる。如來は此廣大の天地を統理し、此無數の萬象を率ゐて、たゞ私一人を救はむがため導かむがために御力を盡くされてある。而して今自分の稟けてをる此信念亦我力に本づくものではない、一に如來の御回向である。されば自分は全く如來の經營の焦點であつて、正しく大千世界の中心である。中心がなければ、物は成立たぬ。我がなければ、我が世界はない、我が如來も在まさぬ。我あつて我如來の大道の旨が分り、我世界に意義があらはれて來る。自分は世界にたつた一人ゆゑ、若し自分がなかつたならば、自分のやうなものを如來は御たすけ下さるといふことを、どうして他に示すことができやう。攝取の御力の無限であることを證明するには、是非とも自分が其一人に加はらねばならぬ。自分は實に如來の御力については大切な證明者である。如來の大道に旨あらしめ、この大世界に意義あらしむる神聖な器である。是に於いて世界人生が其自身では價値なくして而も御慈悲の加はらせたまふがために尊い價値をあらはして參るやうに、自分も亦自分だけでは、全く惡魔の奴隸であつて、而も今は如來によつて、その神聖なる愛兒である。十方の世界を盡くして充ち滿ちたまふ御慈悲の光は自分の上に集められてをる。自分は其御光を以て飾られてをる。今より二千四百年の前釋尊が靈鷲山の上に於いて一萬二千の大衆に對して稱讃なさつた「廣大勝解者」の名と、其後王舍城の宮中で尊者阿難と、王后韋提希とに對して讃歎なさつた「人中の白蓮花」の名とは、啻に古の同朋のみが受くべきものではない、正に今日の私共今茲に佛の御力を感じて斯道をかたらひつゝある私共の上に、賜はつた所の榮光の冠であります。

自己の價値

四。 かく申しますると私共は信念をいたゞいたとて、やはり今まで

神聖の智慧

のまゝの愚かなものである、又た汚れたるものである、かやうな尊い稱讃の名を享くべきものでないといふものがあるかも知れぬ。けれども私共は、かく自から卑むではならぬ。固より私共は愚かである、けれども今私共は一信念の光によつて、自分の愚かなことが愚かなと分り、弱いことが弱いと分り、汚れてをることが汚れてをると分つたではないか。即はち是れ眞實の智慧ではないか。又此愚癡汚劣の徒らものをたすけたまふ大慈の如來の大御心に氣がついてをるではないか。これほど尊い智慧が外に何處にあらうか。加ふるに此如來の御慈悲によつて行先は必ず安養の御淨土にちがひないといふことが知れ、隨つて此人生は私を此御淨土に導きたまふ尊い門口であるといふことも知れてをるではないか。實に是れ高大なる智慧ではないか。母が自分で縫うた新い衣を其子にきせながら、おゝ美い子であるというて、ほめそやすが如く如來は他力の一信念によつて、この廣大の智慧を私共に與へて置て而して私共を廣大勝解の者よとほめたゝへたまふのである。自ら戰くばかりに汚れてをる我胸の泥田の上に南無阿彌陀佛の御名の種を下して清淨の信念の花をさかせておいて、而して私を人中の白き蓮華である、上人である、上々人である、好人である、妙好人であるとほめたまふのである。思ひ來れば私共はたゞ〳〵御慈悲のあまりに宏大なのに感泣するより外はないのであります。

「觀經疏」の「散善義」

如來の華自己の華

「安心決定鈔」

五　私共は恐多けれど、今や人の世の花である。この花は我が自らさかしめたるものではなくして、如來の御慈悲の花によつて開らかせていたゞいたものである。「佛心を蓮華とたとふることは凡夫の煩惱の泥濁にそまざるさとりなるゆへなり」。無限大悲の正覺の華が、その實を一つ一つ私共の胸に投げたまうて、此處に此花を開かせて下さつたのである。されば私共は皆限りない佛心の大いなる花の中にさいた小い花である。彼の聖賢といふ花が、皆大なる佛心の花を裝ひ奉つてをると同じく、この私といふ小い花も亦同じやうに大御心の花をかざつてをるのである。何といふ尊いことであらうか。加ふるに花一た

び墻にさいたならば、其色は道を通る人の眼を喜ばせ、其香は隣の家に清きかをりを傳ふるにちがひない。此度私共に開いた佛心の花が、どうして其清らかな色香を私共の周圍に及ぼさぬことがあらうか。「眞實信心を獲得したる人は、かならずはにもいだし又色にも其すがたは見ゆるなり」

「御文」

染香人のその身には、香氣あるがごとくなり。

これをすなはちなづけてぞ、香光莊嚴とまふすなる。―「和讃」

一たび王后韋提希の心にかゞやいた佛心の光は、猛火の枯草を燒くやうに、其まゝ末代數億の人心に傳はつた。されば私共に香光莊嚴をあたへたまうた此佛心、又他人に匂ひ他人に薫らぬといふことはありませぬ。罪の臭は自分の上にも他人の上にも漲つてをる。煩惱の淤泥は、我をまはつて世の中に充ちてをる。けれども白き蓮の花が泥の田の中に清らかにさきいづるやうに、私共の信念は此煩惱罪惡の塵の世こ清淨の風を送り出すのである。嗚呼、自ら卑むでばかりをるのは、佛智を卑むのである。私共は、一面卑い者であつて、一面たふとい者である。この價値なきやうに見ゆる五尺の身是れ今や此世に於ける如來の御使である。「經をたもつ者は、即ち是れ佛身をたもつなり、即ち是れ佛事を行ふなり當に知るべし是人は即ち是れ如來の使なり、諸佛の衣の覆ふ所なり、如來の眞實の法子なり。」如來によつて私共は今や「常行大悲」の聖職に在る者である。人生の警覺者である。大悲の證明者である。今までは、あだなる煩惱の奴であつた者、今は花のやうな佛心に護られ、花のやうな御光に裝はれて、まだ道を知らず、御慈悲を心えぬ人々の胸の中に、此花をうつし植えむがために進むところの園丁である。私共は、あらゆる事緣を用ゐ、一切の機會をはたらかせて、この大使命を果すことを望んで進み行く者であります。『大經』の卷上の將に終らうとする所に、如來の淨土のありさまを示したまうて、一の華の中より三十六百千億の光を出し其一一の光の中より、三十六百千億の佛があらはれて其諸佛各普く十方のために微妙の法を說いて衆生を佛道に

「觀普賢經」

「御本書」の「信卷」下

入らしめたまふと仰せられてある、が、このありさまは、彷彿として私共の現在の上に實現せらるゝのである。人生の花たる私共のすがたは一様ではないけれども皆同一の佛光を具ふるに到つては同じである。而して此光は其中に無量の御德を具へたまふ故、一一の花たる私共の信念より此色々の御力があらはれ、各其中に佛心の御旨を示して、廣く十方にゆき亘つて、現代及將來の人心を啓き導いて皆共に佛道に入らしむるのである。彼の淨土にあつても、花は光を出し光は佛をあらはして、衆生を導く。此の穢土にあつても、我が此の花は世に光を示し、この光は佛の御心を傳へて多くの人をめぐむ。淨土と穢土と遠く相異つてをりながら此土に於いて私共は彼土の面影を見ることができるのであります。

六。是に於いて私共の存在は、今や大なる旨をもつてをる。他力の宗教は日々の生活の意義を亡くし、はては自分の存在の價値をも否んで、此世を空漠なものにしてしまふと謗る者が、世にあるけれども、此等は少しも此信念の中のあぢはひを知らぬ者である。如來の眞實の子として我が爲す行動は即ち如來のなしたまふ大行の一分である。則ち我が行動に眞實の意味が加はり、我が存在に大切の意味が加はる。喫茶喫飯、これ、佛事であつて私共の一擧手一投足皆是れ如來を離れず、如來に在て、一々是れ如來の照鑒したまふ所の大行である。それ故人は我行のつまらぬを哂ふとも、私共は人の語に顧るよりは、先づ如來の御語に耳を傾けて唯々常に親しく我心にさゝやき親しく我手をとつて導きたまふ如來の大命に從うて進むより外はありませぬ。一念の獲信も歸命の二字に本づくと同じく、後念の相續も亦この二字より外はありませぬ。

一念後念共に歸命の二字也

七。嗚呼罪深く、障重く、極惡底下の身と自ら見さげはてゝ居つた私共今や何たる幸であらうか、(一)如來の本願についての唯一喜愛の心によつて直に煩惱を斷ぜずして涅槃に到ることのできる位に入り、(二)身、智慧も道德も劣りはてた者でありながら、一切の聖賢と共に大慈の海

信心の靈德

に浮ぶ身の上となり、(三)而して貪瞋煩悩は猶のやうでありながら、而もたえず御光の中に護られ、(四)歴刧迂回の道を經すして、直に五悪趣をたちこえ、常に進み常に昇つて、再び退くことなく、(五)正に人生の花として、世の光となり、世の導となつて、ちやうど蓮や、蒲公英や、蓮華草や、そのほか千百の草花が各さき匂うて春の野をかざるやうに私共も世の同朋同行と共に、各々此世に佛の大御光をあらはすべき神聖の使命を與へられたのである。　思ふに、何の榮光か之にまさるものがあらう。　私共は之より如來の大御心の擁護の下にその御力に導かれつゝ、この麗はしき榮光の冠をいたゞいて、讃歎の稱名いさましく進み行くのである。田舍に向へば道ば益々狹くなり寂くなる、されど都に向へば道は追々廣くなり賑はしくなる。　一歩進めば一歩だけ我道は廣く自由が加はる。一寸行けば一寸だけ我境はにぎはしくなり同行が加はつて參る。　而して行きつく處は、俱會一處の福祉を與へたまふ無量光明の御淨土である。　この望の光に慰められ勵まされて進み行くのが私共の身の上であつて、御名に於ける生活の本旨、之より外はありませぬ。

第八章　新生活の門

彌陀佛本願念佛、　邪見驕慢惡衆生、
信樂受持甚以難、　難中之難無過斯。

【讀方】彌陀佛の本願念佛は、邪見驕慢の惡衆生、信樂受持すること甚だ以て難く、難中の難、これにすぎたるはなし。

【字義】一。本願念佛とは、本願の成就によつてあらはれたる念佛の道理といふことである。

本願念佛の名義

二。邪見とは、道理にはづれた意見を皆まうすのであるが、殊に因果の道理を打壞はさうとする意見を申すのである。

邪見の名義

【大意】阿彌陀如來の、本願念佛の御旨は、邪見驕慢の惡衆生であつては、これを信じ受くることは極めて難くあつて、疑いなかの難いこと、之に上越すものはありませぬ。

【文科】これまで廣く信念の基礎、相狀、及び功德を宣べかはつた故、今はこの信念に入るには、邪見驕慢が邪魔をなすゆゑ、これを去られねばならぬこ

とを宣べたまふ。即ちこれまでは信をすゝめ、今は疑を誡めたまふのである。こゝで主には「大經」兼ねては三經に依らせられた依經分はをはるのであります。

信念上の生活

一、大なるかな、如來の御名に於ける生活。私共、これを仰いで、たゞ其德の高大であるのに、驚くばかりであります。釋尊は、『法華經』の中に、御自身の御國のありさまを說かせられて、「衆生、切盡きて大火に燒かるると見むときにも、我が此土は安穩にして、天人常に充滿す」と仰せられてありますが、信念の上の生活が亦これに似てをります、貪慾瞋恚の餘が、世の中に荒れ狂うて、爭鬪暫くもやまぬのに、此生活には、平和の風が、さわやかに吹いてをる。彼處には人皆心の上の暗に泣いてをるのに、此處には、人皆御慈悲の光に喜んでをる。之を知つて、私共、どうして之を望まずにをられやうか。長い夜路に勞れた者は曉の光にあこがるゝ思にたへぬ。罪惡の暗路に、永遠の古から惱み來つた私共、どうして此新らたな生活の光を尋ねずにをられやうか。それ故王舍城の王后

は、瓔珞の飾を抛ち、五體を地に投じ、釋尊のまへに號泣して、此新生活の中に進まむことを求められた。たゞに此王后ばかりではない、古今幾多の賢哲、皆此のやうに、熱心に之を求められたのである。けれども此新い生活に入ることは決してたやすいことではありませぬ。

二。 これは何故かといふに、申すまでもない、眞實の智慧がないからである。私共互に、外を知ることができるやうであつても、內を知ることができぬ。「王が民の主たるが如く、心、萬のことの主たり」。この萬のことの本たる自分の心が、少しも明になつてをらぬ。もと〳〵如來は慈悲の裏に智慧をひかへたまふ。その御光は智慧のすがたである。それ故、如來の道は、全く智慧の道である。されば私共、如來の子となつて、如來の道を歩む者、また是非とも、眞實の智慧をもたねばならぬ。然るに、之がない。是に於いて私共は、先づ第一に自分を本當に見わくることができぎせぬ。そのために大なる驕慢に上つてをる。即ち自ら極めて愚かでありながら、而も賢いと思うてをる。多くの罪をかゝへながら、而も清らかであると思うてをる。又極めて道の上においては、かよわい者であつて、此肉身も亦今にも知れずくだくるやも計られぬ程のものでありながら、而も之を手丈夫なものと思うてをる。我心既にかく自分のことについて、間違つて、常に驕慢のために蔽はれてをる故、少しでも我心に契はず、志にちがうたことがあれば、毫も自分に振反つて省ることをせずに、直に其外來の物事に對して、或は怨を向け、或は嘆き悲み、恐れをのゝいて、自ら其中に苦んでをる。苦んで居ながらも、驕慢の心は少しもやまぬため、病を覺らぬ者が、醫者の許に駕け付けぬやうに、如來の御許に走つて、其御たすけの手にすがらうと思はぬ。曾に思はぬばかりではない、如來に向ひたてまつることさへできぬ。慈悲その者をさへ觀じ奉ることができぬ。御たすけの手は、近く我上に降らせたまひ、其御名は幾度も我耳に觸れながら、之を覺らず之を感せずして、徒に苦み惱むでをる。而して此苦や惱を拂はむために、色々樣々のてだてを盡くして見るけれども、少しも思ふやうにならぬ。中心の

邪見、苦痛

缺陷は、今まで通りに滿たされずして、歌うても寂しく、醉うても面白くなく、つひには自暴自棄の思に驅られて、はかなく死の門に急ぐやうになる。無理ではない。胸の奥には、戀よりも酒よりも、健康や家庭や、富や、名や、道德や學問よりも、猶一層深い大慈の泉を望むでをるのに、之をあたへぬ故である。金貨を望むのに、木の葉をあたへて、どうして滿足することがあらう。驕慢のつまる所は自殺であります。

三、かく眞實の智慧がないために、驕慢の念に蔽はれて、自分のありのまゝを見ることができず、隨つて邪見の情に鎖されて行末に、いかなる運命に落つべきやをも考へず、ために如來の御慈悲をも認めず、又向上の力をも樂はず、徒に苦惱の暗路に悶えて、新生活の中に進むことが難い。「一驕心に入れば、百藝皆廢す」。一つの驕慢は、凡ての罪と苦とを孕んで參る。これが即ち私共の今迄の生活の狀態である。今彌陀佛の本願念佛は邪見驕慢の惡衆生、信樂受持すること甚だ以て難く、難中の難、これに過ぎたるはなし」と仰せられた譯は、實に此にあるのであります。

無明、十二因緣

眞實の智慧

「論語」

四。されば釋尊は、つねに無明即ち愚痴が、人間流轉の本であり、隨つて罪業、及び苦惱の源であることを敎へて下さつた。十二因緣は、流轉の經過をあらはしたまうたものであるが、その第一は實に無明であります。それ故、私共、かりそめにも平和自由の新生活に入りたいと望むならば是非とも愚痴の無明を破つて、眞實の智慧に入らねばなりません。併し眞實の智慧に入るといへばとて、必ずしも多くの講說を聞かねばならぬといふのではない、又澤山の經論を繙かねばならぬといふのでもない。たゞ自分の眞相を見わくるのである。「知らざるを知らずとせよ、是れ知れるなり」。即ち自分の愚痴を愚痴と認むるのである。自分の罪惡を罪惡と氣づくのである。自分の薄弱を薄弱と自覺するのである。この自認、この自知、この自覺、即ち是れ眞實の智慧である。雪の白いのを白いと知り、炭の黑いのを黑いと知つたのが、正しい智識であると同じく、この自知自覺は即ち眞實の智慧である。然るに光は、陰

二種深信相關の原理

が陰であることを知らしむると共に、又光の光たることを知らしむ。この眞實の智慧の光は、一面において私共の罪惡迷妄の陰影を覺らしむると共に、又一面において罪惡でない功德迷妄でない大覺の光明を信せしむるのである。即ち私共をして自分の罪に氣づかせた此智慧は、そのまゝ私共を導いて、此罪を救ひたまふ佛を仰がしめねばおかぬのであります。それは何故であるか。

智慧の眞實性より到達する如來實在の信念

五、 私共は先づ此眞實の智慧といふことより窺はねばならぬ。この眞實の智慧今現に我が胸に在るが、この智慧は何處より來たものであらうか。誠は僞よりは生ぜぬ必ず誠より出る。眞實の智慧は必ず眞實の智慧よりあらはれて來たものに相違ない。然るに我が心は本より皆眞實であるかといへば、迷である。一點の眞實も其中に認められなかつた、認められなかつた處に今や認められてをる。さすれば此眞實の智慧は、是非とも我が此小やかな凡夫の胸の外なる眞實の大なる智慧より流れ來つたものに相違ありませぬ。泥の田に蓮の花がさいたならば、その花は泥の中にありながら泥のつくつたものではない。全く泥田の外にさける蓮の花の實が其中に落ち込むでさくやうになつたに相違ない。一つの花を見て、この花のたねを結ばしめた前の花のあるを信ずる。眞實の智慧我が胸にあらはれたのを見て、どうして之をあたへさせられた佛の眞實の御智慧の存在を信ぜずにをられやうか。

自覺の性質より到達する如來實在の信念

六、 次に又一歩をすゝめて窺ふに、見るといふことには、三つのものが具はることが大切である、即ち見るものと、見らるゝものと、見せしむる者とである。例へば百合の花の白いのが見えるには、その見らるゝ花と、見る眼と、之を見さする日光とがなければならぬ。この中、一つ欠けても、見るといふ一つの作用は起らぬ。今私共は自分の罪を見てをる。これ何のためであるか。自分の罪と、之を見る我心の上の智慧と、其外に之を見さする光があるためである。實に日光があつて、其光を我が眼にあたへて、我が眼をはたらかせて、百合を見せしむると同じ

照す光は護る光なり。智慧の光は慈悲の光なり。

く、たふとい御光が我心に此智慧をあたへ、我心を正しくはたらかせて此罪を知らしめられたのである。されば私共は、今罪惡の自覺の所由を思うて、どうしても佛の大御光の我上に在ますことを疑ふことはできませぬ。

七。然るに照す光は又護る光であり、温むる光であり、養ふ光であり、導く光である。智慧の光は、そのまゝ慈悲の光である。即ち私共を照して明に自分の眞相を自覺せしめられた大智慧の光は、そのまゝ私共の内心の汚きをもきらはず、私共の身の上の弱く暗いのをも忌みたまはずして、來り降らせられた温かな大慈悲の光であります。而して此御慈悲の御旨は明らかに御名の上に示されてあります。私共は己を忘れて、此大慈悲の御力によりかゝり、よりたのまずにをられませぬ。それ故に、本當に自分の罪惡を認めて、而もまだ如來の救濟を信ずることができぬといふことはあるべき譯ではない。又如來の救濟を信じて、而も自己の罪惡に慚ぢ入らぬといふことはあるべき譯ではない。罪

「大論」

「己を知れ」

といふ思は、敎といふことゝ並び起る。「雨の山頂に住まらずして、必ず下き處に歸するが如く、若し人、驕心あつて自ら高うすれば、則ち法水入らず。」心驕慢の峰を下つて、謙遜の谷に下る折、如來慈悲の雨は、此に滿ちたまふのである。如來慈悲の大御光、我上に輝きたまふを感ずる折自分の罪惡を顧みて之に慚づるのである。隨つて又この慈悲を辱うせる自分の光榮に喜び勇むのである。眞に自ら謙る者は眞に自ら重ずる。かくて慚愧と感謝と、而して之に伴ふ歡喜と希望とが、新い生活の色彩となつて、私共の中心の信念と一身の行業とを彩りつゝ、茲に今までの舊い生活のやうな殺風景なものでなく、趣多い旅立を始むることができるのであります。

八。されば「先づ己を知れ」とは、たゞに古の希臘の一神宮に掲げられたるばかりの文字ではない、又其國の哲人の敎訓の始にのみ現はるべき言語ではない、近く私共が進み入るべき宗敎の門の扉に、大きく記されたる文字である。私共は、此文字を讀まねばならぬ。晢く四方八方

内省は入道の門なり

より襲うて參る外來の妄情の波間に立つて、氣を平にして、自分のありさまを省みねばならぬ。其時私共は必ずや精神の奥底に「爾は愚である、罪がある、弱い、早く大悲の御親に走れ」との聲を聞くのである。初めは低く、漸く高く、終には雷のやうに私共の心の全體を壓へ來る此聲を聞くのである。私共は此聲に順はねばならぬ。若し此聲に耳を背けてをるならば、たとひ百萬の富があらうとも、王侯の位があらうとも、古今の哲人を驚かすほどの哲學を組立つるとも、皆是れ戯論にすぎぬ。

驕る者は佛の國に入ることを能はず

私共は、たとひ之が苦痛の道であるとも先づ此の眞實の智慧に入つて、自分の實相を徹鑒せねばならぬ。まして「道は邇きにあり」こゝに慈悲に至る道がある、平和自由の門戸が開かれてあることを聞いて見れば、猶更のことであります。

九。古の人は、命に至る路は窄くして其門は小く、ほゝびに至る路は廣くして其門は大也と申された。如來の正法に向ふ者は、大手を振つて、威張り高ぶることはならぬ。王后韋提希は、瓔珞の飾を切り捨てられたではないか、其五體を地に投じて跪かれたではないか。私共は今日まで執じ來れる、幻の花のやうな、外面だけは瓔珞のやうであつて、其實探るに足らぬ色々の飾をすてねばならぬ。すつるとはあてにせぬとの謂である。自分の智識や道德をあてにしてはならぬ。富や位や名譽や權勢の飾を誇つてをつてはならぬ。一切の裝と一切の飾とを打ちやりて、この罪惡のまゝ、この迷妄のありのまゝを佛の御前に投げ出して、赤裸々、以て我上に降りたまふ如來の御光の御衣で裝はれ其大なる佛智の寶玉を以て飾らるゝに到らねばならぬ。

解脫の意義

一〇。驕れる者には、極めて入りがたい信念の門は、謙る者には極めて入りやすいのである。

入道の難易

一一。眞實の謙遜と眞實の渴仰とを產み出す眞實の智慧、之より外に如來の御名に於ける新生活の門はありませぬ。私は我が世界の人々が、速に此門に進んで、此生活が與ふる一切の福祉と光榮とを受けむことを望むでをります。殊に親鸞聖人が、此「正信偈」において、先づ如來

我が道に入るは我のみにあらず佛祖のためなり

及び其本願の因果を宣べ、次に釋尊の本懷を示し、次に私共が、此二尊の指圖によつて進み入るべき新生活の風光をあらはし、將に其大聖の眞言によりたまへる「依經分」を終らむとするに當つて、唯今茲に、此生活に入るべき門戸を指し、驕慢邪見の惡魔に誘はれてはならぬことを誡めさせられたのは、全く之を望みたまふ御親切より外はありませぬ。而して啻に親鸞聖人のみでなく、聖人と共に我同胞と私との眞實の御親なる無限大悲の御佛は、殊に常に之を望ませられてあるのであります。

第九章　新生活の指導者

印度西天之論家、中夏日域之高僧、
顯大聖興世正意、明如來本誓應機。

西天の名義
論家の名義
中夏日域の名義
大聖・如來の名義
機の名義

【讀方】印度西天の論家、中夏日域の高僧、大聖興世の正意を顯はし、如來の本誓、機に應ずるを明にせり。

【字義】一。西天とは西方の空にあたる國といふ義である。

二。論家とは、論を造りたまへる御方といふ義である。

三。中夏とは、夏は大の義で、支那の人が、自分の國を中夏といふ故、今はそれを用ゐたまふのである。

四。日域とは、日本のことである。

五。大聖とは釋尊のことである。

六。如來とは、阿彌陀佛のことを、茲には申したまふのである。

七。機とは、はたらきを發するものゝ事で、私共凡夫の器量をいふのである。

【大意】西の印度にあつて多くの論を造りたまへる龍樹天親の二菩薩、又支

信念より見たる人生の意義

那の曇鸞、道綽、善導の三高僧、日本の源信、法然の二高僧は、相ついで、釋尊が此世に出でさせられた本當の御意は、彌陀如來の本願を說きたまふにあることを顯はに示し、此如來の本誓は、正しく今日の私共の器量に、善く相應したまふ尊い御旨であることを明かにして下された。

【文科】是より後は、主に七祖の御釋によつて、其相傳へ相承けたまふ趣を示したまふ。それ故、前の「依經分」について、之よりを「依釋分」といふ。而して今は「依釋分」の最初に當つて、先づ總じて七祖傳承の概要を序したまふのである。

一。此人生は、如來の御光に入つて考へて見れば、たゞの夢でもなく、たゞの幻でもなく、眞實の幸福に入るための道行であります。然るに此人生全體を疑つて、此中に何の主旨も目的も認めない懷疑論などは、單に學問上の見解としても、立派に成立たぬのみではない、全く根底のない一種の空言に過ぎませぬ。何も知らぬやうな床下の草でさへ光をたづねて其方角に枝を延ばしてをる。人たる者、どうして苦痛の多い暗黑の舊生活を去つて、幸福の多い光明の新生活を望まぬといふことがあらうか。

二。然るに此新生活に入るについては、縱ひ幻げながらでも此新生活の如何なるものであるかといふことを、一應辨へねばならぬ。又此生活に進むべき門は何處に在るかといふことを存じて置かねばならぬ。それ故、釋尊は五十年間の敎化において、橫說竪說、いろ〳〵の方面より、之を說き明し、竟に此生活が、一に如來の御名の御旨をさとり得た信念の上の生活である、即ち如來の御名に於ける生活であることを示して、具に其風光をたゝへ、且つ其門戶は、偏に自分の實相を觀きはむる眞實の智慧であることを示して、懇に反省內觀の道を敎へ謙敬の德をすゝめさせられた。是れ『大經』の大義であつて、一切佛敎の中心、人間向上の要路、之より外はありませぬ。それ故この『正信偈』は之まで釋尊の經說に依れる四十四句の依經分において此大義を述べさせられたのであります。

三。けれども私共を、此新生活に導きたまふについては、之だけで充

分であるとは申されませぬ。何故かといへば、私共の多くは唯今まだ其門にさへ近いてをらぬ故であります。闇を通して遥のあなたに燈の輝いてをる門も見ゆる、よく耳をすませば、其方角より自分を呼んでをる聲も聞こゆるやうである。けれども其門に近くべき道が分らぬ、彼方の光が輝けば輝くほど眩いやうに感せられ脚下が危いやうに思はれ、心頻にあせりいらだつて、歩は少しも前に進むことができぬ。かくて氣は愈疲れ心は益々亂れて、其果ては折角前に認めた燈の影も若しや狐火ではないかと疑ひ、さきに聞こえた呼聲も、ひよつとしたらば我耳の病ではなかつたかなどゝいふ疑に沈んでしまふ。是れ私共の多くが、免れがたい所の精神上の道行である。されば此階段より私共を引上げたまふについては、單に彼の新生活の光と其門戸とを示して下さるゝばかりでなく、近く私共の許に來つて親しく私共の心を叱り諭し、私共の手をひき、一つには躬ら斯道の證明となつて私共の疑を晴し、一つには斯道の模範となつて私共の過を匡し、かくて手づから私共を指導して下さるゝ御方を要するのである。是に於いて、古今東西幾百千の聖賢は皆此使命を負びて、此世に出でられたのである。「善知識といふは阿彌陀佛に歸命せよといへるつかひなり」。私共は此神聖の御役目を以て、此世に來りたまへる多くの聖賢、多くの善知識に對して深く感謝致さねばなりませぬ。

聖賢の使命「御文」

絶聖賢の特別指導

四、されば黄河の河邊に出でゝ國から國へと巡つて、庶の溫まる暇もなかつたといふ賢人も、私共決して他人と思うてはならぬ。その平かな人道の教は私共をして自分の罪を知らしむるための大切な鍵である。

アゼンの囹圄に在つて、七十歳の老體を以て、憂へず怯れず、懇に靈性の不滅と未來の樂果とを説いて、靜に毒を仰いで國法の犧牲になつた哲人も、私共係合のない人と思うてはならぬ。その嚴かな品性は私共をして益々道に勇ましむる所の尊い策である。地中海の東海岸に勢苦した傳道者も、羅馬の古學堂に骨折つた哲人も、亦是れ私共に大切な警誡を與へられます。其外ガンヂス河畔に、雲のやうに群つてを

向上の道に消極的指導と積極的指導とがある。
つまり聖賢の教へを加へた聖賢の教へを導き出した。

られた碩學、西歐東米の國々に、數知れず現はれた德者、皆是れ各々私共を呼び覺まし、私共を引き立つべき使命を以て來られたる大道の使者である。私共は、一つとして其敎をさげすんではなりませぬ。

五。 けれども、其敎は皆同じといふ譯ではない。時と處とがちがひ、其境遇がちがひ、其對する人々がちがふ故、此等の先賢が示された指導の模樣は皆同じくはない。或人は學問より敎へ、或人は文藝より敎ふる。或方は理性の明らかになることをすゝめ、或方は感情の淸まるやうに論さるゝ。其外政治より、道德より、一切の方面より、私共を勵まさるゝ。

是等は皆是れ私共の迷の夢をさまして、私共の恐かなこと、汚いこと、弱いことを自覺せしめらるゝについて、大切である。而も此中において眞に此弱く汚く恐かな私共の救はるゝ道を、知らしめらるゝ積極的の敎訓を示さるゝ方は多くない。又其救の道を最も明白に又親切に、顯はし示し身正しく之を實證し來つて、一身を擧げて斯道の證明に捧げられたる指導者は極めて〳〵少い。我が聖人は、釋尊以後其七人を多くの聖賢の中より尋ね出したまうた。即ち西天の印度にあつては、龍樹、天親の二論家、支那にあつては、曇鸞、道綽、及び善導の三高僧、日本にあつては源信と源空との二高僧である。この七人の方々、出世の年代は皆異つてをる、又其傳道の地方も同じくない、其立たせられた地位もちがつてをる、而して其敎訓のすがたも、凡て同一ではないけれども其根本の精神は皆同一の如來の大道に根ざゝれ、共に同一なる佛心の潮流に浴し、共に、同一に、普に私共をして自分の迷妄罪惡に氣づかしめらるゝばかりでなく、此迷妄罪惡の私共の救はるべき絕對他力の御旨を明に宣べたまふのである。されば七祖前後相隔つることは殆ど一千餘年にも及ぶけれども、諸祖の胸と胸とは共に密に相觸れて同一本佛の御心のまゝを受け、同一釋尊の本心のまゝを繼ぎて、共に相列つて同一如來の大道を宣べさせたまふ方々である。故に指導の樣子はどのやうに異るとも、それは單に表面だけのことであつて、內實は共に同じく大聖世尊が此世に興らせられた正意を顯はし、如來本誓の大道

七祖の一致

こそは正しく私共の根機に應せるものであることを明かにせられた方々である。而も其之を明かにしたまふについて、七祖共に各異つた方面より其歩を進められ、之によつて餘蘊なく斯大道の御旨を發揮させられたことは、私共の有りがたく喜ぶ次第であります。今この偈が多くの聖賢の中より、茲に私共の他力信仰の上の指導者として此七人の方々を選んで「依經分」の後に七十六句の「依釈分」を出して此指導者の一身上及道理上の解明によつて其指導を示したまふのは、一に此道理があるためであります。

六。されば此七祖に對する考は世の人が歴史上の通常の偉人に對するそれとは、大に同じくないといふことは、茲に氣をつけて置くべき要事であります。世の人は歴史上の偉人を見て、たゞ常並の人串上の關繋が其一々の偉人の間に存すると、いふことだけを認めて別段に深い心靈上の鎖鎖が其間を繋いでをることは認めてをりませぬ。つまり人々は、偉人を以て心靈の上では個々別々のものと思うてをる。然

るに私共が此等の祖師に對するときは其相互の異彩を仰ぐと共に直に其根本精神の同一を認むる。其間を一つの心靈的鎖鎖がつないでをることを認むる。其一々の祖師の本心が、皆同一の心靈的潮流に浴してをらるゝことを認むる。それ故源空聖人に接すると同じく源信僧都に接して、そこに同一の佛心の動かせたまふことを感ずる。龍樹大士の門を叩いても天親菩薩の樞を叩くと同じき佛心の響いて來るのを感ずる。曇鸞和尚に於いて、道綽禪師に於いて、又善導大師に於いても、亦同樣に其上に同一の佛音の應じたまふを感じたてまつるのである。それ故、私共は、七祖の御苦勞の樣子が各同じくないのを知りながら、而も之が皆同一の佛心の活動したまふものであることを感じ奉るのであります。

七。是に於いて七祖の相承といふことには、深い意味が含まれてあることが分ります。即ち其師資相承けたまふのは決して文字の上のみの相承ではなく、道理の上のみの相承ではない、實に佛心其者の相承

である。一器の水を一器に移すやうぢやと申さるゝやうに、實に大悲の御心其者が此等の祖師の上に示された歴史的活動の連續である。されば祖師の御苦勞の迹は今や遠く過去に屬してをるけれども其御苦勞の主體であつた佛心其者は萬古變らせられずして現在我が上に響き來つてをる。それ故私共は此等の祖師の御苦勞を以て決して單なる昔話とのみ思ふことはできませぬ。即ち此時においては空間上の區別と共に、時間上の差別も、地位上の間隔も、凡て皆亡くなつて、私共は現に此等の聖賢に接して、親しく其指導を受け、其鞭撻と慰安とを辱うしてをるのを感ずるのである。「門を出でゝは彌勒に逢ひ、門に入つては達磨に逢ふ」といふのも、正しく此境涯の趣をあらはしてをる。かくて私共は常に龍樹菩薩と語り、天親菩薩に聽き、曇鸞、道綽、善導の諸大師と談じ、源信及び源空の二聖人と親しく膝を交へ、而して其尊い模範と、明かな證明とによつて、衷心の疑問を出でゝ、彼の新生活の門に進み入ることができるのであります。

聖賢の現前

聖賢に對する感謝

八。嗚呼、私共は何たる幸であらうか。今我が親鸞聖人によつて、此大なる指導者を我が前に尋ね得たのである。溝渠がなかつたならば田は水をたやすく受けることができぬ。七祖の溝渠が在ますば私共の心田長へに涸れ果てゝ「曠劫多生の間にも、出離の強縁しらざり」しもの、復此度むなしく過ぎ行いてしまはねばならなかつたかも知ませぬ。然るに今や此溝渠あり、二千四百年の前、菩提樹蔭の曉に大聖釋尊の御胸に湧きそめたる大道の清流を、此溝渠によつて直に我が心田にいたゞくことを得るのである。即ち此指導者の指導によつて、私共の前に望める新生活の風光が、決して歴氣樓の影ではなくして、我が進み入るべき眞實の淨土であることを確め、又其教示によつて、其門に向ふべき路を明かにすることができ、加ふるに是等の聖賢を私共の先導とし同行とし奉ることによつて、私共は限りなき奬勵と慰藉とを得ることができるのであります。私共はゆめ〳〵此大なる光榮を無に致してはなりませぬ。

九、かくして私共は、此等の指導者に順つてだん〳〵と光明の生活に近かねばなりませぬ。徒に暗黒に安きを得やうともがいてをる限は、決して私共の師とすべきものではありませぬ。

第十章　南天竺の聖者

《上》人格上の指導

釋迦如來、楞伽山　爲衆告命、南天竺
龍樹大士出於世、悉能摧破有無見、
宣說大乘無上法、證獄喜地生安樂。

【讀方】釋迦如來、楞伽山にして衆のために告命したまはく、南天竺に龍樹大士、世に出でゝ、悉く能く有無の見を摧破し、大乘無上の法を宣說し、獄喜地を證して安樂に生まれむと。

【字義】一。楞伽山は、梵語ランカーといひ錫蘭の西南に在る山であつて、海面を拔くこと、七千三百七十八尺。今はアダムスピークといふ。されど釋尊の錫蘭に渡りたまへることは、佛傳の上に明らかでない故、「楞伽經」を說きたまへるのは、或は印度內地の山であるかも知れませぬ。唐譯の「楞伽經」には、大海の濱、摩羅耶山の頂上、楞伽城中とある。而して「西域記」第十

には、南印度秣羅矩吒國の南海濱に秣剌耶山といふ山があると記してある。されば此山のことかも知れませぬ。（麻井宣正氏「佛教小史」第一による）。とにかく印度の南方の山であることは明らかであります。

大士の名義

二。大士とは大心をおこす大丈夫といふ意で、菩薩のことをいふ。

有無の見の名義

三。有無の見とは、有にかたよつて諸法の變化を知らず、或は空にかたよつて萬法の存在を否む所の二個の偏見をいふ。

大乘の名義

四。大乘とは、乘は乘物といふ意で、佛の御法は衆生を載せて、迷の此岸より、覺の彼岸に運んで下さる故、佛の教を乘といふ。其中において大小の別がある。今龍樹菩薩の宣べたまへるのは、廣大なる教ゆゑ、大乘といふ。

歡喜地の名義

五。歡喜地とは、菩薩の十位の第一にして、此位に入れば、必ず道を成ずべき認を得るゆゑ、歡喜の思が起る、それ故、歡喜地と申すのである。

【大意】釋尊、楞伽山に在つて、「楞伽經」を說かせられた時、會上の大衆、別しては大慧菩薩のために告げたまふやうは、後の世に、龍樹菩薩、南方の印度に出でゝ、世上に行はるゝ有無の偏見をやぶり、中道の眞理を宣べ、大乘無上の大法を說いて、自ら歡喜地の聖位をさとりて、安樂の淨土に生まるゝであらうと仰せられた、この懇記に應じて、龍樹菩薩は此世に出現せられました。

佛教の傳燈

龍樹及び龍樹菩薩

【文科】是より七祖の釋義を宣べたまふに、今は第一祖龍樹菩薩について、先づ其御身の上を宣べたまふのである。

一。太陽が西に落ちて、夜の暗が追々と厚く世界を鎖して參ると、點燈會社の役人によつて、都大路の門から門へ、燈がつけらるゝやうに、輝きわたつた大聖釋尊の肉身の教化が、敢なくヒラヌヤヴティの河邊に終つてから、正法の光漸う薄うなつて、世は低い教の暗に蔽はるゝやうになつた時、多くの聖賢の燈は、引き續いて、あなたこなたに現はれ、暗に迷へる私共を導いて下さるゝやうになつた。この中で最も大にかゝやくものが七つある。而して其最初のものが即ち龍樹菩薩であります。

二。この菩薩は、今より殆ど一千九百年の前南方印度にあらはれた御方である。それ故釋尊とは、ざつと五百年の間隔がある。されば其受けられた斯道の思想は、つねなみでいへば、五百年の間に現はれたる多くの聖賢が、取次ぎ來られたものである。即ち其等の聖賢によつて廣く展

べられ、大きく開かれた者であつて、直に釋尊に受られた者ではありませぬ。それ故釋尊と菩薩との間には、直接の關係がないやうに見ゆるけれども之は普通の歴史的見解に縛られて、其上に超る事のできぬ淺墓な了見である。宗教の關内には、空間や時間やの制約がない、何千里隔つて居るとも、一たび同じ信念の妙致に達したときは、兩者の心絃共に相感じ共に相鳴るが如く、時は何萬年遠かつて居やうとも、後者の進み行くや、直に先に進める者に相接觸して、兩者の間一線の毛髮をも容れぬのである。先聖後聖其揆一なりといふは、此趣を示したものである。されば龍樹菩薩の精神は、五百年を隔てながらも直に釋尊に觸れてをつた、而して釋尊の大御心亦五百年を隔てながらも直に龍樹菩薩に觸れさせられてをつた。それ故釋尊の御胸には、龍樹菩薩其人の世に出づべきことは、疾く洞觀せられてあつたのであります。

三、 かくいはば多くの人は、舊時の迷信を繰返すものと嗤ふかもしれぬ。けれども深く道を信ずる者は、道の常住を信じてをる。その滅亡を

信せぬ。それ故、それが世に行はるゝについては、時に隆替はあり、變化はあらうけれども、必ずや之を傳へ之を弘むる者あることは決して疑ひませぬ。此確信がをこがましけれど、私共にさへある。釋尊においてどうして此確信があらせられぬといふことがあらう。時機の未だ熟せぬがために、暫くは斯道が明かに世に行はるゝことはないにせよ、我が出世の本懷たる斯道が大乘無上の眞理である上は、知己は必ず千歳の中に出づべきである。時運は常に一定の規則を以て回轉してをる故、五百年程の月日を經たならば宗教的精神の盛になるべき南方の地方に必ず其一身を以て又其言語を以て、斯道を現はす者が出づるに定まつてをる。それも一時の事情によつて、不明瞭に現はすのではない、一切の邪見を打破つて、充分明白に斯道を現はし來る者があるに違ひないとは、是れ恐多けれど釋尊の御胸に抱かせられた確信であつたであらうと察し奉ることができる。此確信既に御胸にある、是に於いて、楞伽山上衆聖の爲に告命なされた。「我乘内證の智は、妄覺の非境界なり如來滅世の

後、誰か持ちて我がために說かむ。未來に當に人あるべし。南天の國中に於いて、大德の比丘あらむ。龍樹菩薩と名づけむ。能く有無の見を破りて人のために我乘大乘無上の法を說き、初歡喜地に住して、安樂國に往生せむ。是れ正しく『楞伽經』のうちに說かせられてある懸記である。然るに釋尊の滅後此の懸記の如く、社會の形勢は規則正しく轉じて來た。世は釋尊の豫言したまへる其者を望み、又其者を出ださねばやまないやうになつて來た。そこで龍樹菩薩は、此希望の聲に呼び起され此社會の勢に引き立てられ、正しく自分が此懸記に應ずる者であることを自覺し、自分が此懸記を實現する使命を負んで居る者であることを自信して、此自覺と自信とに動かされて、其懸記に契うた活動を現はさるゝに到つたのである。されば時代の遠く隔つにも拘はらず、菩薩は直に釋尊に接し、直に釋尊に受けてをらるゝのである。見よ、いかに生涯の經歷が、一々此豫言に相應して、私共の上に壯大の指導を與へくれらるゝかを。私は諸君と共に茲に暫く其經歷を窺はうと存じます。

龍樹菩薩の青年時代

四、 龍樹、梵語ではナガールヂユナ。色々の說がありますが、アヂユナ樹の下で生まれ龍種の地方で道に入られた故に此名があると一部の傳記は傳へてをります。多くの偉人と同じやうに幼時より極めて聰明であつて、深く『ヴェダ』等の古典に達し、星學地理學、その他當時に行はれた一切の學藝に通じて、其評判、諸國に喧しくあつた。然るに年少名をなすは身を誤まるの始めで、稱讃の聲其一身に集まり來る頃、菩薩は既に墮落の淵に陷りそめた、即ち三人の朋友と相携へて、酒に耽り、色に溺れ、終には密に王宮に入つて其狂暴を擅にせられた。然るに事遂に發覺して、三人の朋友は、空しく宮中において殺された。此警覺を受けて菩薩は始めて墮落の夢より醒めた。情慾が正しく苦の本、禍の源であつて、德を破り、身を危くするのは、皆之から起るものであることを悟つて、決然、家を捨てゝ山に入られた。菩薩の宗教的生活は、これより始まつたのであります。

龍樹菩薩の入道

五、 菩薩は、先づ一佛塔に詣でゝ戒を受け、熱心に小乘佛教の經書を

讀み通したけれども、何も得る所がない。そこで進んで北の方ヒマラヤ山麓の地方に入り、山中の一寺院で、一人の老僧に逢うて始めて大乘の經典を繙き、深く其意義の幽遠なるを愛でゝ、研究少しも怠らなかつたゝめに、追々と斯道の實義を辨へらるゝやうになつたけれども、まだ徹底することができぬ。そこで更に歩を轉じて諸國に遊び、到る處餘の經典を尋ぬる傍、諸の學者と論じて、廣く道を求められたけれども、皆菩薩の前に伏する者のみであつて、菩薩に新たな光を示す者がない。そこで思はるゝやうには、今の世に行なはれてをる教義、すぐれてをらぬことはない、けれども未だ之によつて滿足することはできぬ、如來の道には、必ずや猶一層深遠な猶一層完全な理義がなければならぬ、今や他人の是を示す者がない、自分自ら進んで之を觀きはめねばならぬと。是に於いて獨處靜坐、思を凝らし心を攝めて九十日の間斯道の洞察につとめられた。此時、一聖者によつて『華嚴經』等の經文を手に入れ、之を繙かれた時始めて正しく如來の大御心を徹觀なされた。其御胸の中を後に自ら告白なされた

無量光明慈、身は眞金山の如し。我今身口意を以て合掌し稽首して禮しまつる。」金色の妙光明、普く諸の世界に流れ、物に隨ひて其色を示したまふ。是故に稽首して禮しまつる。」若し人、命終はらん時、彼國に生まるゝを得ば、即ち無量の德を具へむ。是故に我歸命したてまつる。」人能く是佛の無量力功德を念すれば、即時に必定に入る。是故に我常に念じまつる。」

若し人、善根を種えて、疑へば則ち華開かず、信心清淨なる者は華開いて則ち佛を見たてまつる。十方現在の佛、種々の因緣を以て、彼佛の功德を歎じたまふ。我今歸命し禮しまつる。」

彼の八道の船に乘じて、能く難度海を度す。自ら度し亦彼を度せむ。我自在人を禮しまつる。」諸佛無量切、其功德を讃揚せむに、猶尚盡くすこと能はず。清淨人に歸命したてまつる。」我今亦是の如く無量の德を稱讃したてまつる。この福の因緣をもて、願はくは佛常に我を念じたまへ。—「十住毘婆娑論」

既に玆に到つて見れば現在の安心が確立すると共に、將來安樂の大果を得ること、亦疑ふことができぬ。此現在及び將來の光榮を感じては、

衷心の歡喜どうして抑へることができやうか。

菩薩、初地を得つれば、其心、歡喜多し、諸佛無量の德、我亦定めて當に得べし―「十住毘婆娑論」

菩薩は、彼の懸記に示された通り、今や此眞實歡喜の地位を證り得て、この歡喜より湧き來る勇氣に動かされて、自分も安樂の淨土に到ると同じく、又世人の妄執を破つて、悉く此大果に導きたいと志して、猛然として印度の思想界と戰はるゝに到りました。

龍樹菩薩の傳道

龍樹菩薩の破邪的宣教

六、古來思想界の歷史には健鬪の雄將其數決して少くはありませぬ。印度はいふまでもなく、支那において、希臘において、羅馬において、其他東西の國々に於いて、其澤山あることは數へきれぬ程である、けれども私は其鋒先の鋭いこと、龍樹菩薩に勝つてをる者を多く見出すことができませぬ。當時印度にあつては、宗教上の思想は勿論、學問上の思想も大に亂れて、所謂六十二見、九十五種の樣々の異論が相爭うて印度の思想界は、ちやうど戰國のやうな有樣であつた。而も是を大別して

因緣、空、中道、有の意義

見れば、有無の二見より外はありませぬ。有の見といふは萬象の實有を固執し、人間にあつては、靈魂などゝいふものが、いつも變らずに、自由の力を以て永存してゆくものであるといふ見解である。無の見といふは、之と反對で、萬物は全く空無であると固執し、殊に人間の死後などには、何等の存在も無いものであるといふ見解ある。此等の見解は、いつでも世に爭つてをる思潮であるが、別して當時の印度では、最も激烈に、又最も複雜に、此兩思潮が爭つて居ました。龍樹菩薩は釋尊の遺法の堅城に據り、其鋭利な論鋒を振かざして、碁地に此等の妄見を切まくられた。其理筋は極めて明かである。萬物は無常ではないか、因緣によつて生じ因緣によつて滅し、たえず因緣によつて變化するではないか。然るに變化は何も無い處に行はるべきものではない、既に變化ある上は、變化する萬物の存在するは申すまでもない。さればとて變化する以上は、萬物それぞれが一定不變の性質をもつてをらぬといふことは明かである。即ち萬物の各々に自性がないといふことは拒むこ

とはできぬ。既に自性がない。而も存在してをる。故に有と定むることもできねば、又空と限ることもできぬ。萬物其者の實相は、有空の二面を備へて、因緣の道理によつて、變化の大用をなしつゝある絶對不思議のものであると觀せねばならぬ。

因緣所生の法を、我即ち是れ空なりと說き、亦名けて假名となす。亦是れ中道の義なり。—『中論』

龍樹菩薩の實際的指導

此觀得、即ち空に偏らず有に偏らぬ中道の智慧が、即ち大覺である。之を全うして始めて一切の妄執、一切の束縛が拂ひ去らるゝ。隨つて一切の苦惱を脫して、大安自在の境に入ることができる。菩薩の『中論』及び『十二門論』等は、明かに又詳に此要旨を示された聖敎であります。

七、

此破邪的宣說にあふ時、私共は明かに自分の迷妄をわきまへることができ隨つて大覺の妙境を望むことができる。けれども今如何にして此迷妄を脫れて彼の大覺に進むことができるかといふ實地の指導が示されてない。水中の危いことを知り、岸上の安らかなことを聞くも、どうして水を出でゝ岸に登るべきかといふことが分らなかつたならば、やはり私共は水中に苦まねばならぬ。まして私共は今まで狂ひもがいたゝめに、腕弱り力つきてをるではないか。それ故どうしても更に採るべき道を示していたゞき、又進むべき力を加へられねばならぬ。

龍樹菩薩は茲に如來本願の大道を示させられた。如來は萬德の因を積んで如實の中道に來り、其大覺より得たまへる自在の神力を以て、今や正しく救濟の御船を生死の苦海にすゝめたまふのである。私共全く自分の妄執をすてゝ偏に之に乘託するとき、向上の道に定められ、向上の力が加へらるゝのである。私共は是非とも之によつて、此度り難き迷の海を度らねばならぬ。是れ菩薩が、其消極的破邪の上に一歩を進めたまへる積極的指導であつて、其『智度論』、殊に『十住毗婆沙論』は、此大道を主として示されたものである。而して『十二禮』は、菩薩の之についての衷心の讃仰の思を歌はれたものである。されば彼の『中論』及び『十二門論』等の消極的破邪によつて人間の迷妄と如來の境界とが

明かに辨へられ、此『智度論』及び『十住毘婆沙論』等の積極的指導によつて、實地に迷妄を脱れて大覺にすゝむの問題が明に定められ兩方相並んで釋尊の豫言をなされたやうに、悉く能く有無の見を摧破して、大乘無上の法を宣説せらるゝことができたのであります。後の世の學者或は菩薩を以て、唯消極的破邪の一方のみを主とせられた者のやうにいひなすは是れ實に菩薩を誣うるの甚しきものであらうと思ひます。

龍樹菩薩の後年

八。菩薩は猶他に多くの聖教を著はされました。其數千部にも及ぶと傳へられてをる。けれども其要旨は以上述べた所を出でませぬ。而して此いさましき信念の旗をたて、菩薩は印度の中央より西部及び南部に教化をつたへて、到る處疾風の枯葉を卷くやうな勢であつた。わけて南方印度にあつては多くの國王が之に歸依せられた。彼の猛烈なる獅子のやうな迦那提婆が、獅子國、即ちセイロンより來つて教を菩薩に受けられたのも此時である。かくて菩薩は、傳ふる所によれば頗る長い生涯を送つて、たえず傳道に力を盡くされた。然るに其傳道の盛大は、一方において異教の徒を狼狽せしめ、又恐怖せしめた。それがためであらう、古來殉教といふやうなことを、あまり盛に書き立てない佛教傳記者の常習として、今も明かには記してをらぬが、どうも此菩薩は異教者の迫害の中に敢なく終はられたやうであります。而して其臨終の處は、一時菩薩の傳道の中心であつた南印度の北端コサラの都であつた。菩薩逝きて後南方印度の人々其德を慕うて菩薩のために廟をたて之に事ふること、ちやうど佛に事へたてまつる樣であつたとのことであります。

龍樹菩薩と現代

九。陳べて此に到つて、私は菩薩の雄大なる而も又嚴肅なる人格に對つて景仰の思を抑ふることができませぬ。其一生の初期に於ける肉慾的生活、其悔悟及び其入道の事蹟は、今日少年時代の菩薩のあとを追うて現に肉慾の海に溺れつゝある、又將に溺れやうとしてをる私共の上に親切なる警策をあたへらるゝものであります。其求道の生涯に進まれてより、終に他人の唱道に憑らず、世間の教説によらず、獨立獨

歩驀直に突進して、終に如來の大御心に徹到せられたのは、今日、世の俗説に迷ひ浮言に惑はされて空しく信仰の確立せぬのを悲み徒に向上の岐路に泣いてをる一部の同胞に懇篤なる提撕を加へらるゝものであります。而して其獲信の後には、當時の思想界に對つて、恐れず、怯まず健闘奮戰四方に馳驅して、老の身に及ぶをもかまはず、終には安らかに法敵の手に一身をすてゝ顧みない其壯烈の態度に到つては今日の私共、たゑず如來の鴻恩につゝまれながら、而も之を忘れ苟且偷安たゞ一身の貪計にのみかゝりはてゝをる私共に嚴肅なる叱咤鞭撻を加へたまふのであります。私共どうぞ此菩薩が其身を以て、示されたる此尊い指圖に順ひたいと存じます。先づ塵寰の迷妄を覺つて、向上の道に進み世をたのまず人に憑らずして直に如來の大靈に入り、而して此大靈の火を以て現代に於ける有無の二見を破り、而して我が罪の思を燒き世の罪のなやみを燒き盡くさねばならぬ。惡魔若し此肉を欲せば菩薩と同じく、甘んじて此肉を彼等に與へるだけの心になりたい。肉の外に靈あり。私共は自ら此如來の大靈に入つて、其光をかゝげて、世の同胞と共に如來の大慈の中に、とこしへ盡きぬ福祉をいたゞきたいと思ひます。

一〇。菩薩の『十二禮』は、次の御語で結はれてある。

我彼のみことの功德のことを說くに、衆善無邊にして海水の如し。獲る所の善根の清淨なるもの衆生に回施して彼國に生まれむ。

私共の所願亦之と同じでなければなりませぬ。

(下) 教義上の指導

顯示難行陸路苦、信樂易行水道樂、
憶念彌陀佛本願、自然即時入必定、
唯能常稱如來號、應報大悲弘誓恩。

難行易行の名義

必定の名義

【讃方】難行の陸路の苦しきことを顕示し、易行の水道の樂しきことを信樂せしむ。彌陀佛の本願を憶念すれば、自然に即時に必定に入る、たゞ能く常に如來の號を稱へて、應に大悲弘誓の恩を報ずべしといへり。

【字義】一。難行易行とは、龍樹菩薩が、修行の難易について、一代佛教を二つに分たれたる其兩方の名である。

二。必定とは「智度論」に「阿鞞跋致即是れ必定なり、必定とは必ず當に佛になるべきなり」とあつて必ず成道すべきことゝ定まつて、退くことのない位ないふ。故に之を又は不退といふ。正定聚といふも是である。

【大意】龍樹菩薩は、自力の修行はむづかしくあつて陸上の旅の苦いやうなものであることを示し、他力の御法は行じ易くあつて、船中の旅のたのしいやうなものであることを信ぜしめて、彌陀如來の本願を念ずれば、他力のはからひによつて自らすぐさま必定不退の位に入る。その上はたゞ常に御名をとなへて、この御慈悲の御誓の恩を報ぜよと仰せられた。

【文科】第一祖龍樹菩薩の人格の上の教について。今は教義上の指圖を宣べたまふのである。此一段は主として「十住毘婆娑論」により、敍れては「智度論」にも悉りたまふのである。

釋尊の入道と龍樹菩薩の入道

一。東西南北の四門に遊んで生老病死を觀じたまうてより、釋尊の御胸には、解脱をもとめたまふ御志がやみたまはなかつた。人々は之を抑へむがために、花のやうに殿をかざりまゐらせ、澤山の宮女は、歌舞管絃の海の中に釋尊の御心を醉はしめ奉らうと試みた。けれども釋尊は之に動かされたまはぬ。「我宮中を見るに墳墓のやうであり、又蛆の穴のやうである、是等の者と共にをるは羅刹と共に住むやうなものである」とは、正しく是れ釋尊が王宮を後にして獨り山中に向はせられた時の御胸の中であつた。大道の第一門は實に此苦痛及び罪惡の自覺である。此自覺あつて始めて、邪見の雲が晴れ憍慢の霧が去つて、新生活の道が私共の前に開けて參るのであります。

二。されば直に釋尊を承けられた龍樹菩薩の宗教的生涯は亦正しく此自覺に始まつたのである。而して菩薩をして此自覺に入らしめた事變は極めて激しくあつた故其自覺も亦極めて激しくあつた。それ故自ら釋尊と同じやうに今までの聲名も地位も悉く拋ち去つて、厭

然起つて山中に深く道を求められたのである。自身既にかやうな激い實驗によつて道に入られたのである故、今教義の上より、向上の指圖を示さるゝに當つて、菩薩は、やはり先づ第一に而も激しく此自覺を促さるゝのである。『十住毘婆娑論』卷頭の文は即ち是であります。

地獄、畜生、餓鬼、人天、阿修羅の六趣は險難恐怖大畏あり。この衆生生死の大海に旋流洄復し業に隨つて往來す。是れ其濤波なり。涕淚、乳汁、流汗、膿血は是れ惡水聚なり。瘡癤乾枯、嘔血淋瀝、上氣、熱病、瘰疬、癰漏、吐逆、脹滿、是の如き等の種々の惡病は惡羅刹なり。憂悲苦惱は水なり、燒動、啼哭、悲號は波浪の聲なり。苦惱諸受は跋礁なり、死は崖岸なり、能く越ゆる者なし。諸結煩惱、有漏の業風、鼓扇して定まらず。諸の四顛倒に欺誑せられ恐癡無明の黑闇にあり。愛に隨へる凡夫、無始よりこのかた常に其中に行し生死の大海に往來して、未だ曾て彼岸に到ることを得ず。

是れ實に私共の身の上であります。私共は己に反つて之に氣づかねばなりませぬ。「文明」「進歩」是等の文字は何となく私共をして目前の浮世に醉はしめやうと致してをる。けれども生老病死の大波は今も昔も同じく私共の周圍に攻め寄せてをる。學問は進んでも未だ此大波を抑へた學者はない。貪瞋煩惱の暴風は古のまゝに社會の上下に吹き荒むでをる。人智は開けても、まだ此暴風を靜め得た智者はない。

ナポレオンは歐羅巴の風雲を叱咤して百萬の將卒をも畏れしめたけれども自分はセントヘレナの孤島の雨の夜に、あはれな最後をとげた。

ロシアの皇帝は西はダーダネルスの海峽より、東は遼東の岸邊より中央はヒマラヤ山の裏手より、勢凄まじく征服の旗を南方に押進むるためにつとめてをつた。けれども政略幾度も挫けて今にも死の及を受けねばならぬやも知れぬ。生死の怒濤は、彼の身をも我の身をも襲うてをる。罪惡の暗黑は我の內外を鎖してをる。私共どうしても此中に安ずることはできませぬ。知らなかつた時は、さほどの恐をも感じなかつた。木の葉のやうな船の上にも、暫くの平安を夢みることがで

きた。けれども波があまり荒いために、船が餘り搖ぐがために、ふと今までの夢を破られて、天をも撲ち破らむばかりの大波が黑白も分かぬ暗に狂うて我上を襲ひ來るに氣がつき、今までたよれる肉體の小船が今にも碎け去つて我は獨り測り知られぬ千尋の暗の底から底へと沈み行かねばならぬのを覺つた時、どうして復ゆるやかに今までの夢の跡を追ふことができやう。是非とも眉の上の火を拂ふやうに瞬時も早く此苦海を脫れ出づるの道を求めねばならぬ。さらば其道は何れにあるか。いふまでもない。自ら此大濤小波をかきわけて、彼岸に漕ぎつけるのが當然である。世の多くの敎が、私共に示す所の道は是である。けれども私共果して之を成し遂ぐることができるであらうか。

自己現在の價値

三。 彼等は私共に敎へていふ「怒つてはならぬ、淫れてはならぬ、僞つてはならぬ、貪つてはならぬ。皆是れ苦の本である。私共は是等を打越えて、仁愛、純潔、溫和、精進、平正、智慧、此諸の德を失はぬやうにつとめねばならぬ」と。私共是等の敎をきく時、皆その正い道であることを思ふ而もさう思ひながら、それを其やうに行うてゆくことが難い。「德の修められざる、學の講ぜられざる、義を聞いて徙ること能はざる、不善改むること能はざる、是れ吾が憂なり」といふ孔子の憂は、私共の常の憂である。幸にして此憂がやんで、多少思ふ通りに道が修められ得た處が、之が末始終つゞけらるゝといふ見込がない。私は其一友人が頗るまちめであつたのが、思ひもよらず放逸の人になり下つたのを思ふ度ごとに自身の行末を恐ろしく思うて、全身が戰いて來ると、申してをる一青年を知つてをる。誠實に考へて參るときには、何人にも此恐がある。或婆羅門に眼を乞はれて其に應じたけれども、其者の餘りの無禮に怒を催して、永の間の修行の功を無にせられたといふ尊者舍利弗の話は、常に私共への誡めである。たとひ今自分が固く道の上に立つてをるとも、いつ之よりすべり落つるやも知れぬ。まして今さへ我を省みれば、あきるゝほど弱く愚かで又汚れてをるもの。どうしても私共は自分だけで安ずることができませぬ。隨つて此行きがたい自力の道を

易行の風航

すゝむことはできませぬ。かくいはゞ人は「怯弱下劣」と謗るであらう、「丈夫志幹の說」でないといふであらう。けれども他のうはさは如何にもあれ、私共の實相は、實に此より外はないのであります。

四。 さらば私共は如何に致さば宜いであらうか。進退維谷まりて、永く苦惱の海に泣き悶えねばならぬであらうか。否々。私共の行き易い一條の大道は茲に開かるゝのである。即ち是れ如來本願の大道である。

生死の苦海ほとりなし。　ひさしくしづめるわれらをば、
彌陀弘誓のふねのみぞ、　乘せてかならずわたしける。—「和讃」

如來は曠劫以來今日今時まで、「煩惱海に流轉し、生死海に漂沒し」てをる私共を引上げむがために、暫も斷間なき大行の大靈即ち般舟三昧より、やるせなき大悲の心に促されて此苦海の上に現れ、一人も漏さず、此罪惡の衆生を救はむといふ大願を示し、諸佛の本師本佛として、無上法王として今や其濟度の大船を私共の前に進めたまふのである。而して永劫の間片時もたえず私共を呼んで醒覺を促し、私共が一日も早く此御力を自覺して再び後戻せない不退の安住を得むことを待ち設けたまふのである。私共が今やあだなる迷妄の夢より覺めて、自分の苦惱と罪惡とに氣がつくやうになつたといふのも、亦是れ全く如來の御呼聲に引起されたゝめである。如來の御聲は既に私共の心の奥に響き來つたのである。如來は今や私共を去りたまふこと遠からぬのである。御親の御手は我が上に觸れたまふのである。ためらふべき時で、ない。溺るゝ者は一本の藁をも掴む。いかに身は罪の水に濡れてあらうともかまはぬ。衣は惱の血に汚されて居やうともかまはぬ。私共は直に其御手に縋つて我全身を其御船にまかせ奉らねばなりませぬ。之を思ふとき、誰か此光榮に泣かぬ者があらう。

難行易行の決判

五。 龍樹菩薩は、正しく此光榮に泣いた一人でありました。小乘大乘多くの經典を繙いても、安心の道が分らぬ。北ヒマラヤの山麓に入り又他の諸國に轉じて多くの人々に教を請うたけれども、やはり分ら

ぬ。そこで獨り苦心を重ねられたる結果、世の一切の教は立派に見ゆるけれども、皆是れ行じ難い、行じ易い大道は、一に如來の本願より外にないことに氣がつき、自ら「怯弱下劣」の仲間に入つて、始めて大安の境に進まれたのである。『易行品』及び『十二禮』の偈頌を讀む者は、いかに菩薩が之について自身に抑へがたい歡喜と感謝とを感じてをられたかを察することができます。自身既に此歡喜あり、感謝あり、是に於いて菩薩は、私共に苦惱と罪惡との自覺をすゝめられて後直に難行易行二道の區別を知らせて、難行の道は譬へは陸路をとつて山を越え谷を渡るが如きものであつて、やはり是れ苦の路であることを示し、易行の道は手丈夫なる船にのつて水上を進むが如き道であつて、眞に是れ樂の道であることを信じ樂はしめらるゝに到つたのである。私共苟も速に不退の大安に到りたいと思ふならば、必ずや菩薩の此切實なる指圖に從つて易行大願の道に進まねばなりませぬ。

六。 さらば如何にして斯道に進むことができるか。是れ道を求む

る者の多くが必ずや一度は起して參る所の疑問である。而して之は二つと分れます。即ち如何にして如來を認むべきかといふことゝ、いかにして如來に憑るべきかといふことである。けれども此二つは唯如來に向ふといふ一つによつて定めらるゝ。花を見やうと思はゞ唯花に向ふべきである。花に向ふとき、花が見える。若し花を背にして居ながら、傍の人が後に振向けといふにも拘はらず、私は先づ花を確に認めた後に振向かうといふ者があるならば、其人は、いつまでたつても花を見ることはできませぬ。大聖は私共に教へたまふ、「如來を信ぜよと。代々の善知識は私共を諭したまふ「唯此御慈悲の御親に向へ」と。私共は唯之に順つて此御親に向へばよい。強いて向ふのではない、眞實此世と自分とのありのまゝに氣がついたならば、向はずにをれぬのである。親鸞聖人は、たとひ師匠に欺かれて地獄に落つるとも後悔せぬと仰せられた。私共亦此男らしい決心を以て「向へ」と仰せらるゝ指導者の指圖に順つてたゞ此に向ふ、唯佛を念ふ。茲に佛を知ることが

できる。即ち此佛を念ふ念ひに佛來らせたまふのである。「信心清淨なれば、華開いて即ち佛を見たてまつる」とは此御旨である。佛既に私共に感ぜらる。母を見たる稚兒のやうに、私共は之に憑らずにをられぬ。而して此時いかにして馳せよるべきかといふ面倒はいらぬ、唯馳せ寄るべきである。久遠の昔より靈なる約束の御名の紐を以て結びつけられたる眞實の子が、今其眞實の御親を見て之に憑るとき、どうしていかにしての計ひなどがいらうか。ただ〳〵此儘この全身を其御手にまかすより外はない。既に我全身を一に如來の御手にまかす、此時一切の善、一切の德を完く成し遂ぐべき身の上に定められたのである。即ち必定の位に入つたのである。されば如來を念ずる時即ち救はれた時であつて、其間に些しの時間をも要せず又どうしてかうしての面倒も要せぬ。今彌陀佛の本願を憶念すれば、自然に即時に必定に入ると仰せられたのは、即ち此旨である。自然とは『歎異鈔』に「わがはからはざるを自然とまふすなり。これすなはち他力にてまします」と仰せら

自然の意義

れてあります。

自己の轉換

七。私共の心茲まで進んで我全體全く如來の願船に入つて見れば、私共は今や新に生まれ更はつたのである。「無始よりこのかた生死に輪回して出離を希求しならひたる迷情の自力心、本願の道理をきくところにて謙敬すれば、心命つくるときにてあらざるや」私共は茲に舊い心の命をすてゝ新たな佛心の命をえたのである。固と罪惡と苦惱と別のものではない、「身の惡事即ち苦、心の惡事即ち惱」であつて身心の罪惡即ち苦惱である。而して罪とは「心明了ならざれば則ち罪なりとす」。されば之と反して智慧は即ち德である、德は其自身幸福であり、安樂である。されば今まで思癡に蔽はれて罪惡の海に在つた者、今や如來の本願を聞いて佛智に歸し、我心、その御德に打融けて見れば、其時平安の光を感ぜまいと思うても感ぜずにをられぬ。而して振反つて過ぎ來つた苦惱の海を望む時、抑へがたい感謝の涙に咽ばずにをられませぬ。自分ながら打戰かるゝほどの淺ましいものであつて、今この仕

「最要鈔」

「十住毘婆娑」

合をいたゞく。何たる御慈悲であらうか。其上自分が今此身の上になるに到つたのも、彼の苦悩の波風が私を追ひ立てゝくれたゝめである。して見れば彼の波風の其中にも亦如來大悲の御力が動かせたまふのではないか。かく覩じ來れば「生死の苦海」は即ち如來によつて「光明の廣海」である。この光明の廣海を大悲の願船によつて渡り、靜かなる至德の風に吹かれて衆禍の波徐に轉ずるを望みつゝ速に「無量光明土」の彼岸に到るといふことは、實に申樣のない私共の光榮ではないか。

報恩の原由

既に此光榮に與かる上は、私共、どうして之に報いずして宜からうか。如來は未だ曾て私共に報謝を命じたまはぬ。されども命じたまはねば命じたまはぬほど私共は報謝致さねばならぬ。されど飜つて我身を顧るに、もとのまゝの古い罪の塊何ものも此御恩に酬いたてまつるに足るものをもつてをらぬ。が唯一つ今私共に如來の御名が與へられてある。我に與へられて今や我物とせられた此御名は我に於いて唯一の清淨なる者である、唯一の神聖なる者である。されば山奥の田舍人が都よりの客が齎らした土產の品を客に供ふるやうに私共は唯能く常に此唯一の清淨神聖なる如來の名號を稱へ揚げて其靈德を十方の我同胞と共に喜びまつりて、應に大悲弘誓の恩を報じ奉るのが即ち此たふとい光榮に與つた私共のつとめである。如來の子の生活は、佛德讃歎の生活であります。

報恩の要路

讃歎の生活

生涯の理想

八。それ故、龍樹菩薩は、その信念を得られて後は猛然として起ち、當時の誤まれる思想を摧き、永の其健闘の生涯をつゞけて、この御名の德音を四方に傳へ、終に其つとめのために、一身を敵手に捨てゝ顧られなかつたのである。

若人、決定の心を以て、獨り諸〳〵の勤苦を受け、獲る所の安穩の果を、一切と共にするは、諸佛の讃歎したまふ所なり。

一人を捨てゝ一家を成し、一家を捨てゝ一聚落を成し、一聚落を捨てゝ一國土を成し、一國土を捨てゝ己身を成し、己身を捨てゝ、以て正法のためにせよ。

心、涅槃に在りて、行、生死に在れ。

心、槃に槃し

若し一悪人をも捨つれば、即ち佛恩に背けるなり。されば悪人を捨つべからず。若し人、無量阿僧祇劫の中に於いて修め集むる所の佛道、大悲を根本とするも、若し貪慾、瞋恚、怖畏の心を以て、一人だも度すべき者を捨てなば是れ佛道の根を斷つなり。―「十住毘婆娑」

其御志の高く其御心の厚かつたこと、此の如くである故私共の向上の一門について、亦以上の懇な教を遺されたのであります。

九。 要するに龍樹菩薩の教義上の指圖は、破邪顯正の二つに分れて、顯正の一門に於いては、先づ難行易行の二道を區別して私共の取るべき道を明かにし、次に易行道の眞旨は一に如來の本願を憶念して、必定の身の上となるにあることを示し而して此上は專ら御名をたゝへ之を傳へて報恩のつとめを疎にしてはならぬことを教へられたのである。而して此三條の指圖は一々菩薩の一身上の經歷と照應して、兩々相並んで、斯道の大綱を明かにし以て大切な引立を私共に降したまふのであります。而して此菩薩以後の諸祖は、皆此三條の大綱により各秩序正しく、漸次に精細な指圖を示されたのであります。

第十一章　アユダ城の論主

（上）人格上の指導

天親菩薩造論說、歸命無礙光如來、
依修多羅顯眞實、光闡橫超大誓願

【讀方】天親菩薩、論を造りて說き、無礙光如來に歸命し、修多羅に依りて眞實を顯はし、橫超の大誓願を光闡したまふ。

【字義】一。無礙光如來とは、盡十方無礙光如來の略語であつて、天親菩薩が阿彌陀の名義により、十二光佛名の第三によつて唱へたまへる佛名である。宗祖は之を「尊號眞像銘文」に釋して仰せられた。「盡十方無礙光如來とまうすはすなはち阿彌陀如來なり。この如來は光明なり。盡十方といふは、盡はつくすといふ、こと〳〵くといふ。十方世界をつくして、こと〳〵くみちたまへるなり。無礙といふはさはることなしとなり。衆生の煩惱惡業にさへられざるなり。光如來とまうすは阿彌陀佛なり。この如來はすなはち不可思議光佛とまうす。この如來は智慧の相なり。十方微塵刹土にみちたまへりとしるべしとなり。」

修多羅の名義

二。修多羅とは經といふ義で、經文のことである。經文に眞理の珠玉を貫く糸である故である。今は多くの佛經の中、淨土の三經、殊に「大經」を申すのである。

光闡の字義

三。光闡とは、「光は廣なり、闡は暢ぶる也」（大經述文贊）。ひろく闡き暢ぶることをいふのである。

天親菩薩傳道の中心

【大意】天親菩薩は、「淨土論」を造つて其教を說かせられた。即ち自ら盡十方無礙光如來に歸命して、「大經」によつて、眞實功德の顯はれたまへる名號、及其御旨の實現せる淨土の莊嚴を私共に說き顯はし、橫超他力の御誓の意義を廣く宣べ示されました。

【文科】第二祖天親菩薩の御つくし下さつた要旨を、宣べたまふ一節である。固より其教義にも關してをるけれども、其御生涯にかゝはることが多い故、この一節について菩薩の御一生を宣ぶるのである。

一。ガンヂスの大河が靜に中央印度の境を流れてをる處昔その邊にアユダといふ一つの都があります。地理學者の間には、色々の議論があるやうでありますが其中の或有力な人の考では、之は多分今の

カカプールであるとのことであります。固と之は『勝鬘經』の會座に出でらるゝ勝鬘夫人の居られた所であつて、今より凡一千三百年前、唐の玄奘が此處を訪はれた頃は、穀物豐に實り、百果麗はしく熟して氣候溫和、風俗醇雅、市民は道に勵み學を勤めて寺も百餘、僧も三千人程あり各大乘小乘の教理を兼ね修めて居つて異教の徒は頗る少なかつたといふことであります。其頃此都の中に一つの古い寺院がありました。此寺こそ正に龍樹菩薩をうけて、初めて明かに純ら淨土他力の法門を宣べ、ねむごろに如來弘誓の大道を示された天親菩薩が數十年間の宣教の中心であつて、菩薩は此處で多くの聖教を著はされ、又四方の宗教者や國王政治家及び學者などを集めて其教義を講ぜられたのであります。

天親菩薩の一家

二。この天親、梵語でヴスバンドフ新に譯して世親といふ菩薩は、今より凡そ一千七百年程前、即ち釋尊滅後七百年の頃、印度に、現はれたる御方である。それ故、龍樹菩薩とは殆ど二百年程後れて居らるゝ。その故郷は北方ヒマラヤ山の麓なるガンドハーラ國の都プルンヤプラであつて實に『雜阿毘達磨論』の著者ドハルマトラータ(法救)、『毘婆娑論』の記者マノリタ(如意)の兩尊者及び彼の有名な脇尊者即ちパールシュワの本國である。家はカウシカといふ姓の婆羅門であつて、兄弟が三人あらせられた。そして皆ヴスバンドフと名乘つて居られた。けれども其第一の兄が小乘で滿足することが出來ぬため、進んで聖者彌勒の冥祐を受けて大乘の靜觀を凝し全く迷妄の執着を離れてアサングハ即ち無著といふ名を用ゐられ、一番下の弟が道に入つて比隣持「阪婆といふ名を用ゐられた故ヴスバンドフの名は獨り二番目の方が用ゐらるゝことになつた。通常天親といひ又世親と呼び上げてをるのは、即ち此人を指すのであります。

天親菩薩の小乘時代

三。此菩薩、天性頗る英でたまうて、才智極めて朗かに、博く一般の典籍に通じて加ふるに品行が餘程美はしくあつた。二人の兄弟と同じやうに初め小乘に入つて薩婆多部の學問を修められた。この學派は

自分といふものゝ存在を認めずして、外界の萬物のみが、眞實に存在してをるものであるといふことを論ずるものである。菩薩は此見解を固執して大に其反對者を破斥し、到る處敵なき有樣であつた。殊に其先進者たるマノリタの耻を雪いで、大に婆羅門の諸學者を破つてよりは菩薩の聲名盛に北方及び中央の印度に鳴り響いて王バーラーディトヤ即ち新日王の如きは深く菩薩の雅操に感じて、少からぬ金を贈つて之を賞しました。菩薩は之を受けて、直に其地方に佛院を興されたといふことである。かくて益々薩婆多部の皷吹を努めて、其派に於ける最要の證典たる『大毘婆沙』の講義に力を盡されたが、一日講義をすれば、すぐさま一偈を作つて其日の講義の大要を簡單に示された。かやうにして六百餘偈が出來上つて、『婆沙』の要旨、大抵之に收め盡されたやうに感ぜられた故、使を立てゝ之を其頃此學派の中心たるカシユミールの學者に送られた。之を見て彼國の學者は、菩薩によつて其派の教義が世に弘めらるゝのを痛く喜んだ。けれども猶不明の點があるといふので、亦使を遣はして此偈文の解釋を書かれむことを求めた。そこで菩薩は、必ずしも薩婆多部の教說に服せず、理の長ずる所だけを本として、處々、その別派なる經量部などの唱道によつて、こちらの誤を正し、恐れず、怯まず、大膽に其所見を發表せられた。是れ實に今日私共の手に傳へられてをる『俱舍論』であります。かくて此論出來した故、菩薩は之を再びカシユミールの學者に送られた。學者等は之を閲して、其自說に背くことの少くないのを見て、大に不滿を感じた。ために種々の反對者が新に彼方此方より起るやうになつた。新日王の妹の夫ヴスラタの『吠伽羅論解』カシユミールの論師サングハブハドラの『俱舍疏論』などは、即ち其主なるものであります。之について菩薩は前者のために三十二章の論文を著はして破却せられたけれども、後者のためには一編をも草せず、却つて、サングハブハドラが來るのを避けて他の地方へ轉せられた。サングハブハドラ大に愧ぢ怖れて書を贈つて其罪を謝した。菩薩は、たやすく之を容れて、かやうな反對の議論は、愈々我が大義を明か

にするものであると申されて、終に題を改めて『順正理論』と命せられた。門人の中に、之を自分の派の耻辱と感じた者のあつた時、菩薩は之に申された。「獅子が豕に會はずして去るのを見て、何處に豕よりも獅子が弱いといふやうな愚者があるか」と。其自信の大なると、溫かな寛容とは、洵に道を傳ふる者にとつて、たふとい手本であります。後年カシュミールの論師ビマラミトラが此菩薩の德を覺らず、ひたすら菩薩を怨んで、マティプラの林を過ぎた折、サング、バブハドラの墓前に伏し、淺ましくも菩薩を咀うた故心狂ひ血迸つて、改悛を叫びつゝ悶え死を致したと傳へらるゝのも餘程意旨のある傳說と思はれます。

天親菩薩の大乘修學

四　かくて菩薩は、益々其道の上に進まれたけれども、併し其小乘教說についての執着は少しも去らず、偏に小乘のみを釋尊の說きたまうた所であると信じて、大乘は釋尊の眞意に反いたものであると思ひ固めて居られた。其頃菩薩の兄無著アユダの都にをられて、日夜彌勒菩薩よりの靈感をうけて、高遠なる大乘の敎理を宣說してをられたが、弟

菩薩の小乘に對する執着について少からず心配せられて、之を抑ひ退くるべき機會の來るを待つてをられた。然るに幸にも、丁度、この頃菩薩は、北方印度から南に下つて、此地を過ぎられた。そこで無著は弟子を遣はして、之をアユダ城外に迎へられた。其弟子は菩薩に會うて共に都の西北の在なる一寺院に宿つて、其夜獨り『十地經』を讀誦せられた。嗚呼、此經典こそは實に『華嚴經』の一品であつて、正しく龍樹菩薩をして曩に『十住毘婆沙』を著はして他力大乘の御旨を發表せしめた所の經典である。天親菩薩、今や圖らずも、兄の弟子に迎へられて、此經典を聞く、何たる不思議の因緣であらうか。聰明なる菩薩は之をきいて、其義理のたへなるに感かれざるを得なかつた。而して飜つて、自分の既往を顧み、後悔の念が泉のやうに湧いて來て、抑へらるゝことができなかつた。「かくまで深遠高妙なる御法を今まで少しも辨へず、其上に之を誹謗して之に迫害を加へたのは、實に申樣のない程恐多いことである。而して是れ一に我舌のなす所である。舌こそ正に我罪の本である。

宜しく之を斷ち去つて此罪を詫びねばならぬ。」かやうに感ぜられて、直に自ら鋭い刀を執つて之を斷ち去らうとせられた處、ふと兄菩薩の聲を感ぜられた。「大乘の御教は至眞の理である、諸の聖者の讃揚したまふ處たよりたまふ處、之より外はない、私は今まで之を爾に教へやうと望んで居つたのに、今爾は自ら之に氣がついた、是程めでたいことはない、固より爾が今までの謗法の罪は輕くはない、されば暫て舌を斷つて何の役にたつか、爾の重い罪は、それ位で償ひ得らるゝと思ふか、されば今まで大乘を誹謗した其舌で、之からは大乘を讃揚せよ、かくせば一方では過を償ひ、一方では道を明かにすることができて、己のため、道のため、最も尊いことではないか」と。菩薩は之を聞いて飜然として悟る所があつて翌朝直にアユダの講堂に詣で兄の菩薩に會うて、熱心に大乘の教義を研究せられました。花のやうな此兄弟の情誼まことに麗はしいではありませぬか。かくて此花のやうに麗はしい情誼の中に、花のやうに麗はしい信念が新に菩薩の胸の上にさきにほふに到つた。

而して萬法唯心の大義は、正に其花の花瓣でありました。

五。 萬法唯心とは、どういふことであるか。是れ即ち小乘の唱ふる萬象實有の思想に一歩をすゝめたものであつて、宇宙一切の萬象は、皆是れ私共の精神の發現であることを認むる考であります。私共自分及び外界を見わたすに、此處に眼耳鼻舌身の五根がある、彼處に山河大地舍宅田園等の器界がある。私共は皆之を以て其々實在の性質をもつてをると認め、隨つて之を貪り之に拘はつてをる。けれども善く善く之を考ふるに私共の見てをるやうな事物が決して、そのまゝ外界にあるのではない。なぜかといへば先づ色について考へて見よ。私共は曉の雲が紫に輝くを見て、美いといふ。けれども紫の色は決して雲其者についてをるものではなく、唯一つの力の波動であるところの日光が雲より反射せられて、私共の眼と出會うて私共に與ふるところの感覺の模樣に過ぎぬ。夕の風が靜に吹いて其の聲が爽かであるといふ。けれども爽かな聲は決して風に具はつてをるものではなく亦一

つの氣の移動である所の風が、私共の耳に觸れて起し來る感覺の模樣である。其他香も味も、又堅いとか軟いとかいふ觸の性も、亦同じく感覺の模樣である。それ故、平生自分の外に實在してをると思ふ一切の現象、皆是れ感覺の模樣であつて、而して其感覺は亦是れ精神の活動の模樣である故私共の認むる一切の現象は、唯是れ精神に收まるべきものである。さらば其現象の本質、即ち私共の五官等を刺激して、其々の感覺を起す所の主體は、何であるかといへば、やはり精神的のものでなければならぬ。然らずば其が決して我精神に働き、我精神に感じて、我精神と關係をもつやうになることはできぬ故である。されば現象も其主體も、即ち「影像」も其本質」も、皆是れ精神の發現せるものである。少しく具にいへば、私共の心識の主たる「阿賴耶識」に、一切の事物を顯現する勢力が具はつてある。即ち萬象の「種子」がある。この「種子」が因緣果の理法に從つて、現はれ行く時、阿賴耶識の中に又之を緣として感ずる作用がある。それ故、感ぜらるゝものも、感ずるものも、皆阿賴耶識の作用であつて、一「阿賴耶」が發展して茲に一切の萬象を示して參るのである。外界既にかやうであれば、內界の現象が、亦同じく「阿賴耶」の作用であることは申すまでもない。それ故、外も內も所觀も能觀も、其體皆一阿賴耶であつて、心外に法はない、三界は唯一心である。遠きは大空のはてより、近くは芥子のやうな一念の細かな心まで、皆一切萬象を現はし出す功能を藏めてをる根本精神の「阿賴耶」の顯現であります。是れ即ち天親菩薩の唯心論の大要である。菩薩がコサンビの都城なる一堵室にあつて著はされた『唯識論』は、之を細に說明せられたものであります。

「唯識論」

唯心論と如來他力の信仰

六。併し唯心論といへばとて、單に我精神一つだけを見て、他の精神は凡て無視するといふやうな極端な思想ではありませぬ。茲には自他の精神が、共に相並んで存在することを認められてある。而して其等の精神が、各同似した業因によつて、同似した境界を現はして其中に住みつゝ、而も又其中に相異つた業因によつて、相異つた結果を受けつ

ゝ進んでをる。それ故、その相と用とこそ違へ、其體は皆同じく阿賴耶識の根本精神である。而して其凡てが依つてをる眞如の一理は、一切の精神に亙つて、其上に行はれてをる。今この一理を完全に自覺し、完全に開示したる精神が、即ち我佛我如來であらせらるゝ。即ち有漏雜染の心識の作用を離れて無漏清淨の智慧を示し、大なる圓い鏡の如く明らかであつて、其上に平等の法性を觀じて、永く我執を離れ、而も差別の機根を觀じて、常に正き教化の用を示し、而して自在に神通靈妙の力をあらはしたまひて、善常安樂の位にありて菩提涅槃の妙果を顯現したまふのが、即ち佛の御身である。それ故、如來は大なる心靈の天地に在つて、我精神の外に立ちたまふ靈體でありながら、而も其體私共の精神の底に行き亙れる眞如の一理其者を開示なされてある故、この眞如をたどつて我精神を動かし、此眞如によつて我精神に通じ、以て私を新にし、私を進めて、竟に其御心と私共とを同じものになしたまふ所の御方である。而して此不思議の御力に對しては、何物も邪魔をすることはできぬ。其御力は無邊である、其御光は無礙である。十方をつくして、その行き亙らせたまはぬ處はない。即ち是れ盡十方無礙光如來であらせらる。私共知らなかつた間は、いざ知らず、一たび之を知る、どうして一ずちに之に歸し、之を仰ぎ、之に順ひ、之にたよらずに居られやうか。ましてや如來は此御光を以て畏くも罪惡の私を護らむと呼びたまふのであるもの。私共は、つひに之に向はずにをられませぬ。されば道理上の研究より萬法唯心の大義に進まれたる天親菩薩は、そのまゝ龍樹菩薩の後を追うて實踐上の信念において、一心歸命の大道に進まれねばならなかつたのである。それ故、菩薩進んで『大經』を繙かるゝに及んで、其中に尊い御旨を觀じて、全く如來の大願に歸せられました。是に於いて始めて、唯識唯心の教理は、其實地の意義を得、生命を得たのであつて、此一心歸命の子房の上に立つて、萬法唯心の靈覺の花瓣は、始めて美しく、さき匂ふことができたのであります。

七。されば菩薩は、此花のやうな衷心の靈感を抑へ得ずして『大經』の

大義を論明せられむため、『淨土論』一卷の『華文』を著はさるゝ時、初めに「願生偈」の一頌をさゝげ、「世尊よ、我一心に盡十方無礙光如來に歸命して安樂の國に生まれむことを願ふ」といふ自督の信念を表白せられ、次に淨土の莊嚴と如來及び聖衆の靈德とを讃歎して、今之に進み入るべき身の上になつたことを感謝し、且つ一切の同胞が普く共に此境に進み入らむことを勸められたのである。而して是れ菩薩が勝手に畫き出だされた空想ではない。主に『大經』により傍ら『觀經』及び『小經』の經文、即ち修多羅に依られたのである。而も之が單に文字を列ねられた空文ではない、菩薩自身の實證である。それ故、言々句々、皆是れ生命ある文字であつて、明に眞實功德の顯現たる御名の御旨を示して、横に私共をして惡趣を超えしめたまふ如來の大誓願の御意を光く闡き示されたものである。今此偈において、「天親菩薩、論を造つて說き、無礙光如來に歸命し、修多羅に依りて眞實を顯はし、横超の大誓願を光闡したまふ」と仰せられたのは、即ち此故であります。此『淨土論』一篇こそは、實に是れ純粹に他力一乘の大道を示されたる最初の論疏であります。

天親菩薩の入寂

八。かくて此麗はしい信念と敎理との花の香は、廣く印度の內外に流れて、菩薩の澤山な聖敎は多數の學人に傳奉せられ、異敎の徒亦菩薩の名を聞いて、畏れぬ者はなかつたと申すことである。而して齡の進まるゝに隨つて、愈々盛に大法の宣說に勉められましたが、終に年八十に及んで、麗はしくアユダの城で逝去せられました。

天親菩薩と現代

九。菩薩歿後、年を重ぬること茲に一千七百年。其御一生の經歷の跡は、悉く是れ現代の私共に大なる指圖を與へらるるものと思はるゝ。淺墓な唯物論の思潮は今も昔と同じく世に流れて、私共をして自分の何たるを忘れしめやうと致してゐる。大乘の眞義を辨へ得ずして、其光が永遠の古にも輝き、今にも輝き、又永遠の後にも輝くべきものであるといふことを認め得ざる不信の嵐は、曾て菩薩を惑はしめたやうに、今も猶私共を惑はしめやうと致してゐる。殊に又極端に唯心の思想を誤り執して、佛を無みし救を亡みする驕慢無法の偏見は、一千七百年

前と同じく、一千七百年後の今日、やはり思想界の上に跳梁を極めてをる。唯物の迷謬を破り、大乘の尊嚴を悟り、而して宏大なる唯心の教理を究めて、謙遜に盡十方無礙光の如來の御前に跪かれたる天親菩薩の人格は、此の如き現代の思想界に對して、極めて切實なる、又強大なる提撕を降したまふものであると思ひます。

教義上の指導（下）

廣由本願力回向、爲度群生彰一心。
歸入功德大寶海、必獲入大會衆數。
得至蓮華藏世界、即證眞如法性身。
遊煩惱林現神通、入生死園示應化。

【讀方】廣く本願力の回向によりて、群生を度せむがために一心を彰はし功德の大寶海に歸入すれば、必ず大會衆の數に入ることを獲、蓮華藏世界に至

回向の名義

大會衆の名義

蓮華藏世界の名義

眞如法性身の名義

るを得て、即ち眞如法性の身を證し、煩惱の林に遊びて神通を現し、生死の園に入りて應化を示すとのたまへり。

【字義】一。回向とは此語の自働他働の二つの變化によつて、ふりむく、又はふりむけるの兩義をもつ。今はふりむけるの義であつて、めぐむ、あたへると同義である。隨つて、此語が、めぐまれたるものといふ名詞にも用ゐらるゝ。

二。大會衆とは、淨土の聖者の大會の方々を申すのである。

三。蓮華藏世界とは、「華嚴經」に出でたる名に依て、如來の淨土を指したまふ名である。如來の淨土は、蓮華の泥に汚れぬ如く、衆生の煩惱に汚れざる清淨圓滿なる眞如の德を藏めたる世界ゆゑ、蓮華藏世界といふ。「唯信鈔文意」に「極樂とまうすは、かの安樂淨土なり。よろづのたのしみ、つねにしてくるしみ、まじはらざるなり。かのくにに生ぬれば安養といへり。曇鸞和尚は、ほめたてまつりて、安養とまうすとのたまへり。また論には蓮華藏世界ともいへり」と仰せられてある。

四。眞如法性身とは、涅槃のことであつて、「眞とは體虛妄にあらず、如とは性改異なし」と「起信論義記」に說明され、又「法性とは此眞體普徧の義を明す」と同

じき書に説明されてある。この眞實常住普遍の眞如法性の體を即ち眞如法性の身と仰せらるゝのである。

五、應化とは、衆生の根機に應じて引接のために種々に化現する佛身を申すのである。

【大意】　天親菩薩は、私共群生なすくはむがために、廣く他力回向の義によつて、一心の道理をあらはし、功德海の如き御名の御力に歸すれば必ず此世にあつて淨土の聖者の中に列なる身上となり、後の世淨土に到り得たならば、すぐさま眞如法性の妙理を證りあらはすことができ、其後は、同胞をすくはむがために、釋尊のやうに、五濁の惡世にかへりて、煩惱の林にも神通の力を現はし、生死の園にも應化の身を示して、常に如來の大悲の行じ奉るのであるといふことを宣べさせられた。

【文科】　尊ら「淨土論」によつて、第二祖の教義上の指圖を示したまふ一節である。

一、一心歸命、此四字は實に是れ天親菩薩が、實踐的安立の第一基礎であつて、又其實踐上の指導の第一源泉であります。江州に於ける多くの川が、悉く琵琶の一大湖に歸し、而して其湖から澤山の水が一すぢの宇治川となつて流れ出づるやうに、天親菩薩が受け來られた一切の思想は、悉く皆一心歸命の一信水に歸し、而して此信水より、一切の實踐的指導の大流が滾々として湧き出づるのであります。

二、さらば其一心とは、どういふものであるかといふに其文字が示すやうに、一つになつた心である、雜りものゝない、變ることのない心である。固と私共平生の心を調べて見るに、少しも一つになつてをらぬ、惜む心愛する心、嫉む心、怨む心、慕ふ心、苦む心、樂む心、悲む心、喜ぶ心、貪る心、憐れむ心、其他量り知られぬ樣々の心が雜然として我心の中に亂れてをる。而して其間に少しもまとまりがない、即ち統一がないされば此心と彼思と衝突し、甲の情と乙の考と撞着し、矛盾軋轢、不和葛藤少しもたゆる時がない。それ故に私共の心中は、果てしなき亂軍の戰場となつて、其ために始終苦まさるゝのであります。かくまで亂れに亂れてをるのは本と何故であるか、私共が自分の上に自分の統理者を見ぬ故である。親を見ず、主を見ず、師を見ぬ故である。即ち我が靈十方無礙光の

一心は他力の向向なり

如來を仰ぎ奉らぬ故である。絶對眞如の一理其者の圓滿なる實現として、久遠劫來私共の上に無限の光明と無限の壽命とを以て長へに照鑒したまふ唯一の此如來を仰がず、之に背き之に離れ奉る故である。されば私共は速に此御親に歸らねばならぬ。此唯一の主たり師たる御佛に向はねばならぬ。多くのものも一つに向ふ時、一つに收まる。私共雜亂蠢動の心のまゝ、この唯一の佛に向ひ、此唯一の大靈の大命に歸する時、ちやうど唯一の的に向つて放たれた箭が、唯一すぢに走らざるを得ないやうに、私共の亂れがち爭ひがちの此心も我知らず一すぢに理められて、我精神の天地に於いて、申樣のない泰平を得るに到るのである。されば、一心歸命は唯一の救濟の道である。之を外にして救の道は決して開かれてありませぬ。天親菩薩が自身に此道に進まれたる上に、又私共をすくはむがために先づ此一心をすゝめらるゝのは此故であります。

三、それ故救濟の道は唯如來に對する一心である。而して此一心は正に私共の心に起る一心であるけれども是を以て決して私共自身の力で起したものと思うてはならぬ。此日々夜々動きづめ變りづめの心一瞬の間も純白になることのできぬ此心が、どうして自ら一心になることができやうか。然るに今確に一心になることができた。救はるゝことの一大事については確に偏に阿彌陀如來の御力のみに憑り奉ることができた。されば是れ正に如來の御力である。炎團の中に白い小石が見えたどうして之が炎團のこしらへたものであらうか。如來實に永遠の古より此亂れがちな私をも見捨てたまはず、絶えず我上に來り我上に向はせられたればこそ。我今如來に往き如來に向ひ奉るやうになつたのである。故に我が如來に向ふのは、如來我に向ひたまふ故である。我が一心に如來に歸するのは、如來其大なる本願の力を以て一心に我に降りたまうてある證據である。即ち私共が今まで泥に在つて泥の汚れを知らず自身及び自身の世界に執着して徒に苦み惱んだ此心を回らして、一すぢに如來に向ふのは、正しく如來が一如寶海の御座を想ち本願をおこし、御名を示し、其御心を回らして一すぢに我が上に向はせら

れた故である。それ故、向日葵の花の日に向ふのは、日が花に向ふためであるやうに、私共の回向は全く如來の回向に由るのである。若し此如來の回向がなかつたならば、雜亂の私共どうして一心の道に進むことができやう。今廣く本願力の回向によりて、群生を度せむがために一心を彰はすと示されたのは、此道理であります。

四、されば私共の胸に起り來る一心の信念は、縱ひ微かなやうに見えても、決して之を輕んじてはなりませぬ。火山の噴煙は其勢地上の火事の煙に劣るかも知れぬ。けれども後のは地上に生ぜし煙前のは地中より湧く煙である。それ故彼は一時にして消え、此は長へに消えずにをる。私共の信念も時には地上の虛威に劣るやうに見ゆることもあらう、間には惡魔の邪威に打勝たるゝやうに感ぜらるゝことがあるから知れぬ。けれども彼は幻である、表面だけの泡である。此は遠く如來の大御心より燃え來る常住の焰である、大靈の御胸の奥より通ひ來る永生の靈氣である。即ち是れ如來の御名、如來の御心其者である。それ

故この一心は、僞疑及び墮落の我心の中に起りながら、而も其體は虛僞諂曲の心ではない、至誠の心である、疑蓋雜亂の心ではない、確信の心である、又墮落迷沈の心ではない、進趣回向の心である。即ち如來が其本願に於いて示されたる至心信樂及び欲生の三信を該ね總べた所の大信である。故に大願茲に收まり、御名茲に現はれ隨つて如來の大御心茲に在すのである。其靈德海のやうに深く且つ大なることは申すまでもありませぬ。我が聖人は、『文類聚鈔』の中に次のやうに仰せられました。

一心は即ち是れ深心なり。深心は即ち是れ堅固の深信なり。堅固の深信は即ち是れ眞心より。眞心は即ち是れ金剛心なり。金剛心は即ち是れ無上心なり。無上心は即ち是れ淳一相續心なり。淳一相續心は即ち是れ大慶喜心なり。大慶喜心を獲ば、是心三不に遠し。是心三信に順ず。是心即ち是れ大菩提心なり。大菩提心は即ち是れ眞實の信心なり。眞實の信心は即ち是れ願作佛心なり。願作佛心は即ち是れ度衆生心なり。度衆生心は即ち是れ衆生を攝取して、安樂淨土に生せしむる心なり。是心即ち是れ畢竟平等心なり。是心は即

ち是れ大悲心なり。是心佛となり、是心是佛なり。これを如實修行相應と名づくる也。

かくまでの御德、其中に具はる故今此一心を功德大寶海と申されたのである。而して一心に此功德のあるのは、其體の御名に本づくのであれば、「功德とまうすは名號なり」とあるごとく、功德大寶海の名が本について如來の御名につくべきものであることは申すまでもありませぬ。

「一念多念證文」

功德大寶海

五　御名既に功德大寶海である。隨つて其顯現たる一心亦功德大寶海である。私共、一たび如來の本願を觀じて、心正に此一心の境に進む時どうして空しく過ぐる者があらうか。

本願力にあひぬれば、　むなしくすぐるひとぞなき。
功德の寶海みちゝて、　煩惱の濁水へだてなし。—「和讃」

濁れる水も一度大洋に入れば、瑠璃のやうな麗はしい水と改めらる。此一心の功德大寶の海は、之に歸入する私共の心の上に、能く無邊の聖德を滿足せしめて、その德を以て彩り、その德を以て飾り、遠く煩惱の濁りを離れしめたまふのである。それ故一たび此一心の大海に入つたならば、縱し暫くは既往の汚泥が猶我心に遺るとも、我本心は既に聖德の水に滿たさるゝのである。聖德の色に彩らるゝのである。それ故身は依然たる醜い有漏の凡夫であるけれども心は既に遥く光明の淨土に逍遥してをる。

超世の悲願きゝしより、　われらは生死の凡夫かは。
有漏の穢身はかはられど、　こゝろは淨土にすみあそぶ。—「和讃」

「親經」

我が肉は、もとの如く粗末の衣に包まれてをる。けれども我が本心は如來の賜はれる御名の御衣を着て、遥く如來の聖壇に跪いてをる。即ち如來淨土の大會に加はつて、其座に列りたまふ聖者と肩を並べてをる。聖者普賢も我友である。文殊菩薩も我友である。觀音勢至亦我が勝友となりたまふ。此等無數の聖者と我と、ちやうど同じ花瓣の中に列んで花蕋のやうに、共に皆麗はしき如來正覺の顯現せる大御心の

花の中に頭をそろへて、此花の蜜に飽き、此花の香に醉うて、長へに高上尊嚴の榮光に息ふことができるのである。功德の大寶海に歸入すれば、必ず大會衆の數に入るを獲と仰せられたのは此故であります。

永生の問題

六、是に於いて私共は、自ら永生の意義について觀得する所があります。私共が、まだ一心の信念を受けなかつた間は、身は全く無明の暗夜に在る故、眞實の智慧がない。それ故、永生などの問題については、いかに考へても何等の解決を得なかつた。然るに私共は喜ばねばならぬ。さつぱり分らなかつた此問題が、佛智の御力によつて、今は全く解決さるゝのである。科學、哲學、宗教學、一切の自力の分別によつては、どうしても開くことのできぬ此暗黑の鐵門が、他力回向の一信念の鍵によつて、たやすく開くことができるのである。どうして開くことができるか。如來を知り奉る故に、開くことができる。如來の本願は私共を救ひたまふより外はない。然るに此本願の救濟は、三十年五十年の世話をなし下さるゝのみで完うせらるべきものではない。私共を此人生に

（淨土論註）

證たまふのみで果さるべきものではない。恐多いことながら、實に御自身と私とを一つになしたまうて始めて滿足なさるゝのである。即ち御自身の完全にましますが如く、私共を完全になしたまひて、始めて滿足なさるゝのである。語をすゝめて申せば御自身の無量光なるが如く私共を無量光ならしめたまふと共に、御自身の無量壽なるが如く私共を無量壽ならしめたまうて、この小やかな自分をして、其無限廣大の御德を現はすことのできるやうになし下されて始めて滿足なさるゝのである。されば一たひ御名によつて、如來の御力にすがるとき私共は今までのと別に新たな生命を得るのである。「佛願に乘じて、我が命となす」唯今の此人間としての自分、人間としての靈魂の有無存否は如何にもあれ、私共は茲に如來によつて、私共も永久に存らふべき身と定められたのである。即ち親のあなたが長に在ますと同じく、其御手の中に、長へに在るべき身と定められたのである。如來の御名は實に此御約定の證券であります。然らば次に此御約定によつて私共

浄土實在の問題

未來受身の問題

の救はるべき救の御國の存在することも亦疑ふことはできぬ。而も此御國の浄さと自分の穢さとは測ることのできぬほど、かけはなれてをる。はなれてはをるけれども、自分のみならず、十方の衆生は日月星辰の西に向ふやうに皆この浄土に向ふ。而して其處には人生に夕の開ゆき亘るとき、永にたえぬ光が漂つてをる。このことが分つて參る故、如來の浄土は、我が心靈の上に、どうしても疑ふことのできぬ大事實となつて參ります。さらば未來に於ける我からだは如何やうなものであるかと問ふ人があるかも知れぬ。私共は答へます、肉體は心靈の衣である此衣を捨てた後に、如何なる衣を與へらるゝかは私共の憂ふべきことではない、獨旅ならば、いざ知らず、如來我につきそひたまふ必ずや其宜しと思召す衣を與へたまふに相違ない、了を知る者、親に如かず、私共は親にまかせて少しも憂へぬ。たゞ救はれた身の上であれば此世のものよりも、其身は極めて〳〵善いに違ひない、即ち『大經』に示さる、如く、「顏貌端正にして、世を超えて希有に、容色微妙にして天にもあらず、人にも非ず」といふことを信ずるのである。かくいはゞ次に又尋ぬる人があるかも知れぬ、浄土ありといはゞその風光はいかにと。私共は答へます、かやうなことが今の私共で明に觀じ得らるゝならば、如來は決して救の御名を成就したまふことはない、此御名の成就は御名ならでは外に、どうしても私共は如來及び其浄土を知ることができぬ故である。それ故私共は今浄土の風光を觀じて、それを語ることはできぬ。けれども御名を通して想ひ奉つて見れば、汚れに汚れてをる私を救ひたまふ御國であれば、竟に私を浄かならしめたまふ浄土であるに相違はない。又常に苦み悶えてをる私を救ひたまふ御國であれば常に私を樂ましめたまふ安養極樂の御國であるに相違はない。殊に絶對圓滿神力自在の如來の御德の現はれたまゝの御國であれば、美といふ美、善といふ善、眞といふ眞、完全の自由、本當の幸福、一つとして闕けたるものなく、御經の中に、七寶の樹林には、德風自然の曲をかなで、香清き蓮の花は、たえず雨のやうに散つてをると示されてあるが、實は是れ、

ほんの一分であつて、其尊嚴美妙の眞風光の全體はなか〳〵是位ではなく、遠く言語文字思慮を超えてをることゝ思はるゝ。それ故、たゞ宗祖聖人と共に、謹みて眞佛土を按ずれば佛は則ち是れ不可思議光如來なり、土は亦是れ無量光明土なり」と仰ぎ奉るより外はありませぬ。私共は、茲に諸の上善の人と倶に一處に會ふのである。かくて私共はどうしても疑ふことのできぬ御力に導かれ、どうしても疑ふことのできぬ御國に生まれ、靈覺の蓮華麗かに匂うて、一切の聖德を悉く藏めたまふ如來の此世界に在つて、即時に完全に眞如法性の本體を覺ることができるのである。「今蓮華藏世界に至るを得て即ち眞如法性の身を證す」と仰せられたのは、此故であります。

七、 私共の心身かく全く圓滿の境に到つて見れば、此時私共に又完全の妙用が加へらるゝといふことは、疑ふことができませぬ。我信念がしぶとき妄習のために蔽はるゝことの多い今日でさへ、自分の上には尊い任務が與へられて、其任務のために進められてをるのに、まして妄習全く去りて靈覺の光完全にかゞやき、我が全體が圓滿の域に昇るときに於いては、どうして完全な妙用が自分に起り來らぬといふことがあらうか。煩惱の林いかに稠くとも、自分は之を恐れず、如來の力によつて與へられたる神通を現はして其度生の大任を盡くすことができる。生死の獄いかほど苦しくとも、自分は之を厭はず、恰も園林に遊ぶ思を以て、樂んで時と處とに應じて其身を化現しつゝ、其濟世の聖務を行ふのである。是に於いて自分は全く如來と同體の妙果を得、如來と同樣の妙用を爲しつゝ、而も其妙果と妙用とを以て、如來に順ひ、如來を輔け、往いては如來に謝し、還つては衆生を濟ひ、往還常に如來の御國を莊嚴しつゝ、長へに其尊嚴なる榮光の道に歩むのである。天親菩薩は、『淨土論』の讃頌の終に、「何等の世界か佛法功德の寶なき、我願はくば皆往生して佛法を示すこと佛の如くならむことを」とて自ら速に此位に上らむことを願はれました。けれども之は單に菩薩自身のみの願たるべきものではない、正しく私共凡ての衆生の願たるべきものである。

向上の歴程

此願あり此望ありて、始めて私共現在の生活が意義を得生命を得て參るのである。生死の苦海は、今は報恩の道場である。私共の前途は、無窮の希望隨つて不斷の精進の旅路であります。

八。されば私共が向上については、一に現在に在つて近く如來の御力に接して私者の列に入り、二に將來に於いて完全なる妙覺の宅に入り、涅槃の屋に進み、而して三に圓滿なる救濟の大任に向つて走るといふ神聖の經路を踏むものであるが、皆是れ一心歸命の第一歩より踏出さるゝ結果であります。而して此一心は實に是れ如來の與へたまへるものであつて、正に佛心の流れ出でたものである。實に此佛心は一方において、此一心となつて私共の胸に降つて之を導き之を進ましめ、而して又一方においては其靈德を開いて、其國土を莊嚴し、其聖衆を莊嚴して私共を迎へたまふのである。それ故開き表はされた國土の莊嚴、その輝きみてる光明より、そのさき匂へる草花まで、皆佛心其者の顯現であつて、之に進み入る衆生の信行、その一聲の稱名より其一拜の敬禮に到るまで、亦皆佛心其者の顯現である。「若しくは因、若しくは果、一事として阿彌陀如來の清淨願心の廻向成就したまふ所に非ることあることなく」、「若しくは往、若しくは還、一事として如來の清淨願心の廻向成就したまふ所に非ることあることなし」。心靈的向上の天地は、全く是れ一佛心の開展したる天地である。即ち眞實智慧の一法句の顯現である。されば心靈的向上の企畫は、此如來の御智慧以外に寸毫だも添えることはできず、又添えることは、要らぬのであります。

「淨土文類聚鈔」

龍樹菩薩と天親菩薩の化風上の關係

九。天親菩薩が、自ら其信念を打明けて、私共を指導せられたる『淨土論』は、此要旨を示されたものであります。而して其要旨が、一に一心の信念と其大用とに限られて、別に他教との關係を示さず所謂教判を行はれなかつたのは、蓋し是れ初祖の龍樹菩薩に讓られたるためと存じます。

第十二章　遙山寺の和尚

《上》人格上の指導

本師曇鸞梁天子　常向鸞處菩薩禮。
三藏流支授淨敎　焚燒仙經歸樂邦。
天親菩薩論註解　報土因果願誓願。

【讀方】本師曇鸞なば梁の天子常に鸞の處に向ひて菩薩と禮しき。三藏流支淨敎を授けしかば、仙經を焚燒して樂邦に歸したまひ、天親菩薩の論を註解して、報土の因果を誓願に願はしたまへり。

【字義】一。三藏とは經律論のことであるが、今は經律論の三藏に通じたる學者を三藏といふのである。

二。樂邦とは極樂のことである。

三。報土とは、因位の願行に報いて成就せられたる淨土といふ敎にして報身佛の居たまふ國土である。

三藏の名義

樂邦の名義

報土の名義

【大意】支那の梁の天子武帝は、常に曇鸞和尚の居たまふ方に向つて菩薩として敬禮を致されました。この曇鸞は、もと仙經を重んじてをられたが、菩提流支三藏より淨土の敎を授けられて、其仙經を燒きすてゝ樂邦の道に歸入せられ、天親菩薩の「淨土論」に註解を加へて、報土往生の因果、一に是れ如來誓願の他力によることを願はされました。

【文科】第三祖の生涯を宣べたまふ一節である。

一。龍樹菩薩一たび其壯烈なる敎化を印度に始めさせられた頃より佛敎の版圖は、著しく擴張されて參りました。而して多くの傳道者は勇ましく四方に進まれたのでありますが、殊に支那の方面に向つて盛に出で參られて熱心に敎義の宣傳に努められました。隨つて如來本願の御旨も此方々によつて、支那の處々に其種子を下されました。其結果として北方では長安南方では廬山が、斯敎の二つの中心となつて長安では、鳩摩羅什（クマラジーヴ）が、斯道を傳へ、廬山では慧遠が白蓮社を率ゐて、斯道を修めて居られた。但し未だ眞實他力の本義は顯はれずして、多くの方々が力を盡くされたのは、主に經論の飜譯であつた。

佛敎の支那傳來

支那淨土敎の興起

それで今日私共の手に傳はつてをる『大經』は曹魏の嘉平四年、即ち今年明治三十九年より一千六百五十四年前に、康僧鎧（サングヴルマン）により『阿彌陀經』はそれより百五十年を經て、姚秦の弘始四年に鳩摩羅什により、『觀經』は、それより又二三十年を經て、劉宋の元嘉の間に畺良耶舍（カーラヤシャス）によつて飜譯せられた。龍樹の『十住毘婆沙論』及び『智度論』も、羅什によつて、此間に譯せられました。此等の飜譯者を一般に三藏と呼んでをります。

菩提流支

二。此等の三藏の中に、菩提流支（ボードヒルチヒ）と申す方がありました。之は北方印度の人で、仲々の學者であり、又教化に熱心であつた故、多くの先輩の後を慕うて葱嶺を越え、畺良耶舍より、ざつと七十年程後、北魏の永平の初に支那に參られました。洛陽の永寧寺に居られて、永平二年天親菩薩の『淨土論』を飜譯せられ、猶外に澤山の經論をも譯出せられて、洛陽に於ける上下の歸依、甚だ厚くありました。然るに偶々此頃、江南の方より洛陽に來つた一人の僧がありました。流支は岡ら

曇鸞和尚の少年時代及び其修學

ずも此僧に遇うて、自ら大なる影響を後代の思想界に引き起さるゝ源泉となられました。此僧といふは外の方ではない、即ち曇鸞和尚であります。

三。曇鸞和尚此方は支那の北方の人であつて、今より千四百三十年前、即ち北魏の承明元年五臺山の附近に生まれた方であります。此山は固と文殊菩薩の靈蹟と傳へて、古より樣々の神異なる傳說が此山に關はつて其地方に傳へられて居つた。和尚深く之に感じて、まだ十五歲にもならなかつた頃、此山に入られた。然るに尊嚴なる此靈山の風光何となう其幼な心を動かして、衰心の神興醫へがたい程で、終に家を出でて、斷然道に進まるゝことになつた。而して先づ廣く內外の經籍に涉られた處、最も龍樹及び提婆兩師の示された理談を喜んで、龍樹の『中論』『十二門論』『智度論』及び提婆の『百論』は、勉めて其研究を注がれた所であつた。其後ふと『大集經』を讀まれました。が其文義頗る分りにくい故、どうぞ此經文の註釋を致したいと思はれて、其事に取かゝられ

た處半途で俄に病氣にかゝられた。それ故やむを得ず筆を止めて、いろいろと療養に力を盡くされたが、餘り其效果が見えなかつたのに、偶〻汾州秦陵の古城を過ぎて、其東門に到られた時、ふと高く蒼空を望まれた處、天門忽ち嚴かに開けて諸天の光景、歴然と眼に映るのを感じて病が全く癒えた。そこで再び是迄の事業を續けやうとせられたが、熟〻自分に思はるゝには、人命消え易くて、風前の燈のやうである、折角事を創むとも、命たえなば何の甲斐もない、それ故註釋の筆を進むる前、先づ長生の法を計らねばならぬ、と斯樣に考へられて、それより種々養生の途を調べられた處、其頃江南に陶弘景といふ隱者があつて、長生の仙法を心得て居るといふ評判が、頗る盛であつた。さらば其人を訪うて其法を受けやうと思はれて、ちやうど和尚五十歳程の頃遙に南方に赴いて楊子江を渡り、先づ當時威名甚だ盛であつた所の梁の武帝に會うて、それから陶弘景を尋ねられた。弘景は欣んで和尚に其『乘醍儀』十卷を贈つた。和尚亦深く喜ばれて、長生の法、之で必ず完うすることがで

きる、隨つて志す所の大業も間違なく成就することができると思ひ、竊に得々として北方に歸つて、洛陽に入られました。和尚が菩提流支に闖らず遊歴せられたのは、此時であります。

四。 和尚は新に長生の法を得て來たことについて、滿心の得意抑ふることができず、流支を見て尋ねられた。「三藏、佛敎の中に長生不死の法で此國の仙法よりも勝れた方法がありますか」。三藏、喝然、唾をぱつと地に吐きつけて言はるゝやう、「其方は何をいはるゝのであるか、此國の何處に長生不死の法などゝ申すことのできるものがあるか、少しばかり長生すとも必ず遠からず、死ぬに定まつてをる、竟に流轉の苦惱を免るゝことはできぬ、之に反して佛敎こそは眞の永生の道を敎ふるものである、それを知りたくば之を見られよ」とて示されたのは即ち『觀無量壽經』であつた。流支は此經文を和尚に渡して申さるゝには「見よ、是れ無量壽の佛を觀得して、無量壽の位に入るの經文である。其方若し眞實に之を會得せられたならば、永く生死の巷を脫して、盈虛成敗、禍福

曇鸞和尚と龍樹天親二祖との關係

利害少しも犯すことのない身の上となることができる。四十里立方の石を天女の羽衣で磨り盡くすには多くの年月がかゝる。けれども其方はそれよりも猶長い無窮の生命を得ることができる。之こそは佛教の長生の法である」と申されました。和尚は之を聞いて驚然として、今迄の考の淺墓なのに氣づかれた。そこで齎らし來られた『乘醍儀』『十卷』を斷乎として、燒き棄て、今迄の經路を一轉して、一すぢに『觀無量壽經』の研究をせられた。是に於いて通常の理談以上一歩を進められてある龍樹の『十住毘婆娑』は和尚にとつて、初めて尊い意味をもつて參り、流支の譯出せられたる天親の『淨土論』は大に和尚の志を進めて、終に和尚をして此論の本據なる『大經』の境域に入らしめました。和尚は、熟々其宏大なる教義を觀じて讃仰の思抑へらるゝことができぬ。そこで此經文の奥旨に基き、龍樹の『十二禮』について『讃阿彌陀佛偈』一篇を歌ひ、又龍樹の指導によつて、天親の『淨土論』を註釋し『淨土論註』二卷を著はして、如來の本願の結果として報いあらはれたる、佛土に參るについては、其

曇鸞和尚の『淨土論註』

曇鸞和尚の西方淨土觀

因の信念も、其果の大覺も、皆是れ一に如來の誓願に基づくものであることを顯はされ表面より見れば稍同じくないやうに見ゆる龍樹、天親兩祖の教義が其實全く一致してをるものであることを認めて、其上に深遠にして莊嚴なる淨土教の教理を發揮し説明せられました。『略論安樂淨土義』も、やはり斯道の御旨を簡略に示されたものである。かくて和尚の德風大に起つて感化自ら四方に及んだ。魏主は崇めて神鸞と呼んで幷州の大巖寺に請待をせられ、梁主は尊んで曇鸞菩薩といふて常に和尚の居らるゝ北方の空に向つて禮拜をせられた。今此『正信偈』の一節は和尚の以上の經歷を示されたのであります。

五。 ちやうど此頃である。多分魏の文帝でありませう、和尚に向つて質問をせられた「佛の光は到る處に滿ちてをる、さらば、十方皆是れ淨土ではありませぬか、和尚は何故に西方のみに意を向けらるゝのでありますか。」之は、古のみならず、今日猶多くの者の起し易い質問である。之に對して和尚は對へられた「十方皆是れ淨土ではあらうが、私共未だ

智慧が淺くあつて、平等の心地に住むことができぬ故同じやうに十方の淨土を念ずることができぬ、それ故騒ぎ易い牛は草を置いて槽櫪の中に安んぜしめねばならぬやうに、動き易いこと暴牛のやうな此心は、せひとも、一方に歸するところを得ねばならぬ」と申されました。圭角なくして、眞摯なる和尚の面目、髣髴として眼前に見ゆるやうである。

かういふ風であつた故、和尚の說かるゝ所には、高遠の理論があり、幽玄の談義が含まれてありながら、決して大風に灰を捲いたやうな工合でなくて、敎を受くる者をして皆歸する所あるやうに導かれました。

六。 晩年の和尚

其後間もなく汾州の北山に入り石壁といふ谷の中の玄忠寺に入られた。其間折々、介山の陰に往いて、道を多くの者に傳へられた。それで鸞公巖といふ名が其處に與へられた。それから暫く過ぎて、程遠からぬ遙山寺にうつられました。之がちやうど東魏の興和四年即ち日本に佛敎の傳はれるより十年前であります。和尚、年正に六十七。追々終に近づいて來たことをさとられて、折々龍樹菩薩を念じて、どうぞ自分の臨終には、更に指導を垂れらるゝやうにと、請うて居られた。然るに或宵のことであつた、一人の聖忽然として和尚の室に入られた。而して申さるゝには「わしは龍樹である、すでに落ちた葉は、更に枝につけることはできぬ。まだ束ねない粟は、倉の中に求むることはできぬ。時の過ぐるは早い。暫も留めて置くことはできぬ」と申された。和尚心に之を感じて死期の遠くないことを悟られた。そこで夜半使を馳せて村々の弟子を呼寄せられた處集まる者、三百人程あつた。乃ち懇に永遠の苦の恐るべきを告げ、偏に如來大願の力によつて、其淨かな御國へ參らねばならぬことを勸め、朗らかに湧き起る一同の御名の聲につゝまれ、翌朝日の出づる頃、自ら香爐をとつて、靜に瞑目せられました。魏主勅を下して汾西の秦陵に勝地をえらんで、和尚の靈廟を立てられた。石壁の村人も、亦遺德を慕うて、碑を玄忠寺に建てゝ、和尚の御一生の行迹を其上に記しました。

七。 遙山寺の和尚

かやうにして鸞和尚の生涯は終はられました。先づ靈山の

曇鸞和尚の後代に及ぼされたる影響

風光に感じて道を求め、養生のことに心がけたが縁となつて道に入り空門の理談より一轉して、實踐の大道に進まれ、而して斯大道の奥旨を發揮して、麗はしく之を裝はれ、初めて支那に完全なる大道の指圖をせられたる曇鸞和尚の生涯は終はりました。實に菩提流支が一喝の叱咤は和尚をして此やうな麗はしい生涯を完うせしめ、而して終に東方亞細亞に於ける淨土教の大潮流を湧き出ださしめました。而して其潮流遠く日本に及び、七百年の後、つひに親鸞聖人の土に濺ぎ來つて、聖人の心靈を潤ほすこと、甚だ多かつたのである。されば聖人は常に其深い渴仰の念を和尚の上に捧げてをられました。聖人既にさうであつて見れば、私共、亦聖人の後を追うて、和尚に接し、其指圖によつて、向上の歩をすゝめねばなりませぬ。

(下) 教義上の指導

往還回向由他力、正定之因唯信心。
惑染凡夫信心發、證知生死即涅槃。
必至無量光明土、諸有衆生皆普化。

往還回向の名義、

【讀方】往還の回向は他力に由り、正定の因は唯信心なり。惑染の凡夫信心を發せば生死即ち涅槃なりと證知し、必ず無量光明土に至りて、諸有の衆生皆普く化すとのたまへり。

【字義】一。往還の回向とは、具さには往相回向、還相回向の二つであつて、往相とは往生淨土の相、還相とは還來穢國の相といふこと。此淨土に往生することゝ、往生の後、又人間などの迷の境に還つて、衆生をすくふことゝは共に如來の回向したまふはたらき故、之を共に往相回向、還相回向といふのである。

諸有の名義

二。諸有といふは、あらゆるといふのと、二十五有といふのとの二義がある。二十五有とは迷の境界の分類であつて、四洲、（東弗婆提、南閻浮提、

四姓耶尼、北鬱單越四惡趣(修羅、餓鬼、畜生、地獄)、六欲天、梵天、無想天、淨居天、四禪天、四空處天、これを二十五有といふ。有とは存在の義で、四果の有樣の行はれてゐる處をいふ。今は凡て是等の迷の境を諸有と宣たまふのである。

【大意】往いて淨土に生まるゝのも、還つて衆生をすくふのも、共に他力に由る。其他力を信ずる一念の信心が、即ち私共をして正しく往生の身の上と定めていたゞく因である。それ故、道に惑ひ罪に染れてゐる私共凡夫、一たび此信心を發せば、生死の苦にあつて、このまゝ涅槃に向ふ道理を證ることができ、後に必ず無量光明の淨土に至つて、あらゆる苦惱の衆生を、皆導く教化し救濟することができる と仰せられた。

【文科】第三祖の教義上の指導を宣べたまふ一節である。而して之は主に淨土論註に據りたまふのである。

佛道の二方面―向上、向下

一。牛を尋ねて山に入るといふことがあれば、又それを連れて村に歸るといふことがある。花を看やうと思うて家を出づるといふことがあれば、又花の香に全身を浸して家にもどるといふことがある。私共道を修むる上において、家をも捨て、世をも捨て、學問にもよらず、道德にもよらず、よらぬといふ自分自身にも憑らずして、偏に功德大寶の大慈の海に歸入するといふことがあれば、又其大慈の波に動かされて、家に還り世に還り學問に還り、道德に還り、自分自身にさへ還つて、煩惱の林に神通を現じ、生死の園に應化を示すといふことがある。十九の年道を求めて山に入り、終に成道なさつた釋尊が、そのまゝ此世に來つて社會にあらはれ、五十年の間町より町に、村より村に、いろ〳〵の御苦勞をなさつたのは、正しく之を示してをります。

成道の因

二。さて此二つのことは、共に自分の心を回らして、偏に大道に向うて進むで參る相である。而して前のは、ひたすら如來の御位に往きつかむと望んで參る相である故、之を往相といひ、後のは振還つて苦に惱んでをる同胞を救ふ相である故、之を還相といふ、此二つが相揃うて初めて私共の修道の大事が完うせらるゝのであります。

往還の本

三。されば此二つは、共に私共にとつて大切な事柄である。如來の

末―自ら救はるゝは他を救ふの本也

大道も、總て此二つの中に收まつてしまふ。さりながら私共は此二つの間に本末の關係のあることを忘れてはなりませぬ。即ち往相は本である、還相は末である。往相によつて功德大寶の大慈を得たところで始めて還相の大悲を行ふことができるのである。山に入つて牛を得なければ、牛に騎つて村に歸ることはできぬ。家を出でゝ花を尋ねなければ、花の香に醉うて家にもどることはできぬ。往相の出離がなければ、決して還相の大行は現はるゝものではない。それ故、道に志す者の先づ求むべきは還相の大行でなくして、往相の向上である。往相の幹たしかに生長して參つて、還相の枝葉は自ら榮えて參るのである。古の明德を天下に明かにせんと欲する者は、先づ其心を正しうすといふことは、最も平凡であつて、最も正しい所の法則であります。

他力回向の自行

四。 されば「行さきむかひばかり見て、脚もとを見ねば、ふみかふる」かも知れぬ、利他の大行は先づ自行より始めねばならぬ。が、此自行を進むる時、私共は其由つて來る所を問違へてはなりませぬ。世には、向上主義は自力を重んずる主義でなければならぬと論じて居る者がある。之が即ち自行の由て來る源泉を間違へて居るといふものである。固より私共の眼で見る地上だけでは樹木の幹は自分の力で獨立し、自分ひとりで生長してをるやうである、けれども善く〳〵しらべて見れば、其獨立も其成長も、偏に私共の眼で見ることのできぬ地下に隱れてをる根があるためである。私共が道に進む、それはいふまでもなく自分が進むのである、他人が進むのではない、それ故ちよつと考へた處では、自分の力であるやうにも見ゆる、けれども善く考へて見れば、此自行自進の幹は、深く自分以上の境に其根をもつてをる、煩惱にさへられた私共の眼では、たやすく見ることのできぬ如來大靈の根あればこそ幹は茲に生じ、茲に立ち、茲に成長し行くのである。樹木の幹が、滋養分を吸收し、又それを同化する力或は役に立たぬ部分を排泄し去る力が、共に皆幹以外の部分より幹に與へられた作用であると同じく、我心靈の上に於いて德を吸ひ障

往還共に他力なり

を排する往相自行の作用亦一に如來大靈の他力によるのである。之を誤つて自力が主であるやうに思ひ、又は此自力によつて、彼の他力を得るのであると思ふのは、決して是れ道理の奥底を叩いた考でありませぬ。此誤謬は私共を驕慢にこそ導け、決して恭謙なる眞實の進趣を成さしむるものではない。それ故私共は往相の自行に勵みつゝ、而も之がまる〳〵他力に由るものであることを忘れてはなりませぬ。往相既に他力に由れば、それより現はれ來る還相、亦他力に由る。往くも他力、還るも他力、昇るも如來の昇らしめたまふのである。して見れば我一身の運命は、一に此如來大靈の他力にまかせ奉るより外はありませぬ。罪惡煩惱思へば思ふほど淺ましい者でありながら、今日唯今迄辱くも三惡の火坑にも落したまはず、此美はしい天地に、此ありがたい生活を得させて下さつた此慈悲の大靈は、必ずや又行末かけて永遠に私を益々光多く幸多き身の上に導きたまふに相違はありませぬ。こゝに私共の心が進んで見れば、も

信するは救はるゝ也

はや恐るゝこともいらず、憂ふることもいらぬ、一切の苦の雲さわやかに打拂はれて、心靈の空、月白く風清く、限りない清淨の歡喜を感じて參る。それ故、御慈悲を感ずる時、御慈悲が私に得らるゝのである。救を信ずる時救が正しく私に現はるゝのである。即ち今までは、佛の御方にあつては、佛の御心と私の心とが一つになつてあつたけれども、私の方にあつては、まだ私の心が佛の御心に融け合はなかつたのに、今は此感じの中に、此信心の上に私の心と佛の御心とが一つになつて、私共初めて正しく佛に到り佛に進む身の上と定められるゝのである。それ故往還共に他力の回向に由ると信ずる此信心が、即ち正定の因である。

機法一體

是れ曇鸞和尚の主として啓き示された道理であつて、實に其「淨土論註」の骨髓である。今往還の回向は他力に由り正定の因は唯信心なりと仰せられたのは、此旨を示されたものであります。

信心正因

五、嗚呼正定の因は唯信心なり」。何たる簡明の御語であらうか。學問いかに博くとも是れ正定の因ではない、道德どのやうに高くとも

亦正定の因ではない。祈禱、苦行、受戒、持律どんなに立派でも、亦正定の因ではない。正定の因は只々信心一つである。ちやうど順風に帆を揚げた船が安らかに客を彼岸に送り行くやうに、たゞ佛を信ずる此因緣の船のみが、私共を佛位の彼岸に到らしむるのである。されば此信心が、いかに微かなやうに見えても輕んじてはならぬ、一點の小燈一たび古い室に入れば、千歳の暗でも明かになるやうに、此信心の燈一度我胸に點せられて見れば、永劫以來の心の暗が、さらつと打拂はるゝのである。固より私共の今迄の迷妄の惑煩惱の染が、すぐさま洗ひ去らるゝのではない、古い室のこと故、その塵は仲々容易に拂ひ去られぬ、梁柱床襖などの穢れは仲々直に洗ひ清むることは難いけれども燈が入り來つたゝめ、今は其穢いまゝ明らかである。永い間染みついた惑染は舊に依つて殘つて居る、恐かな凡夫であることは今迄とあまり變りもない、それ故、私共の此肉身の存する限りは、相變らず生老病死の轉變の荒波が私共の上に打寄せて參る、隨つて病來らば他と同じく病まねばならぬ、死來らば他と同じく死して行かねばならぬ。けれども私共今や一念の信心によつて、如來常住の大光に浴してをる。それ故この轉變の波の中に在りながら、不朽の生命をいたゞいてをる。生死惑染の苦海に漂ひながら難思光明の法海に流れてをる。即ち有漏の穢身は少しも變はらずして、而も心は淨土に住み遊び、凡ての罪を滅し、迷を渡つて一天水のやうに澄み渡つた涅槃の妙趣を直に生死の迷と罪との波の上に味ふことができる。自分の境涯は、低く〳〵罪惡の底に墮ちてをる。涅槃の境涯は高く〳〵一切の德の上に超えてをる。而も今此最高と最下との二つが、一つの御慈悲の力によつて、離るゝことのできぬ程、固く相合うてをる。正しく是れ差別の處知を離れたる一個特別の生涯である。「惑染の凡夫、信心を發せば、生死即ち涅槃なりと證知す」と仰せられたのは、即ち此生涯を私共に示したまふ消息であります

六、此消息によつて、此生涯に入つてより、私共の進むべき前途は無量光明の淨土より外はありませぬ。曇鸞和尚は、天親菩薩の教示によ

一念の德

信後の生活

佛凡一體

淨土の莊嚴

つて、此淨土の莊嚴を具に『論註』の上に說かせられた。其莊嚴之を大きく別けていへば、一に國土の莊嚴、二に本佛の莊嚴、三に聖衆の莊嚴。この三つである。而して國土の莊嚴に十七種がある。即ち斯御國は遠く三界の道に越えて淸淨である。其大さ虛空の如くにて邊際がない。其體性は如來の大慈悲の生じたる所である。其形相は鏡の如く明かに淨かな光が滿ち〳〵てをる。諸の寶が具はつて自在に之を用うることができる。無垢の光物をも照し、心をも照す故表裏映徹して其色極めて勝れてをる。功德の草あなたこなたに生ひて觸るゝ者妙なる樂を感ずる。水淸らかに歌ひ、殿園四方に曜き、天樂空に響いてをる。花雨のやうにちりて國土に滿ち、德香普く薰つてをる。佛慧の日常に曜きて、無明の暗がない。梵聲は妙に十方に聞こゆる。佛力之を持ちたまふが故に、破壞することがない。聖衆は皆如來正覺の華より生まれたまふ。法の味を味ひ、禪定の食を食してをる。而して永に身心の惱を離れて樂を受くること絕間がない。惡道の名だもない。衆生一

切の望は悉く茲に滿たさるゝ。これが國土莊嚴である。次に本佛の莊嚴に八種がある。即ち最高無上の至尊は、微妙淸淨の花の臺に坐したまひ、御光一切の衆生に越え、御聲十方に朗に聞こえ、衆生虛誑の三業を治せむがために大御心平等にしまし〳〵て、聖衆皆其智慧の中より生まれ、須彌山の諸山に勝るるやうに、凡てに勝れたまひ、一切の人天皆恭敬をさゝげて、其御法に遇ふ者一人として空しく過ぐる者なく、凡て一切の功德を滿足する。これが本佛の莊嚴である。次に聖衆の莊嚴に四種がある。即ち斯御國の一切の聖衆は常に廣く佛事をつとめ、其光普く一切の衆生を照し、天樂及び花や香やを以て、常に諸佛にさゝげて其御德をたゝへ、常に勇猛の慈悲、堅固の志願を以て、若し佛法僧なき處あらば、此淨土を捨てゝ直に其處にゆいて佛法僧寶を住め持ち、又莊嚴して、佛種を永に其地に絕えざらしめやうと願はせられてある。これが聖衆の莊嚴である。この三種の莊嚴は皆是れ如來の願心の莊嚴である。四十八願の淸淨願心の成就したまへる所である。因が淨かであ

往生後の德相

る故、果も亦淨かである。私共、一たび此淨かな淨土に入つて見れば亦多くの聖衆と共に淨かな身の上にならずにをられぬ。今まで身のために樂を求めた貪著の思は遠く去つて「無染清淨の心」が起り、一切衆生をして生死の苦を離れしめやうとの「安清淨の心」が起り、又一切衆生をして大覺の位に入つて畢竟常樂を得しめやうとの「樂清淨の心」が起る。即ち「妙樂勝眞の心」が起る。かくて阿修羅の琴が、彈く者なくとも自然に麗はしく鳴るやうに、強いて努むる思もなくて、自然に二十五有の迷の境に在る衆生を皆普く教化することができる。是に於いて如來よりいたゞいた往相還相の二回向が、私共の上に、無限の發展を致すことであります。

二種の慈悲

慈悲に聖道淨土のかはりめあり。聖道の慈悲といふは、ものをあはれみ、かなしみ、はぐゝむなり。しかれども、おもふがごとくたすけとぐること、きはめてありがたし。また淨土の慈悲といふは、念佛していそぎ佛になりて、大慈大悲心をもて、おもふがごとく衆生を利益するをいふべきなり。今生にいかにいとなし不便とおもふとも、存知のごとくたすけがたければ、この慈悲始終なし。しかれば念佛まうすのみぞ、すゑとほりたる大慈悲心にてさふらふべき。—「歎異鈔」第四章。

報恩の大行

かばかり末とほりたる大慈悲が、外にどこにあらうか。私共は此大慈悲の力を享くることのできる身の上となつたのであります。「必ず無量光明土に至りて諸有の衆生、皆普く化す」とは此御旨であります。

七。現在より未來にかけて、永く、かくまでの恩惠を享くることゝなつて見れば私共は今は自己の運命を全く他力にまかせ奉つて、其上は唯報恩の稱名と共に、自分の上に命せらるる本務につとめつゝ、此恩惠を廣く世の同胞に頒たねばならぬ。私共時には自分には左樣の能力がないと嘆くことがある。けれども如來は必要なるだけの能力を必ずや私共に與へたまふのである。その與へらるゝ能力に順つて私共は勤めて參らねばならぬ。又時には他の誘惑に迷はされて腐敗し墮落するを氣づかふことがある。けれども防腐藥を塗り固めた種子

が水中にても腐らず必ず時を得て生長するやうに、私共は佛願を我命とし、如來の御光にて覆ひ固められて、我本心は永久の腐敗より救はれてをる。それ故私共は鄙屈の思に沈まず、恐怖の思に動かされず、唯大願業力の御誠にもたれながら、喜び勇んで自分の地位に小言をいはず、自分のつとめに不平なく、自分の境遇に恐癡をこぼさず、只々神聖なる大命の下に、いそしみ勵みて、萬國の同胞を悉く此眞實の御親の御前に集ひ跪かしむるやうに心がけねばなりませぬ。耳を我に傾くる者は申すまでもない、我に背く者亦皆呼び來らねばならぬ「よく〳〵念佛そしらんひとをたすけとおぼしめして、念佛しあはせたまふべく候」。味方する者はいふまでもなく、我に敵せむと努むる者亦招き寄せねばならぬ。啻に人類のみではない、同じ生類に生まれながら、而も身禽獸蟲魚に生まれて眞實大悲の御父を知らで過ぎ行くこと、いかばかりか可哀さうではないか。されば何とぞ渠等にも御名を聞かしたい。私共獨り、坐する折り、行く時、つとめて御名を稱へやう。私共の四邊に集

まつてをる小やかな哀れむべき渠等は、私共の唇より出でたまふ御名に觸れて必ずや厚い御緣を結ぶことであらう。如來の御子は啻に人間ばかりではない、諸有の衆生である。蝙飛蠕動の類でさへ、我名を聞かしめて其苦より救ひとらむと如來は誓はせられてある。私共は御親の此御誓を奉じて廣く諸有の衆生を敎化すべき神聖の大任を負んでをるのであります。私共は、手近き處より、一歩一歩此つとめのために進みたいと思ひます。

八。　茲に私共は、釋尊の御話を想ひ出さずにをられませぬ。或時一人の盲の比丘があつた。誰か德を愛して、私のために、鍼に糸を通してくれるであらうかと、獨りで嘆いてをつたのを聞かせられて、釋尊は禪定より起つて、其比丘の處に到り、「我は德を愛する者である」と仰せられて、其ために鍼に糸を通させられた。比丘、釋尊の御聲を聞き、驚きと喜びとに堪へず、白していふやうには「世尊よ、世尊の御德は、まだ充分に滿足なされぬのでありますか。」釋尊其時、報へて「德は圓に滿ちて、復た須

「我は德を愛する者也」

ゆる所はない。たゞ我此身は德より生じて德の恩分を知るが故に愛すと言うたのである」と仰せられました。洵に尊い御語であると思ひます。今私共を以て釋尊に比ぶるは畏多いことではあれど、他力の御慈悲によつて私共も釋尊に似寄らせていたゞいた身の上である。功德寶海の御名、既に我に降らせられてある故更に自分の身の上にとつては功德の用はない。而も我が唯今の本心は功德の寶海より生したるものである。眞實功德の御名が我が父である、眞實功德の御光が我が母である。私共は其恩分を忘れてはならぬ。此恩分に對して、德を愛し、德を享け以て德を世に分たねばなりませぬ。和尚は、其『讃阿彌陀佛偈』の終に於いて「我佛慈功德音を讃す、願はくは十方の諸の有緣に聞かしめむ」と仰せられてある。曇鸞和尚の志願は、やはり亦私共の志願でなければなりませぬ。

「我行は精進なり」

九。 絕對他力の信念は信ずる者の上に、此志願をあたへ、此策勵をあたへたまふのであります。如來は、其因位に於いて「我行は精進にして、忍ひて終に悔いざらむ」と仰せられた。私共、如來の子は精進でなければならぬ、安逸の子であつてはなりませぬ。

天親菩薩及び曇鸞和尚

一〇。 高遠なる曇鸞和尚の教義、之を玆に究めゝことは、たやすくありませぬ。さりながら其大切な骨髓は以上の如くである。而して之によつて、天親菩薩の教義が、いかばかり麗はしく、又明にせられたかは、彼是申す迄もありませぬ。

聖道浄土二門の名義

第十三章　石壁谷の禪師

《上》　人格上の指導

道綽決聖道難證、　唯明浄土可通入。

【讀方】　道綽、聖道の證し難きを決し、唯浄土の通入すべきを明にしたまふ。

【字義】　聖道浄土とは、茲には佛教を、二つに大きく分つた部門の名であつて、聖道門とは、聖者の修むる道であつて、此世にて完全な證りをひらく門、浄土門とは、未來、浄土に生まれて、彼世にて圓滿な福祉に入る門といふ意である。

【大意】　龍樹菩薩が難行易行の名を以て、曇鸞和尚は、自力他力の名を以て、佛教を二つに分けて指圖をせられた後に、道綽禪師は聖道門、浄土門の二つに釋尊一代の教示を分け、其中、聖道門の法は、今日の私共にとつては證り難いことゝ定め、たゞ浄土の一門のみが通入し得らるべきことを明かにせられました。

【文科】　これは第四祖の御一生の御苦勞の注がれてある二門の決判を宜べて

御一身の御苦勞を明し、隨つて其教義上の指導の大綱を明したまふ一節である。されば、今は此二句の御語について、禪師の御生涯を窺ふことゝ致します。

一、曇鸞和尚が、此世を去られましてより、多分其教化の御かげが大に與かつて力があらうと思ひますが、如來本願の御教は、著しく支那の天地に其光をあらはして參りました。而して慧光、法琳、僧柔、慧命、智舜、智通、道憑、寶亮及び安樂寺の慧海、浄影寺の善胄など、或は其厚い信念によつて斯道を傳へ、或は高遠な學德によつて斯道の御旨を顯はされました。殊に南岳の慧思、天台の智顗、浄影寺の慧遠、嘉祥寺の吉藏などは其主なる人であつて、色々の方面より斯道の流布を助けられました。けれども是等の方々の見解は、まだ自力の氣習を全く脱してをらぬ。それがため斯道についての議論は、頻りに行はれ、其見解盛に發表せられたけれども、曇鸞和尚によつて折角宣揚せられた他力の御旨は久しく其祖述者を得ることができなかつた。然るに幸なるかな、和尚殘後

道綽禪師の少年及び入門代の其時

正に六十七年石壁の谷なる玄忠寺の石碑はどのやうにか苔蒸して居つたことであらうのに、其石碑の前に跪いて、大に和尚の精神を再び明かにせやうと決心せられた御方があつた。道綽禪師は即ち是である。之は多分彼碑を立てた石壁の村人の思ひ設けなかつたことでありませう。

二。此道綽禪師は固と姓は衛と申され、曇鸞和尚の教化せられた地方の并州の人であつて、今より一千三百四十四年即ち和尚の逝かれてより丁度二十年の後、陳の天嘉三年に生まれられました。天性恭謙の方であつて早くより其地方に名が知られてあつた。其頃北方の支那では、周の武帝が正に位に即いた頃であつて、無法な迫害を佛教の上に加へ、經を破り、寺を壞し、佛像を毀つた。而して道安靜藹等のやうに、命を捨てゝ大法の相續を圖つた二三の壯烈なる佛徒の外多くの所謂僧尼は淺ましくも鄙劣にも此法敵の命令に從つて其服を更めた。然るに此頽瀾の中に在りながら、何たる健氣なことであらうか、禪師は奮つて佛門に入られた。是れ正に禪師が十四歲の時でありました。

道綽禪師の時代及び佛教の支那の及び其學禪師

三。其頃、支那一般の佛教界の思潮は、頗る多樣になりかけてあつた。一方に無著の『攝大乘論』を主とする攝論宗の徒があれば、又一方には訶利跋摩の『成實論』を主とする成實宗の徒がある。片方に皆空の論議を主とする者があれば、片方に持律の嚴正を主とする者がある。禪定を凝す者、念佛を修むる者、『法華』を讀む者、『華嚴』を信ずる者、今世に佛果を得たいと願ふ者、來世に彌勒菩薩の居らるゝ所へ參りたいと望む者、其外色々樣々の思想が起つて居つた。其中で『涅槃經』の經說を中心として、其如來常住、悉有佛性の教義を唱道する者が、三藏曇無讖以後、中々盛であつた。道綽は先づ主として此宗に屬して歩を進められた。而して其ためには廣く先進を尋ねて研究せられ、又其後には自ら他に對して其宣傳をなされた。而して前後『涅槃經』を講ぜられたこと、廿四遍にも及んだといふことである。けれどもまだ〳〵自分は之でよいと腰をするゝらるることができぬ。そこで一朝して、今までの研究を傍にして

ひたすら實修實證に心がけ、當時北方に道を傳へてをられたる慧讚禪師の下に參られた。此禪師は嚴肅清雅の高僧であつて、戒律の行修を主にして、自他の向上を努めて居られた。そのために道譽廣く北方に傳はつて、常に歸向の徒が市をなして居つたといふことである。道綽は暫く此禪師に隨つて色々に工夫せられたけれども、まだ安住の地に入ることができぬ。そこで竊に自分の能力のかよわいことに氣がついて、自分ながらもちあぐんで居られた處偶と玄忠寺に入らるゝことになつた。而して圖らずも曇鸞和尚の石碑を拜せられた。碑には具に和尚の行迹が記されてある。之を讀んで禪師は飜然として覺られずにはをられなかつた。而して禪師の鋭い聖淨二門の決判は、正に其結果として禪師の胸の中に崩して參つたのであります。

曇鸞和尚と道綽禪師の關係

道綽禪師の入道

四。 禪師は思はれた。曇鸞和尚、この方は是れ教門の泰斗ではないか。其智其德とても自分などの及ぶことのできぬほどの高僧ではないか。然も猶其智慧や道德がたのみにならぬことを悟つて、講究をやめ論議を擱き、自力の行修を全く打捨てゝ偏に他力の信念に走られたのである。然るに自分如きものが僅か小知見をたのみ小道德にたよらうとして居つたのは大なる間違であつた。固より知見も道德も尊くないといふことはない、是れ聖道である。信念固く行力強い聖者の修めらるゝ道である。若し自分の如き者でも釋尊の御在世に生まれ釋尊の座下に詣で、親しく其御引立を受けたならば或は此聖道の修行もできたかも知れぬ。けれども釋尊の其肉身は既に一千餘年の前クシナガラ城外の煙と消えさせたまうたのである。其法身は、とはに滅びたまはぬけれども、自分の安情は遠く之を隔てゝ自分は今親しく釋尊の指導を感ずることができぬ。其上聖道の理は深くあつて、自分の知見は微かである。此知見のみを以て彼理を會得せやうと試むるのは、ちやうど短い綆の釣瓶で深い井の水を汲まうとするのと同じことではないか。自分は此間違を致してはならぬ。全體、時と機と教とが合はなかつたならば、どうすることもできぬ。今の時は聖道の時ではな

時機及び教の相應

い、自分は聖道を修め得る機ではない、聖道の教は今日の時と自分の機とに合はぬ。此時に合ひ此機に應ずる唯一の教は即ち淨土門である。即ち聖道の如く現在に大覺の妙果を完うするといふ難い望を遂げやうとするのでなく、さればとて彌勒のをらるゝ處のやうな轉變無常の境界に生まるゝのでもなく、唯如來の御慈悲により其願力に導かれ、未來其最高安養の淨土にすゝんで其妙果を完うすることのできる往生淨土の一門のみ、自分の通入することのできる路である。自分は彼を捨てゝ此に進まねばならぬ。徒に修め難い聖道を修めやうと努めて、濕へる木を攢つて火を求め、乾いた薪を折つて水を覓むるやうな愚を學んではならぬ。これが正しく道綽禪師の決心でありました。されば此決心は禪師が自分の學解識見を以て、一代佛教を批判せられた上から得られたといふよりは寧ろ自分の能力を省みられたる謙遜の心より湧き出でた決心でありました。而して此決心を得られたのは、隋の大業五年の頃で、あつたといふことである。すれば禪師がちやうど

四十八歳の時であつたのであります。

五　私共は茲で曇鸞及び道綽の兩祖が、修道の精神の如何に烈しくあつたかといふことに心を留めねばなりませぬ。曇鸞の仙經を燒き棄てゝ翻然として、道に歸せられたのは歳五十に上つて居られた頃である。而して道綽が斯道に入られたのは四十八歳といふ。四十八歳五十歳、是れ多くの者が、退墮鄙屈自ら甘んずる時ではないか。殊に今日の人々を見るに、僅か二三年の工夫にも堪ゆることができずして、水に投じ火に入つて、死を急ぐ者が多いではないか。然るに兩祖は此年高くなるまで、忍ばれて勇ましく進まれたのである。畏敬にたえぬ次第ではありませぬか。かやうな猛烈な精神があつたればこそ、和尚は一片の碑文によつて、自分の忠實なる祖述者を得られたのである。禪師は一片の碑文の上に、自己向上の轉機を感得せられたのである。遙に六十七年の歳月を越えて、和尚の精神は直に禪師の精神に觸れ、禪師の精神は直に和尚の心靈に接し、兩者相感じ相合して、茲に斯道の歴史

に一圍の光彩を輝かすに至つたのである。嗚呼、隔世の師弟、一は彼世に在り、一は此世に在り、而も山中の古寺の庭上、一片古碑の前に、相遇うて共に道を語る。何たる麗はしい話ぞや。又何といふ不思議の因緣であらうか。而して道綽禪師が、此後の行路は茲に享けられたる決心によつて全く變はつてしまふことになりました。

道綽禪師の自行化他

六、今まで努められた『涅槃』の講說は、今は少しも爲されぬ。自力の考で勵むべき修行は、今少しも顧みられぬ。ひたすら他力の信仰に基いて、嚴に往生の大行をつとめられた。稱名は、日に七萬の定めであつた。此事で以て、どの位自行の上に勵精せられたかを推測ることができる。而して自行の進むと共に、利他の大行、亦禪師の忘れらるゝことのできぬ所であつた。そこで先づ地方の老幼に禮拜等の行儀を嚴しく守らしめ、又懇に稱名をすゝめられた。而して禪師は此上に、猶唐の貞觀以來屢〻『觀經』の講演をせられて、其度數、二百遍にも及んだといふことである。而して語は明かであり、義は易く、比事引喩、亦皆手近くあつた故、いつも老少男女競ひ集ひて、此等の人々が、席上折々唱ふる佛名の聲は、あたりの林谷に響き渡る程であつたといふ。此中には道撫といふやうな名僧もあつた。『華嚴經』を四十遍餘も講せられたる英法師といふ方も、禪師の道場に來つて、深く、多年の間空しく身心を文疏の間に勞らせてをつたことを嘆かれたと申すことである。後年燃ゆるやうな信念を以て、烈しく斯道を唱へられたる光明寺の善導大師も、正しく此頃禪師の會下に參られたのである。而して是等の方々は、皆禪師の『觀經』を本とせる熱心なる唱道によつて動かされたのであります。

道綽禪師の『安樂集』

七、かく一方には唱道に努めらるゝと共に、禪師は又一方には筆をとつて『觀經』の講義たる『安樂集』二卷を著はされました。想ふに龍樹以來、此經を疎かにせられた方はないけれども斯道においては是程迄に斯經を主として敷演せられた人はなかつた。然るに禪師は今や新に一歩を轉じて、主に斯經を本として指導を示さるゝことになつた。之はどういふ譯であるか。今其主なところについて窺へば、斯經が師曇

道綽禪師と『觀經』

「大經」思潮と「觀」

懲のために、向上の案内者となつたことが、少からず禪師の心を動かしたのであらう。又禪師自身の上より見れば、此經が特に末代の衆生のために念佛の行法を說いたものであることが、深く時代の澆季といふことについて感じてをられて、而も其性格が談理推究の方面よりは寧ろ靜觀靜修の實行的方面に傾いてをられたる禪師のためには捨つることのできぬ大切な指鍼となつたのであらう。又禪師が自身以外に對する上よりいへば、斯經が聖道一切の諸行を悉く導き來つて、唯他力念佛の一行に歸せしめたまふ其組立が、熟々聖道門の獨立的價値を否認し、且つ當時四方に群り起つた聖道門の諸學者の偏見を慨いて居られたる禪師のためには、大切な武器となつたことである。それ故師の和尙が『觀經』より『大經』に入り、天親菩薩の指導に順つて、前者を裏にし、後者を表にして、一代の指導をせられたることは、飽迄存しながら、又それとは精神は少しも違はずにをられながら、猶進んでいへば、師の敎化を一層完くせむがために、今は指導の形相だけは反對に『大經』を裏にし、

善導大師と道綽禪師の關係（三）

「安樂集」の宗外宗內に對する態度

思潮

『觀經』を表にして、其敎化を示されたのである。されば『安樂集』において、其說明の中心は、始終、師の和尙の精神を外れたまはぬ。常に和尙の敎へられたる所に本づいて、說明を進めて居らるゝ。それは此書二卷の中にいかに多く『淨土論註』及び『讚阿彌陀佛偈』の名と語と意味とが出てあるかを見れば明かである。されば禪師及び其門下を以て禪師以前の三祖と、全く系統を異にするが如く見る者は、是れ大に誤れる者である。其傳承の歷史より見ても、其指導の綱要より見ても、其同一の思潮であることは疑ふことはできませぬ。

八。此同一の思潮に樟して著された『安樂集』は、本經の『觀經』に本づき、其經文の組立に順ひ、一方では厚く淨土念佛の一行を勸めらるゝと共に、一方では聖道の諸行を導き、又其學者が懷いてをらるゝ多くの誤解を嚴しく匡してをらるゝ。即ち『攝大乘論』の一文句に固まつて、一念の念佛は決して往生の大事を果すに足るものでないといふ偏見に陷つてをる者、又皆空の理談に溺れて當來の往生を以て、一個の迷妄に過ぎ

ぬとあげつらふ者、又阿彌陀佛の佛身及び佛土は是れ眞實常住の佛身及び佛土ではなくして、幻のやうな化身及び化土であると謂まれる者此等の見解が頻りに當時の教界に行はれて、世の人の心を惑はすこと が多かつた故、禪師は經典により、道理により、細に之を破斥せられた。

それ故、二卷の『安樂集』は一方よりいへば親切なる往生の指導者であると共に、一方より申せば猛烈なる破邪の論駁者である。而して其指導は、一に淨土門の通入すべき唯一の路であることを明かにせんため、其論駁は唯聖道の證得しがたいことを決せんためである故、禪師が、自行化他、いづれにも通ずる唯一の本領は、唯此偈に仰せられた通り、「聖道の證しがたきことを決し、唯淨土の通入すべきを明かにしたまふ」より外はなかつたのであります。

九、かく禪師は此唯一の本領を守つて、種々の方面に力を盡くされたのでありますが、唐の貞觀三年四月八日、自ら終焉の近づいたことを感せられて、其儀を整へられました。然るに大空に天花散り亂れて、其

中に麗はしき船が現はれ、曇鸞和尚が其上に立たれて、禪師に向つて、「其許の參るべき淨土の座は出來上がつてをる、げれどもまだ此土に留まるべき因緣が盡きてをらぬ」と申されたのを感せられた。而して年七十に及んで、奇しくも齒が新に生へ、身體は健康を加へるやうになつた。其ために教化は再び盛になりました。げれども定命竟に終を告げて、如來一たび招かせたまふや、もう暫くも此世に留まらるゝことはできぬ、終に貞觀十九年四月二十四日、病にかゝり、病床に在ること四日、二十七日に到つて、別を惜んで集ひ來れる無數の同行の中に、靜に西方の空より降り來れる兩道の白光に迎へられて、瞑目せられました。御年正に八十四歳でありました。かくして初めて、『觀無量壽經』の旗幟を新に著しく斯道の歷史の上に飜へして、後來の壯觀をあらはし出すべき基を開かれたる道綽禪師は竟に、此世を立去られました。

一〇、熱心に道を求めてやまれなかつた禪師一代の經歷は、一度は道に志すことはあるけれども、幾くもなくして進むことに倦み、修むる

ことにつかれやすい今日の私共のために尊い叱咤を與へてくれられます。而して其八十の老境に及ぶまで、自行及び利他の上についての奮勵は、惰弱放逸の生涯に陷り易い私共のために深く感謝すべき督勵であります。微力なる私自身では何等の仕事をも果すことはできぬけれども如來、このために我上に在ます。御意にかなふことならば、何がなされぬといふことがあらう。どうぞ先聖の御跡を追うて、其後に續きたいと思ひます。一片の碑にもたふとき教がある。天地は大なる經典である。私共は報恩の思より、日々の生涯にあらはるゝ凡てを疎にせず、之を味ひ、之に鑑み、嚴しく固く自分の上に鍛錬陶冶を加へて道のため世のためにつとめて參らねばなりませぬ。

《下》 教義上の指導

萬善自力貶勤修、圓滿德號勸專稱。
三不三信誨懇懃、像末法滅同悲引。
一生造惡値弘誓、至安養界證妙果。

三不三信の名義

【讀方】萬善の自力は勤修を貶め、圓滿の德號は專稱をすゝめ、三不三信の一生造惡値弘誓、至安養界證妙果。

【字義】一。三不三信とは、三不信と三信とのことであつて、不眞實の信念は純厚でなく、一心でなく、又轉變動搖のものである。之を三不信といふ。三信とは眞實の信念に具はる淳心一心相續心の三つをいふ。墓變和尚さきに之を示され、道綽禪師、之を享けて細に論された。

二。像末法滅とは、釋尊の教法も、此世に於ける現象の一つであれば、其道理はいつもかはられども、其形相においては盛衰變化の理を免るゝことはできぬ。其について釋尊滅後、五百年の間は、教も殘り、之を行ふ者もあり、又證を開く者もある。之を正法の時代といふ。次の一千年間程は、教のみあり行ふ者もあれど證を開く者がない。像だけ正法の時に似てゐる故、之を像法の時代といふ。次の一萬年程は教だけあつて、實地に修行する者少くなり、

正像末三時の意義

聖道の本願と聖浄二門の決判

悲引

聖を仰ぐ者は猶更少くなる。之を末法の時代といふ。かくて次に法滅の時代が来る。かく其時代がなければ、又新に正法が起つて、この四つの時代が繰返さるゝこと、丁度春夏秋冬の移り変はるやうである。この釋尊の教についての像法、末法、法滅の三時代を今像末法滅とのたまふのである。

三、悲引とは慈悲を以てみちびくといふことである。

【大意】道綽禪師は自力の考で修むる萬善諸行をほめたまはず、専ら功德圓満の御名を信じ稱ふることをすゝめたまひ、船に三不三信の義を譬へて、像法末法、法滅の時代に亘つて、益々此本佛の大願の大道を宣べて私共衆生を導きたまひ、たとひ一生涯惡の中に沈むとも、此弘き御誓にあはゞ、皆安養の御浄土に至つて、たへなる大覺の果をさとり得ると仰せられた。

【文科】「安樂集」によつて、第四祖の教義を宣べたまふ一節である。

一。「聖道の證し難きことを決し、唯浄土の通入すべきを明かにしたまふ」此聖浄二門の決判が、正しく是れ道綽禪師の本領でありました。私共は此決判が、餘り簡單であるがために、其中に極めて痛烈な精神のこもつてあることを忘れてはなりませぬ。誰か老人ミリエルの門に

ウイクトル、ユーゴーの「ラミゼラブル」

「こは惱む者の家也」

立つた罪人ヂャン、ヴルヂャンの話をきいて、一滴の涙を催さぬ者があらう。夜は更けて参り、四方は暗黑である。風は身にしみわたるやうに吹いてをる。寒さと飢えと疲れとは、心の中の苦と共に渠の一身を責めさいなんで、獄中より痩せ衰へて出て來つた渠は、一歩を送るさへ山を動かすほどに難儀に思うてをる。而も誰一人宿を許す者がない。犬小舍から犬のためにさへ追ひ出ださるゝやうになつた。渠は今や氣の毒にも巷の隅で狂ひ死にするより外はなかつたのであります。然るに幸にも、渠は一人の老女の指圖によつて暗黑の中に、一點の燈火を見つけた。その案内によつて渠は其戸の前に立つた。「おはいりなさい」といふ主人の聲に導かれて、其溫かな燈の光を浴びるやうになつた。「此家は私の家ではない、誰でも艱難する人の家である、行暮れて惱む者が此家の主である。」これが主翁の語であつた　平生沈み勝のヂャンヴルヂャンゆゑ、此時も餘り多くを言はなかつた。其禮の辭も頗る簡單であつた。けれども其簡單の一言一句は、實は渠が涙の塊であ

つたのであります。今我禪師も亦心靈界の一ヂャン、ヴルヂャンである。遠い古より、煩惱の牢獄に苦まれたのである。永く無明の暗路に迷ひたまうたのである。起惡造罪の暴風驟雨は、絶えず其御身の上を惱ましたのである。其上に智慧の財に乏しく德の食に飢え、自力修行の脚は勞れて、而も何處にも休まるゝことができぬ。聖道に八萬四千の門があるといへど、聖道の罪人たる禪師は、四十八年の間是等の門より門へとさまようて、たえず敲いては宿を乞はれたけれども、一たびも許されなかつた。然るに思ひもよらず、玄忠寺の古碑は禪師を導いた。禪師は之によつて初めて他力救濟の門に立ち、「縱令一生造惡の衆生引接」の如來の御聲に招かれて、大悲の慈光の中に息はるゝに至つたのである。此時の禪師の心中どのやうであつたであらうか。其全心のありのまゝを打出だされたのが、即ち此二門の決判であります。それ故かく簡單でありながら、此決判は禪師の實驗の結果である、其眞心に輝いた確信の發表である。されば一見頗る冷やかなやうに見えて、而も

禪師は亦心靈界のヴルヂャンなり。

二門の決判は禪師の自身の實驗と確信との表白なり。

其底に深痛で凛烈なる意義が燃えてをるのである。二卷の『安樂集』は此意義を廣く宣べ示されたものであります。

二。されば『安樂集』一部全く是れ聖道の諸門をやめ、唯淨土の一門にのみ、進むべきを示されたものであります。彼諸門、いかに色々の善を勵ますとも、其萬善は自力である。此小さな汚れたる弱い自分の力で、縱し修め得らるゝにした處が、決して完全なものではない、とても自分をして全く此煩惱を脫却せしめて圓滿の妙果に到らしむるものではない、ましてそれさへ自分自身では眞に之を修むること極めてむつかしいのである。されば若しいつ迄も此萬善の勤修によらねば進まれぬならば、私共は「恒に三惡道を常の家として」其中に流轉せねばならぬ。然るに玆に淨土の一門がある。即ち是れ念佛の大行である。專ら唯一眞實の御親の御名を念ずる此大行、即ち是れ無量光明の淨土に進み入る唯一の門である。世には色々の了見違の者があつて、此佛身佛土を幻のやうに思ひ、又は此佛に歸し此國に向ふのを迷の路であると罵し

自力萬善の價値

佛身佛土の方便眞實

念佛の大行

つてをる。けれども之は芥子ほどでも起したならば我は許さぬと釋尊の呵したまへる偏空の邪見に陷つた者である、又眞實常住の大御心を覩得することのできぬ恐盲の妄見である。私共は之に惑うてはならぬ。又『攝大乘論』の文句に拘はつてをる者は、一念の念佛など決して往生の大事を果すに足らぬなどゝいうてをる。けれども之は百年かゝつて集めた薪でさへ、半日の間に燃し盡くさるゝ明白の道理を辨へぬ者である。私共は之に迷うてはならぬ。唯慈直に此念佛の一行に進むべきである。此念佛の一行によつて、私共は、初めて大覺の境に進むことができるのである。それは何故であるか。如來の御名は實に其全心の顯現なさつたもの、即ち清淨眞實の御慈悲、是れ一切の善の源である故である。然るに此清淨眞實の御慈悲、是れ一切の善の源である、凡ての德の泉である。されば今此御名をいたゞいて之を稱へ之を行ずるのは、是れ私共が畏多くも、一切の善の源、凡ての德の泉に接したのである。既に之に接した以上は、復た何者か、何時迄も之を障ふることがで

「觀佛三昧經」及び「安樂集」上

三不信及び三信の教旨

きやう。四十由旬四方の伊蘭の林は唯臭くして美い香がない、若し其花や果をたべる者があれば、氣が狂うて死んでしまふ、けれども一莖の栴檀があつて僅に芽を出だせば、林一面俄に香のよい處になつてしまふやうに、いかにしぶとい私共の罪惡の臭も、此永却無窮に洪水のやうに薫り來る大慈悲の御名に一度接觸すれば、一切の諸障の惡臭、皆除き去らるゝのである。されば此念佛の一行こそは、私共の進むべき唯一の門である。「一切衆生、罪を犯したる者の藥、戒を破りたる者の護、失道者の導、盲冥者の眼、恐癡の者の慧、恐闇の者の燈、煩惱の賊の中なる大勇猛の將、諸佛世尊の遊びたまふ所、首楞嚴等諸の大なる三昧の出生する處」即ち「一切三昧中の王」である。既に王であれば、別に他の劣れる者を要せぬ。唯此一行により、專ら此一行を修めて、一切の煩惱の中に奮鬪すべきである。全萬善の自力、勤修を貶め圓滿の德號、專稱をすゝむ」と仰せられたのは此故であります。

三、されば私共が進むべき門は既に定められた。私共は側目ふら、

ずに愚直に前進すべきである。此際若し徒らな疑のために妨げられて、空しくためらふやうなことがあつたならば、是れ自身を再び苦惱の囹圄に引戻してしまはうとするのである。なぜかといへば疑は私共に様々のはからひを與へて、たえず精神の上に動搖を引起す者である。それ故私共をして一個の確然たる決定の思を起さしめぬ。隨つて私共をして、折節は安らかなやうに感せしめても、その思を永く續かしむるといふことがなく、種々の思想のために雜亂せらるゝことを免るゝことができないやうにしてしまふためである。然るに私共善知識の手に導かれて疑ふことなく、慮ることなく、大行の門に飛び込む、今迄は疑げに認められた御慈悲の光が、今や正しく明に我を照されてあることを感ずる。而して夢でもなく、うつゝでもなく、その温い慈悲の御心は、春の風のやうに、現に我が我慢我情の堅い氷を融かし破りたまふのである。中に此實證を現實に感じ、且上外に大聖及び先賢の實證を認むるもの、どうして今更如來を疑ひ其御力を危むことができやう。既に疑はぬ、又危まぬ、心自ら様々の計度や分別をすてゝ、嬰兒のやうな、すなほな心になつて、唯靜に大悲の光に息ふやうになる。而して心自ら一つに定まつて、種々の煩惱や妄念の餘習は猶餘勢を逞うすることがあるけれども、此心のみは其中に一貫して、別に外の思想のために雜亂せられ了はるといふことがない。即ち淳であることゝ、一すぢであることゝ、相續して絶えないことゝ此三つの德が一つの眞實の信心に具はつて、不信の上に具はる不淳不一不相續の三つの害を永く遠かり、永遠に大安の妙境に住まふことができるのである。この確かな信念こそは、眞實の大行の本である。本立つて末自ら榮える。此信念の本が定まれば、根本既に淳一相續の德を具へて居る故、末葉亦淳一相續の性を失はず、他の道を混せず、淳に此最高至尊の念佛の一道のみを修め、常に異端外道のために雜亂せらるゝことがありませぬ。

念佛者は無碍の一道なり。そのいはれいかんとなれば信心の行者には、天神地祇も敬伏し、魔界外道も障礙することなし。罪惡も業報を感ずることあ

たはす、諸善も及ぶことなきゆゑに、無碍の一道なり。――「歎異鈔」

是れ傳弱怯劣なる私共自身の力ではない、全く如來の御慈悲によつて、其中に與へられたる確固たる淳一相續の信力によるのである。かくて無明の黑暗茲に永く破れ、一切の志願竟に滿たさるゝに到るのであります。

四。 是に於いて、私共は最早時代の早い遲いに關係はありませぬ。身早く釋尊の在世にも遇はず、正法の時代にも遲れて、遲く像法の時に生まれ、又は末法、若しくは法滅の時に生まるゝとも、同じく斯道の御力によつて救はるゝのである。正像末三時の轉變は、聖道の教法にこそあれ、淨土の大道は高く此轉變を超越したまうてある。なぜかといへば、聖道の教法は歷史上の釋尊の說かせられたものである。亦是れ此世の一現象たる上に、盛衰榮枯の其上に行はれぬことはない。然るに淨土の大道は歷史以上の本佛の大御心の顯現である。本佛如來の御壽命は無量である、如來既に常住の如來にて在せば、其超世大願の大道

淨土教の正像末の三時

亦どうして常住の大道でないことがあらうか。『大經』に「當來の世に經道滅盡せんに、我慈悲哀愍を以て、特に斯經を留めて止住すること百歲ならしめむ」と仰せられたのは、是れ歷史上の釋尊御一人我宜說したる諸の經法は滅盡することありとも斯教のみは、猶永く世に殘らせたいとの希望を示し、兼ねて、釋尊が如何に斯教法に重きを置かせらるゝかを示されたものである。決して大道其者の壽命を限らせられた御語ではありませぬ。故に『涅槃經』には「當に如來聖法及び聖會について常想をなすべし、常想を修むれば、則ち歸處あり。たとへば樹に因りて影あるが如し如來も亦爾り常法あるが故に、則ち歸依あり」と仰せられてある。常住にして變易ましまぬ如來の聖法は、亦常住にして變易なく常に私共の歸處となりたまふことは申す迄もありませぬ。この常住の如來、この常住の大道、之によらねば私共は決して眞實に救はるゝことはできませぬ。而して此常住なる本願の大道は則ち三不信の弊實を遠かつて三信の德を具へらるゝ一信念に住して、念佛の大行を修

「正像末和讃」

むる、之より外はありませぬ。『安樂集』は懇に之を誨へられました。「像末五濁の世となりて、釋迦の遺教かくれしむ、彌陀の悲願ひろまりて念佛往生さかりなり」。時を超え處を超えて、長へに普く及びたまふ御力によつて、私共は初めて安らかに進むことができる。「三不三信の誨慰懃にして、像末法滅同じく悲引す」と仰せられたのは此故であります。

自己運命の向上

五。かくの如く進んで一たび大悲の引接を受けて後は、私共別段に急いで大覺の妙果を求めぬ、まして彌勒菩薩の會下に參らうなどゝ思はぬ。一切の命運、悉く之を如來の御計に任せて唯自分は其篤厚なる光明の感化の中にいそしむ。而して此感化によりて、ちやうど暴く吹きすさむだ風は、旅人の外衣を脱がすことはできなかつたけれども、溫かに照した日の光は竟に安らかにそれを脱がしめたといふ話の如く、嚴肅なる戒律や道德の命令には、永劫以來容易には順はなかつた我が頑強の迷執も、此大慈の感化には敵し難く、一生の間、罪惡の種蒔きより外は爲さなかつた私共も、此如來弘誓の大道に値うて終に如來の招がせたまふ時、迷執の舊衣を脱し、罪惡の汚泥を洗ひ、慈悲の力に導かれ、慈悲の光に裝はれて其安養の世界に至つて、至妙の大果を證得するのである。嗚呼、蠟印を泥に印するや、其印の壞るゝ時は、即ち文の成る時である。此に死する時は即ち彼に生まるゝ時、淺ましき迷執の舊生涯終はる時は、尊き靈覺の新生涯始まる時、我が罪惡の古い命の絕ゆる時は即ち淨土の御園に我が坐すべき清淨の蓮華の一つ開く時である。本願を信受するは前念命終なり即得往生、は後念即生なり」。至幸至榮何ものか之に勝るものがあらう。「一生惡を造れども弘誓に値ひぬれば安養界に至りて妙果を證す」とは、即ち此旨であります。

「風光鈔」

我は召されつゝある者也

六。嗚呼、罪人であり無宿者たる彼チャン、ヴルチャンは終にミリエルの室に入つた。而して其後渠は其以前の渠ではなかつた。其一生の苦闘を通して渠の心は其老人と離れなかつた。竟に其老人の贈つた燭臺の下に、渠は安らかに眠るやうに終はつた。私共亦禪師と同じく心靈界のチャン、ヴルチャンとなるべきではありませぬか。無明の

夜どのやうに更けて、恐癡の暗いかに厚く四方を鎖すともかまはぬ。世の中の、色々の道は皆我を拒み我を斥くるともかまはぬ。起惡造罪の暴風駛雨は、どのやうに吹き荒れて修行の疲れと智德の乏しさとは、いかやうに我を苦しむるとも何でもない。視よ、他力本願の門は、正に此極重の惡人たる、三界の無宿者たる私共のために、今開かれてあるではないか。其窓よりは此末法濁亂の夜中にも拘はらず、明に一道の光が見ゆるではないか。聞け、私共が敲かぬさきに彼方より直に來れと私共を招きたまふ聲が聞こゆるではないか。今こゝで倒れてはならぬ又ためらうてはならぬ、今一息の勇を鼓して此門に進まねばならぬ。温き慈悲の光は室の中に輝いて居る。さま〳〵の功德の花は私のために其清らかな香を放つてをる。「五刼思惟の願をよく〳〵案ずればひとへに親鸞一人がためなりけり」。如來の來現も一に我がため淨土の莊嚴も一に我がためであつて、此自ら震慄するばかりの罪人たる自分自身が恐多くも、如來によつて神聖無上の如來の御

「歎異鈔」

國の主であつた。

縱令一生造惡の、
稱我名字と願しつゝ、
衆生引接のためにとて、
若不生者とちかひたり。―「和讃」

私共は只々感泣の涙に咽ぶより外はありませぬ。

第十四章　光明寺の大師

(上)　人格上の指導

善導獨明佛正意、　矜哀定散與逆惡。

【讀方】　善導獨り佛の正意に明かにして、定散と逆惡とを矜哀したまふ。

善導獨明の字義

【字義】一。獨りとは、支那に於ける浄土門内外の多くの學者、例へば浄影の慧遠、天台の智顗、又は迦才、慈愍などの方々の中で、善導大師獨り佛の正意に明かであつたとの意である。

定散二善の名義

二。定散とは、具にいへば定善散善であつて、大師の「觀經疏」に「定は即ち慮を息め、以て心を凝す。散は即ち惡を廢し以て善を修む」と仰せられてある。即ち靜に一切の妄念を拂つて、寂定の境に入るもの、これ一つの善である故、之を定善といふ。次に之とは異つて、差別の境遇に在つて、勤め勵みて道德的實行につとむる、其心は寂定でないけれども、亦一つの善である故、之を散善といふ。坐禪の如きは前者で、倫理道德の如きは、後者に屬するものである。共に是等を自力の考で行ふもの、是を今定散二善といふのである。

矜哀の字義

三。矜哀とは矜は矜と同義で、あはれむとの意である。

大法の歴史的風光(一)

【大意】　善導大師は、以前の列祖の敎を承けて、他の學者等と異つて、獨り佛の御本意を明かに會得し、一方には道に進みながらも、定散二善の自力の迷執のすたらぬもの、一方には未だ少しし道に心がけぬ逆惡のものをあはれみて、如來の御本意を明にして下された。

【文科】　第五祖の御德を宣べたまふ一節である

一。善導大師、私共は今や此大なる名によつて傳へらるる嚴い指導を受くべき場合に臨んで參りました。

二。若し大法の歴史の上に、若より夏にうつるやうな趣の時がありといふならば、それこそ正に此大師の指導が示された時代であります釋尊を受けて、龍樹、天親の兩祖相繼いで傳へられた斯道の奥旨は、曇鸞和尚によつて麗はしく顯はされ、道綽禪師は之をうけて直に此大師に傳へて其猛烈な指導が茲に起ることゝなつた。而して先聖後聖固より其揆は一であるけれども而も道綽禪師を中間にして前後の化風は

餘程その樣子をちがへてをらるゝ。道理の瑰麗宣說の莊嚴、これは前のに見るべきであつて、信仰の權威、靈覺の熱烈、これは後のに認むることができる。それ故若し前のを花のやうであるといふならば、後のは電のやうである。前のが春風のやうに溫かいならば、後のは雷霆の如くに烈しい。而して道綽禪師の指導は其間にあつて、ちやうど初夏のやうな爽やかな趣をもつてをらるゝ。それゆゑ和尙の敎のもとに醉うたやうに、夢みて居るやうに感じた私共は、禪師を經て此大師の指導に入つて見ると今更のやうに觸然として自ら畏れ毅然として自ら奮ふの思がある。春があり、夏があつて、萬物はそのために美はしく育つ。私共は是等の善知識が、相次いで私共の上に出で來られたについて、其上に深奧なる妙旨のあることを觀奉らずにはをられませぬ。それ故、古の人も、此大師を以て、釋尊の化現とし、又は如來の「大心海」より來り現はれて下さつた方であると認めて居られました。

三。

かく深奧の妙旨によつて來り現はれたまへる此大師は、どのやうな生涯を示された方であるか。或傳記者の傳へてをる所によれば、姓は朱氏であつて、もと泗州の人、今より一千二百九十三年前隋の大業九年に生まれた方である。幼少の頃密州の明勝といふ法師について出家せられた。此法師は興皇寺の法朗の弟子であつて、嘉祥寺の吉藏と同學である。三論宗の學匠であつた。大師が鋭い性格は此幼時の敎育よりも得られたことであらう。時々西方の天を仰ぎ、その莊麗のありさまを望んでは、どうしたならば、此濁惡の世をすてゝ心を如來の淨土に棲ましむることができるであらうかと歎せられた。後、具戒を妙開といふ律師によつて受けられ、先づ『法華』『維摩』の諸經を繙かれたけれども得る所がない。忽ち思はるゝやうは、敎門必ずしも一つに限らぬ、若し機に合はなかつたならば、いかに力を費すも無効である、されば是非とも我機にかなふ道を求めねばならぬと。そこで大藏に入つて、手にまかせて經文を探られた。其時、不思議にも大師の手に入つたのが即ち『觀經』であつた。そこで師と共に此經を看て、感ずること極め

善導大師の修行

て深く、諸行の路、皆迂僻であつて、而も仕遂ぐることが難い、唯斯經の示さるゝ觀法のみは定めて我をして此生死の迷路を脱れしむるものであらうと喜ばれました。

四。けれども大師の精神上の鍛錬は、まだ充分に進んでをらぬ。隨つて讀經の眼も亦充分に開けてをらぬ。それ故まだ經文の奥旨を洞觀せらるゝことができぬ。ために其表面に示された種々の觀法を、此經の本意と思うて、熱心に之を行はるゝことゝなつた。けれども裏心まだ安ずることができぬ。そこで二百五十年程前專ら念佛の觀法を修められた慧遠の高風を慕うて、南楊子江を渡り、廬山に入つて其遺範を見、ために豁然として頗る得らるゝ所があつた。それから遍く諸方の碩德を尋ねて、色々數をうけられて後嘗に思はるゝには、當に行ふへきの法、般舟三昧に過くるものはない。般舟三昧といふは常行道の修法の謂である。身常に佛を禮し、口常に佛を稱へ、意常に佛を念ふ、かくて三業常に淸淨ならば、どうして淨土に生まれぬことがあらうかと。

善導大師の修行時代に於ける內心の奮鬪

そこで終南の悟眞寺に隱れて、專ら斯道に嗣まれた。此處は山美しく溪靜かに、寺も亦淸らかであつて、靜觀の行に適してをつた。專心修道の功は漸くあらはれて參つた。まだ數年を經ぬ間に、心頗る澄み亘つて來て具に淸淨の境界が、さながら目前にあるやうに現はれたといふことである。此時の大師の神興は、いかばかりであつたであらうか。若し大師が大なる志のない人であつたならば、必ずや此神興に執着して、茲に全く腰をすゑられたに相違はない。けれども大師は之をせられなかつた。豁然起つて終南を出で、再び求道の旅路に上られました。是れ正に唐の貞觀十五年大師二十九歲の時でありました。

五。傳記者は、私共に此間の大師の御心の中が、どのやうであつたかといふことを話してをりませぬ。けれども私共嘗に之を察して見る時、いかに大師の修道の精神が切實であつたかといふことを感ぜずにはをられませぬ。想ふに大師は、此頃猶まだ自力の妄境を脱せられなかつたのである。自力の妄境にあつて、我慢我情を以て拮据奮勵、修行

に努むるとき、全く何等の結果もなしに、終はるといふことはない。終には身を殺すアルコホルも、一時は少からぬ快味を與へるやうに、自力の修行も、一時私共の前に種々の麗はしい境界を現はして、或は身も世も、皆透き徹つてをる妙靈の空に融け了はつたやうに感ぜしめ、或は自分も宇宙も皆俄に嚴かな光で燃え出したやうに思はしめて、私共をして是こそ眞實の道味である、我は正しく證に入つたのであると、思はしめます。けれどもアルコホルは竟にアルコホルである。迷妄は、やはり迷妄である。固と〳〵我心其者が「六塵に徧き心」「猿猴より劇しき識」である。一時進むことあるとも、決して永く濁らずにはをられぬ。どうして再び暴れ出さずにをはることがあらう。一時の淸心は「水に畫けるやうに」、さつさと消えて行く。殘る者は、いつも相變らずの「雜毒の善」である「虛假の行」である。而して其ために生じ來る永遠の苦痛は、どうしても離るゝことができぬ。されば自力の小安は夢幻である。自力所現の妙境は魔境である。共に是れ修道者に對する惡魔の呪詛である。學問であれ、道德であれ、宗教であれ、縱し御名の大行であれ、般舟三昧の淨行であれ、かりそめにも一點自力の我慢が、そこに交はるならば、たとひ一時少からぬ感興を興へて、私共を恍惚せしむることがあるとも、皆是れ大安の境でない。私共は盜をとらへて我子としてはならぬ。瞬間の神興に醉うて永遠の墮落を招いてはならぬ。如來の大道は一時の苟安を計るべき道ではない、無窮の大安の大道である。今大師は之を覺らせられた。そこで蹶然魔境を去つて、すばやく墮落の門を飛び退かれた。嗚呼、是れ今日の私共に對する警覺の鐵槌ではないか。之を想へば、一千二百年後の今日、猶凜然たる靈氣の身を貫くを覺ゆるのであります。

善導大師と道綽禪師

六。 かほどまで切に道に進まるゝ大師の志が、どうして酬はるゝことなくして終はることがあらうか。大師は、圖らずも、其頃道綽禪師が道を晉陽の地方に傳へて居らるゝを聞かれた。そこで遙に禪師を尋ねて、北方に向はれた。折しも冬の初めであつて、風の音烈しく、落葉が

深く路を埋めてしまうた。大師は靜に鉢を提げて、枯葉の滿ちてをる路傍の深坑に入り、安らかに其中に坐して一心に念佛せられた。覺えず、數日を經て後忽ち空中の聲を聞かれた。「前行するを得べし、所在遊履すとも、復罪礙なからむ」とのことであつた。大師は直に坑を出られた。さはりなく前行することができた。遂に道綽禪師に謁して、今迄の志を陳べられた。其時禪師は大師に『無量壽經』を授けられました。

七。 大師は此師により、此經を開き、茲に全く大安の光を認めらるゝことができた。彼の落葉深い坑中に降つた空中の聲は、單に形の上の前行を導かれたものでなく、又大師の心の前行を導かれたものであつた。無明の烈しい風によつて、大師の上に落ち來つた自力我慢の落葉は、今まで大師の精神をして幾度も躓かせたのである。大師は其ために少し進んでは妨げられ、少し歩みては倒されたのである。然るに大師は今や經文と善知識との指圖によつて、其吹き荒るゝ無明の風の中に、鎖しつめたる妄情の落葉の間にあつて、前行せよ、礙なく進むことを

得むとの大命を我胸よりでなく、自分以上の空より聽きとつて、大師は決然その障礙を逃れ去つて、今や大安の眞境に息はるゝに到つたのである。是に於いて、進むは自力によるべきではない、大命によるべきである、誠に自身は現に是れ罪惡生死の凡夫である、この凡夫が救はるゝのは、一に如來の攝受によるのである、大願淸淨の報土は、我情によつて得らるべきではない、唯我以上の如來の引導によつてのみ得らるべきものであるとの確信が、電のやうに、大師の胸の中に閃いた。此確信を以て、讀つて『觀無量壽經』を見る、今まで明らかでなかつた斯經の奥旨は、火の如く大師の前に輝いた。即ち經文の上に多く示されてある種々の觀法及び之と共に說いてある色々の道德は、唯是れ私共を導くために示されたものである。履は堂に到るには大切である。けれども其處に上る前に脫がねばならぬ。釋尊の御本意よりいへば、其觀法と其道德とは、竟に廢せらるべきものである、往生の本道ではない、正しく立てらるべき往生の本道は、唯最後に示されたる他力念佛の一行である

善導大師の自行化他

ことを會得せられました。

八。既にして五年の月日が立ちました。道綽禪師は其慇懃なる教化に終を告げて、此世を去られました。そこで大師は其確信を捧げて、偏に念佛の大行を世に傳へむがため、北方を去つて、長安の市に入られました。この都のほとりに、一つの川がある。大師曾て此に遊ばれて、其水聲を聞いて深く感ずる所があつて、それより五會の式を始め、貴賤を問はず、悉く之を勵まして御名を稱へしめられた。五會といふは、念佛のしらべを、五つに分つて、其に之を唱へさするのである。之は蓋し永徽の初頃からであつた。其頃より大師の自行化他の兩方面に於ける奮勵は殆ど、よのつねのものではなかつた。酒を飲まず、色に近かず、戲に語らるゝことがない、横に臥したまふことがない。入浴の外、衣を去ることがない。三衣瓶鉢これを人に洗はしめるといふことがない。市民の歸依厚くあつて、供養を受けらるゝことが多かつたけれども、殆ど凡て之を他人に與へて自分に用ゐぬ。食物の好いのは之を大衆に

與へ、自身は唯其粗末なのを食して、纔に命を支へてをらるゝ。而も坐して供養を受けらるゝことを好まず、常に申さるゝやうは、釋尊猶食を巷に求めさせられた、善導何人ぞ、安坐して供養を受けやうやと。受けた施は、之を以て多くの殿堂の修繕及び其佛燈の資に供へらるゝ。而して暇あれば經文を寫し、又淨土の莊嚴を畫かれた。其寫された阿彌陀經は十萬餘卷にも及び、其畫かれた畫は三百餘塔にも及んだと傳へられて居る。其堂に入つて念佛せらるゝや、力竭きなければやめられぬ。寒い頃でも汗を流さるゝ。或人は大師の稱名の度毎に、佛の御和が其御口より出でさせられたことを、見奉つたといふ。又或人が、念佛して淨土に生まるゝことができますかと問うた時、大師は、御身の念ずる通りに御身の願は遂げらるるぞよと仰せられて、自ら稱名をなつたれば、一聲毎に、光明が御口よりあらはれたといふことである。其外禮拜行道怠りたまふことがない。人を見れば、少しでも法を說き或は道場に導いて敎を聽かせ、まだ道に近づかぬ者には色々の手引によ

つて、之に浄土の教旨を授けらるゝ。かくして臨終に到るまで殆ど三十餘年、少しも倦まるゝといふことはなかつたのである。まことに驚嘆にたへぬ次第ではありませぬか。されば教化盛に長安及び其地方に及びて、大師の門前、常に市のやうであつた。日に萬餘の稱名をつとむる者數の知れぬ程であつて、中には此世の濁れるを厭ふ餘、自ら其命を早めた者さへ少くはなかつたといふことである。其一人の如きは、今、佛名を稱ふれば、必ず浄土に生まるゝことができますかと尋ねた時、大師が其通りであると仰せられたれば、其人は禮拜を終へて、御名を稱へながら、大師の御寺の門を出で門前の柳の上に登りて、西を望み、身を投げて亡くなつたと傳へられてある。かやうな勢であつた故長安の市のありさまが餘程變はつて來て、肉を食ふ者などが少くなつた。そのため姓は京といふ長安の一屠者が大師を恨み、大師の御寺に入つて殺し奉らうと致した。大師之を見て、西方を指された。其人、何となう嚴かな氣に撲たれて、直に罪を謝し、竟に道に入つたといふことである。

彼の自殺などは固より大師のすゝめられた所ではない。けれども大師の罪惡に就いての御話をきいて、自ら厭ひ自ら咎めて、かやうになつた者の少くないことや、又かく速に過を改めて道に入つた者のあつたのを見て、大師の傳道がいかに激しく、又いかに盛であつたかといふことが概ね推測られます。

九。 けれども大師がかくまで盛に弘められた其教は、當時多數の學者などの同意するものではなかつた。道綽禪師が熱心に播ひ除けやうとつとめられた天台の智顗、淨影寺の慧遠、及び嘉祥寺の吉藏等の唱道したる見解は、猶當時の教界に著しく行はれてをつた。此等の徒は其唱道者の思想をうけて『觀經』を讀者のための經文と誤解し、一經の本旨は觀念をすゝめたまふもので、其經說の對手たる王后韋提希は、法身の菩薩である、而して其中心たる佛及び其國は假に私共に應じて現はれたる應身の佛、應化の國であると認めて、全く斯經の眞實の精神をかくしてしまうて居る。それ故善導大師は、一方に於いて世の人々に、其

信仰を傳へらるゝと共に、又一方に於いて斯道のために、斯經のために、又先師のために、是等の學者の妄見を打破らねばならぬと考へられた。そこで新に斯經の註釋を書かうと企てられた。而も光は光によらねば見られぬ。佛心は佛心をもつて解せねばならぬ。聖典の註釋は私見や臆測で成し得らるべきものではない。それ故先づ第一に如來の直接の御指圖をうけねばならぬと考へられて、本尊の像前に跪いて、某、今この『觀經』の要義を出だして、古今を指定せむと欲す、若し「大悲の願意にかなはゞ夢の中にて靈驗を感せしめて下さるやうにと願はれた。其結願の夜、如來及び其淨土の御相が麗らかに拜せらるゝを感せられた。そこで「欣喜にたへず」すぐさま義門を條錄せられた處、これより已後、毎夜夢中に常に一僧來りて玄義の科文を指授せられた。其指授によつて斯經の玄義を分科し、本願の本義は、『大經』に基き、唯佛經のみを憑據として、他の指導を雜へず、明らかに一經の眞旨を發揮して、斯經の本旨は決してむつかしき觀念でない、平易な稱名をすゝめられたものである。韋提希は聖者ではない、罪惡の凡夫である。如來及び其御國は應身應土ではない、眞實、その因願に報いて現はれたまへる報身報土である。それ故、全經「定んで凡夫のためにして聖人のためのものでない。「佛の大悲は苦ある者に於いてす、心偏に常沒の衆生を憐念したまふ」。其御力は聖者よりも凡夫を主として救ひたまふのである。水に溺れた者をこそ濟ふべけれ、岸上の者は急いで濟ひたまふべき必要はない。それ故、一經の中、長く觀念の定行、道德の散行を說かせられたけれども、「佛の本願の意に望むれば、意衆生をして、一向に專ら彌陀の佛名を稱へしむるに在り」と宣言せられた。嗚呼、此宣言。極めて簡單な此宣言は、實に『觀經』の生命を開き示したものであつた。將に彼等學者の見解によつて、徒らに高遠の空文字となり了はらうとした此經は、此宣言によつて、初めて私共罪惡の凡夫のための開道者となつて下された。其上に却つて八萬四千の法門は、之によつて其獨立的價値を失ふやうになつたのである。今まで斯經によつて、念佛の大行を其從僕とせやうとして

報身報土

「觀經」の本義

居た聖道の諸教は、今や此經によつて、自ら其念佛の大行の從僕とならねばならぬやうになつたのである。公明世に日月に過ぐるものはない。而も此宣言は、大道の歴史に於いて、日月よりも猶明かな光を萬古にかゞやかす者である。されば大師自身、亦之を以て私の文字と認められぬ。「此義已に證を請うて定め竟はりぬ。一句一字加減すべからず。寫さんと欲する者、一に經法の如くせよ」と命じて居らるゝ。何といふ尊嚴の權威ぞ。かくして出來上つたのが即ち『觀經疏』四卷であります。

善導大師の著述

一〇。此の外に、大師は入信以後、報恩の精神によつて『彌陀經義』を著された。之は今は傳はつてをらぬ。又私共の修むべき行法を示さんため『觀念法門』二卷と『往生禮讃』『法事讃』及び『般舟讃』等を著はされた。共に燃ゆるやうな其衷心の實感の溢れたまへるものであつて、中にも『般舟讃』の如きは、五百餘行一千餘句の長篇の讃頌である。私共之を誦し行く時、其森嚴莊麗の文字の間に、又溫藉淡雅の聲調にも觸れて、さながら小やかな花の折々ほゝゑんでをる深山萬木の一路を通るやうな思がするのである。此の四部五卷の著と、彼の一部四卷の『疏』とが、即ち大師自身を今日の私共に顯はしたまふ門戸である。この門戸によつて私共は大師の本心に入ることができると共に、佛の正意を明かにし、今まで定散の諸門に迷ひ、逆惡の風雨に惱まされて居つたもの悉く大悲の慈光に息ふことができる。私共は深く大師の矜哀に感謝せねばなりませぬ。今此『正信偈』において「善導獨り佛の正意を明かにし、定散と逆惡とを矜哀したまふ」と仰せられたのは、此故であります。

善導大師の晩年

一一。かくて種々の方面に其全心をさゝげて盡くさせられましたが、唐の高宗永隆二年三月の中頃になつて、大師いつものやうに淨土の莊嚴を畫いてをられた處、俄に急いで之を書き上げられた。成人が其故を問ひたれば、二三日の後に、わしは往生するゆゑと申された。其語の如く、幾くもなく、ちよつとした疾にかゝつて、其月十四日、安らかに終はられました。時に六十九歳であらせられた。かくして私共のため

に支那に現はれたまへる大法の第五の指導者は、生前自ら望ませられたやうに、頓に他郷を捨てゝ本國に歸られたのであります。皇帝高宗、其德を仰ぎ、大師が稱名の折御口より光明が出たといふに因んで大師の御寺に號を奉つて、光明寺と申されました。

善導大師の生涯

一二。　尚に大師の一生は、其御寺の名の示すが如く、大師以上の嚴かな光明の一生でありました。初め道に入られたのは何に由つてゝあるか。不思議にも大藏に入つて『觀經』を得られた故である。中頃、道を進められたのは、何に由つてゝあるか。思ひもよらず落葉の坑に在つて、空中の聲を聞き、それによつて進まれたゝめである。終りに道をあらはされたのは、何に由つてゝあるか。毎夜其上に亦らせたまうた一僧の指授に由つたのである。實に大師の一生は、大師ならぬ其者の靈動したまへる一生であつた。即ち佛の御光、佛の大御心の顯現したまへる一生であつた。されば其四卷の『疏』も『觀經』其者の註釋であつて、而も其まゝ大師一生の歷史である。『語』をかへていへば、大師の『疏』も、大師の生涯も『觀經』其者の二面である。

善導大師の後代に及ぼされたる影響

一『觀經』が其經の文字となり、大師の生涯となり、又大師の『疏』となつたのである。而して此『觀經』の三面の中心は、いふまでもなく『大經』である。大師の自信の強くあつたのは偶然でない。其宣言の力あつたのも此故である。其敎化の盛であつたのも亦此故である。されば大師去りたまひて後、其光は決して失せぬ。管に失せぬのみではない、愈其輝きを增して參つた。中にも懷感は大師の門に出でゝ、專念に道を修め、『群疑論』を著はして斯光を傳へられた。又大師滅後、九十年程を經て、太曆の頃、法照、五臺山に登つて靈感をうけ厚く斯法を弘め、五會の式を承けて其中に伽陀即ち讃頌を雜へることにせられた。其後二十年程を經て貞元の初、少康、京洛の白馬寺に詣でゝ、大師化道の文を拜し、長安に於ける大師の影堂に入つて、深く感せらるゝ所あり、烏龍山を中心として弘く斯行を傳へられた。此二師共に後善導と世に稱へられて、大師自身の再來と認められて居られた。かくまで大師の敎化は、盛に東亞大陸の天地に行亘つたのでありますが、

其一道の光は遠く海を超えて日本に來り、こゝに一層宏大なる光輝を現はすに到りました。

（下）　教義上の指導

光明名號顯因緣、　開入本願大智海。
行者正受金剛心、　慶喜一念相應後、
與韋提等獲三忍、　即證法性之常樂。

行者の名義

金剛心の名義

【讀方】光明名號因緣を顯はし、本願の大智海に開入せしめ、行者正しく金剛心を受けて、慶喜一念相應の後は、韋提と等しく三忍を獲、即ち法性の常樂を證すとのたまへり。

【字義】一。行者とは道を行ひ修むる者との意であつて私共のことである。

二。金剛心とは、眞實の信心のことである。眞實の信心は、能く迷と惑とを破り、決して彼等のために破られぬこと、ちやうど金剛が他を破るも、他に破られぬに善く似てゐる故に、眞實の信心を金剛にたとへて金剛心と申すのである。「觀經疏」に、「此心、深信すること、なほ金剛の若し、一切の異見異學別解別行の人等のために動亂破壞せられず」と仰せられてある。

相應の字義

三忍の名義

三。相應とは、私共の信心が、本願の御旨に相應ふことである。

四。三忍とは、忍とは、私共の心が物を認知し決定することをいふのである。一念の信心の上にこの心のはたらきの、三つのすがたがある。即ち、一つは御慈悲を信じ、之にたよる思、之を信忍といふ。一つは歡喜のおもひ、是を喜忍といふ。一つは佛智を會得したる思、之を悟忍といふ。「正信偈大意」に、蓮如上人は次のやうに仰せられてある。「喜忍といふは、これ信心歡喜の得益なあらはすこゝろなり。悟忍といふは佛智をさとるこゝろなり。信忍といふは、すなはちこれ信心成就のすがたなり。」

【大意】善導大師は、私共の信心については、名號が其因であり、光明が其緣であることを顯はし、本願の佛智を開いて、此中に歸入せしめたまひ、私共若し正しく金剛の信心を受けて、御慈悲を喜び、一念、本願の御旨にかなふならば、摩竭陀の王后韋提希に同じく喜悟信の三忍をえて、幾程もなく、法性眞如のさとりをひらいて、常住妙樂の身の上に登ることができるのである。

【文科】『觀經疏』及び『往生禮讃』によつて、第五祖の教義上の指導を宣べたまふ一節である。

「『觀經』の本義」

「先づ己を見よ、そこに道あり」

一。『觀無量壽經』一卷の御思召を一言にて申さば、先づ己を見よ、そこに道あり、之より外はない。故に斯經を其賦附とせられたる我善導大師の教化の歸する所、亦先づ己を見よ、そこに道あり、之より外はない。

「道は邇きに在り」

洵に其六十九年の御一生は、身を以て、語を以て、又意を以て、此簡單な指圖を私共に與へたいために、棒げられた供養であります。

二。道はもと邇きに在る。それを私共は遠きに求むる。道が私共の依るべきものであり、踏むべきものである上は、遠く私共と隔たり、高く私共と離れて居てはならぬ。固より其到る所は遠く、極まる所は高い。而も一萬二千尺の富士山の頂上に私共を導く所の道は、近く又低く私共の爪先より始まつてをるやうに、遠くして高い大覺の臺に私共を引上げたまふ大道は近くして私共に接し低くして今直に私共が進むことのできるものでなければならぬ。即ち食を終はる間も之に違ふことがなく、道次にも必ず是に於いてし、顛沛にも必ず是に於いてし、一たび之を欲するか、斯に直に至るといふものでなければならぬ。さなくば私共殊に志弱く力薄い私共どうしてそれに進むことができやう。我が光明の御父は之を御心配なされた。そこで窮りない其御思と御力とを盡くして、遠き古に私共薄弱な此者が直に進むことのできる救濟の大道を開かせられたのである。之によつて私共は既に我眼の前に我爪先に我道を與へられたのである。けれども私共は驕慢の病に取りつかれてをる。眞實の智慧のないために、此病に狂はされて、遠きに行くは必ず邇きよりし、高きに登るは必ず卑きよりせねばならぬを忘れて、些しも低い處、近い處を見ぬ。唯高い處、遠い處にのみ眼を向けて、そこに自分の道を尋ねやうとつとむる。而して其病の募つた極彼の高く遠い處に何か道の影のやうなものをも認むれば、すぐに之が我道であるやうに思ひ又たやすく之が踏み得らるゝものゝやうに思うて、之に倫理道德の名を與へて、之に執じ、之に拘はつて、自分のことも

世間のことも、唯之のみで律して參らうとする。けれども天上の虹は、どのやうに麗はしくとも、私共の渡ることのできるものではない。かやうにして出來上つた倫理道德は、いかに立派に組立てられても、私共直に實地に之を踏み行ふといふことができぬ。形の上でこそ其裝を することはできれ、眞實、我が胸の奥で滿足する程の本當の善本當の德を掴むことが容易でない。うそでなく、僞でなく、本氣になつて一つ其規律に順うて行つて見やうとしても、其下から其本氣の堅砦がたがたと壞れ行いて、どうしても防ぎ止められぬことが多い。時には、うまく其道に順うことが出來たやうに思ふことがある。するとすぐ其後に、之を誇りたいやうな憍慢の惡魔がつきそうて居つて、今道を修め得たと思うてをる時は、其實、遠く〳〵道に背いてをる時であるのは、拒むことのできぬ我が內心の事實である。特に其外いかなる親しき者にも打明けられぬやうな恐ろしい妄念が我胸の底に殆ど動きづめに動いてをるのを感じては、一見すれば低く近いやうに見ゆる世の倫理道德が、實は高くして頗る遠いことを感せずにはをられぬ。之でもつて私共が、唯今より直に眞實の大安と向上とを得やうとすることは、とても望むことはできませぬ。私共の衷心の實驗が之を宣告してをる。それ故、かりそめにも眞實の大安と向上とを得るには、私共は此嚴かな宣告に順はねばならぬ。そして今までの憍慢の高い心より下り倫理道德のやうな高い遠い處でなく、近く又低く我脚下に開かれて、而も彼の倫理道德をも通ぬけて、覓には、遙に其上に昇ることのできる如來救濟の大道に眼をむけねばなりませぬ。嗚呼、先づ下れ、そこに大道あり。徒に高く遠くあつて、幻のやうなものは、低い此私共が今先直に進むべきものではない。私共が實地に踏み行くべき其者は、彼の天上の虹でなくして、脚もとの石橋である。「足もとを見ねばふみかふるべきなり」徒に天のみを仰いで溝の中に落ちた天文學者の愚を學んではなりませぬ。

三、されば釋尊は、私共をして此過を繰返させず、此度こそは私共を

先輩としての王后章提希

永遠のなやみより引き上げやうと思召されて、私共同胞の一人たる摩竭陀の王后章提希に對つて、先づ定善散善一切の修行を示させられ、之によつて觀行及び道德の實修がいかほど心想羸劣の凡夫たる章提希にとつては困難であるかを示し、此かよわい者のために開かれた唯一の活路は、唯如來の御名をたもつ一道より外にはないことを示させられた。章提希は「心歡喜を生じ、未曾有なりと歎じて廓然として大に悟らずには居られなかつた。而して章提希は私共同胞の一人である。此同胞の一人が、道を得たのは、即ち同胞全體が道を得べき證券である。それ故、章提希の侍女五百人も、之によつて斯道に進まれた。其後の多くの聖賢も、亦皆引續いて之によつて斯道に進まれた。而して「現に是れ罪惡生死の凡夫」たる我善導大師も、此證券により、其慢の頂上を下つて、先進の同行と同じく、脚下の斯道を見つけて、安らかに茲に立たるに至つたのである。此證券なくとも、私共は、如來の大道を疑ふべき寸毫の根據だも有してをらぬ。が、今や其上に此證券あり。私共は、ち

新なる我の父は御名なり、母は御光也

はや學問によらず、道德によらぬ。定善にたよらぬ。散善にすがらぬ。一切の雜行を拋つ。凡ての雜修に迷はぬ。ありとあらゆる我慢の荷物は悉く打捨てゝ、我罪惡の重荷もすつくり如來の御はからひに託して、全身何の負ふ所なく、かろ〳〵となつて「疑なく慮なく」急いで此等先進の迹を追はずには居られぬのであります。

四。此時私共の上に、大なる變革が起つて參る。そは何故かと申せば、永劫以來、どうしても離るゝことのできなかつた慢の病を今や其枝葉の上でなく、其根本において、切り去られた故である。今迄殆ど此小さな我の生命となつて居つた我執が全く頭をさげてしまつた故である。されば此時もはや元の我ではない。「身命」はもとのやうであるが、「心命」は此時取替へられたのである。我執の宿生命は前念に去つて大道の新生命は後念に入り來つたのである。即ち今迄は迷の中に生きて道の上には死んで居つたのに、今や迷に死んで道に生まれたのである。既に生まる。誰によつて生まれたか。遂く尋ぬるに及はぬ。

「往生禮讃」「御本書」「行卷」「執持鈔」

如來の御名、これが正しく私の御父である。如來の御光、これが正しく私の御母である。此御名と御光とは、其本について申しても、其體について申しても、共に同一の佛心である、同一の慈悲、同一の智慧である。

けれども之が私共に向つて御光と御名との二面に分れさせられた。即ち其私共に現はれたまふ御すがた、之が御名であつて、其私共に降りたまふ御はたらき、之が御光である。此御光が私共を育て下さつた、緣が熟して、私共は此御名の思召を領得し、佛心其者の御旨を感ずることに因つて、今迄の舊生活を去つて、新生活に入るを得たのである。されば取も直さず、此御名と御光とが、今の私のために父となり母となられて、畏くも此私を茲に生ませられたのである。されば今迄迷の子であつた私、罪の子であつた私は、今や御名の子、御光の子となつたのである。私は今や此尊き兩親をもつのである。私の血統は極めて尊く極めて正いのである。されば、こそ「念佛三昧に於いて信心決定せん人は、身も南無阿彌陀佛、こゝろも南無阿彌陀佛なりとおもふべきなり」。

「安心決定鈔」

佛智の天地

「末燈鈔」

我心の奥底には御慈悲の御血が通はせたまふのである。我肉の全體には、御光の御力が、漲らせたまふのである。たゞ我が内にのみでない、外も亦同じである。仰げ、我を蔽へる空、そこに嚴かな御威力の相が現れさせられてある。俯して見よ、我が立てる地、こゝに尊い御恩の流が遍く流れたまうてある。嗚呼、我宇宙は今や佛心の塊である、佛智の海である。父たる御名の因と母たる御光の緣とによつて生んでいたゞいた私は、今や正に私のために開かれたる大なる智慧の海に入らせていたゞいたのである。誰か既往を懷ひ、現在を思うて、自身の光榮に感泣せぬ者があらう。光明名號因緣を顯はし、本願の大智海に開入せしむと、此偈に仰せられたのは、此意を示されたものであります。

五、 かく私共の天地は今や佛智の天地である。外に證らせたまふ光明も、佛智の御はたらきであつて、内にいたゞいた信心も佛智の御すがたである。外も佛智、内も佛智、内外共に佛智で固めらるゝ故私共の本心之がために自ら清らかに又自ら固く、ちやうど金剛のやうである